

鹿児島県史料

玉里島津家
史料 一

題
字

土 鹿
屋 兒
佳 島
照 知
事

解 題

今回刊行する『玉里島津家史料』というのは、平成二年八月二十六日に物故された島津忠承^{ただつぐ}氏の所蔵になり、現在黎明館寄託中の文書類である。一般に玉里文庫として知られている史料があるが、これも同氏の所蔵にかかるものであったが、現在鹿児島大学付属図書館の所蔵になっている。島津忠承氏は久光の子忠^{ただなり}済の嗣子で久光の孫に当たり、したがって玉里島津家第三代の当主であった（第四代当主は忠廣氏）。ということはこの史料も玉里文庫と同じく久光に関係した文書類だということである。

玉里文庫については『玉里文庫目録』（昭和四十一年十月刊）に載せられた増村宏教授（東洋史学・当時付属図書館前館長）の序文に詳しい。したがってこれについては特に触れないが、その末尾に次のような注目すべき記述がある。

本「玉里文庫」を鹿児島県庁による明治年間の諸種の写本（現在鹿児島県立図書館蔵）、および市内磯の尚古集成館の諸史料、ならびに、現在東京大学史料編纂所に一括して入っている東京袖ガ崎島津家の旧「島津家臨時編輯所」所蔵のものと合わせる時、島津藩関係の史料はその主要なものをつくすことになる。

というもので、ここに上げられているものなかには、今回出版することになった『玉里島津家史料』は入っていない。この事は昭和四十一年当時、本史料の存在は鹿児島では知られていなかったことを示している。

そこで本史料の来歴が興味をひくが、この史料の刊行作業をするようになったのが平成二年度で、解説を書く段

になって調べ始めたのであるが、折しも御当主の島津忠承氏がお亡くなりになって十分なことが分かり兼ねる結果になった。分かった範囲で書いておく。鹿児島大学で『文庫目録』を出されて二年後の昭和四十三年、明治維新百年記念事業の一つとして現在の黎明館の建設準備室が発足、当分は建物ができないのでそこに展示する展示品の収集が始まった。ここで歴史担当になった北之園勇作氏の記憶によると、その一つとして玉里島津家の「討幕の密勅」を寄託してもらおうと上京の度に立ち寄っていた。島津家で相手をされたのは家扶の新納四郎氏だったという。そして密勅以外にも何かありませんかとお願いしていたという。

ところが昭和四十七年島津家では倉庫を取り壊して後を整理する事になったというので、資料類を県に寄託したということになりそれが実現したのだといい、寄託時期は昭和四十七年七月二十日である。北之園氏によると五トンコンテナ五台分を運んだという。太平洋戦争中袖が崎島津家では文書類史料は東大史料編纂所に保管を依頼され、戦後東大に譲られた経緯があるが、玉里島津家ではどうされたのか。壊すぐらいの倉庫に保管してあったという事は、相当前からのものだと考えられるし、元黎明館職員田村省三氏（現在島津興業尚古集成館勤務）によると同家は太平洋戦争の戦災は受けなかったという。『玉里文庫』は鹿児島に残されたが、これら資料類は東京に運ばれて爾来ずっと無事だったということのようである。

その寄託品の内訳を見ると次ぎのようである。

文書類

五九五三点

内 1 古文書史料

三八二〇

2 書籍、図面類

二二三三

骨とう、道具、諸書類

六二五四点

内 1 鎧

四

2 骨とう、道具、諸書類 六二五〇

総計

一二二〇七点

という膨大なもので、平成元年度末黎明館収集資料六五、五六五点中一八・六パーセント、寄託資料中二九・三パーセントに当たるといふ。今回刊行するものは上記のうち古文書史料の三八二〇点を対象である。

しかもその内容を見ると以下のように久光時代のものが圧倒的に多い。鹿児島県が寄託を受けたときに作成した目録で見ると、書冊式や巻物仕立て類を除いて文書類がそれぞれ封筒に入れてあり、その封筒の数がおよそ三三二九点ある。一つの封筒に二通三通の文書が入っていることもあり、既に空になっていて中味はまったく現存しない封筒だけのものもある。したがって当時現存するとされた文書通数は三六六二点という。しかし現在なくても本来保存されていたものであり、この史料の大勢をつかむために、封筒数だけから史料の年次別点数を比較してみることも、あながち見当外れでもあるまい。多少の誤差を恐れず以下に比較してみることにする。すなわち

万延以前

一一八点

文久から慶応まで七カ年

一六七七点

明治元年から十年まで十カ年

一一七〇点

明治十一年以後

五五点

年代不明

三〇九点

となり、文久慶応年間が断然多く五〇パーセントに達し、明治十年までが三五パーセントでこれに次ぐ。万延以前は微々たるもので、この史料が久光の活躍時代を中心に行っていることが分かる。

こうみてくると、島津久光の業績に深く関係するのがこの『玉里家史料』である事は否定できない。そこで今日『島津氏正統系図』（尚古集成館編）以外に、印刷された久光についてのまとまった年譜も無いようであり、『正統系図』ではやや不足する点もあると思われるので、これを補う意味で高島弥之助著『島津久光公』を主な史料として、以下年表風に久光の履歴を整理してみよう。（『島津久光公』と異なる日付は『正統系図』等を採用）。別に明治四十三年十一月の例言のある『島津久光公実紀』もありおおいに参考にしたが、例えば弘化四年十一月の参勤後の藩主名代任命を嘉永元年とする点、その達し文中に「当春早御暇之御願相成御下国」とあるのは弘化四年三月の斉興帰国を指すもので、嘉永元年説は明らかな誤りである。また久光が種子島家から本家に復帰したのを文政九年とするが、本資料目録によれば中の文書そのものは無くなっているものの、「普之進殿（久光）種子島家養子離縁ノ件」は文政八年三月とあり、肝心の『種子島家譜』も八年である。ただ「久光公自記履歴書」が九年としていることからこんな誤りが生じたもので、数十年後の久光の記憶もあやふやだったようである。さらに三郎への改名も文久二年五月十一日とするが、『旧記雑録追録』巻一六九によると十二日で『島津久光公』が正しい。又『実紀』は斉彬や斉興死去の日付は実際の死亡日ではなく藩で決めた忌日を記入しているが、ここでは実際の死亡日を採った。史料により月日など多くの相違があり判断に迷うが、できるだけ基本的と思われる史料によった。とはいっても前記の通りの事情で誤り無きを保証しがたい。

年代

事項

文化十四（一八一七）

一〇・二四生れる、父斉興、母岡田小藤次妹遊羅、通称普之進、のち又次郎、山城、周防、和泉、三郎。実名忠教、邦行、久光。字君輝。号大簡、雙松、玩古道人、無志翁、（少年時代徳洋）。大隅守、左近衛権中将、左大臣、従一位、大勲位、公爵

文政 元（一八一八）

三・一種子島藏人輔時（久道）養子

同 八（一八二五）

三・一三種子島家より本家に復帰、四月又次郎と改称、一一・一重富家島津忠公の娘千百子の婿養子となる

同 一〇（一八二七）

一二・一五鼓川の重富邸に入る

同 一一（一八二八）

二・一九元服、実名忠教

天保 二（一八三一）

正月養父忠公家督を継ぐ

同 七（一八三六）

二月千百子と婚儀

同 一〇（一八三九）

一月家督を継ぐ（『実紀』は一二月）。一二月山城と改称

弘化 四（一八四七）

一〇・一軍役方名代、周防と改称。一一月明年藩主参勤後の名代

嘉永 元（一八四八）

一・二二帖佐地頭職。四・一二藩主参勤後家老座出席藩政参与、城代上席にとの命。

五・二二軍役方名代免。八・二一斉興参勤

同 二（一八四九）

年末より翌三年にかけて朋党事件、（高崎崩れ、お遊羅騒動）

同 三（一八五〇）

高崎崩れ、四月再び軍役名代

同 四(一八五二)

二・二斉興退隱、斉彬藩主就任

安政 四(一八五七)

七・一蒲生地頭職、帖佐地頭職旧の如し(『実紀』は二日)

同 五(一八五八)

五・一三威臨丸鹿兒島訪問、斉彬は久光を勝海舟に紹介。七・一六斉彬死去、四九歳。

同 六(一八五九)

一・二・二久光の子又次郎藩主就任、斉興藩政後見

同 六(一八五九)

二・七又次郎実名忠徳を茂久に。九・一二斉興死去、六八歳(久光事実上藩政後見)。

万延 元(一八六〇)

一・一・五茂久、久光とはかり「精忠士面々へ」との論書をだす(精忠組脱出事件)

文久 元(一八六一)

三・三桜田門外の変

同 二(一八六二)

三・五藩政補佐。四・一九本家に復す、国父の礼、当分重富邸居住。

同 二(一八六二)

四・二三通称和泉、実名久光(「久光履歴書」は二〇日)。一〇月藩政改革

同 二(一八六二)

二・二四二の丸邸に移る(「忠義公年譜」)。三・一六鹿兒島発東上、四・六姫路で西郷

同 二(一八六二)

隆盛の捕縛を命ずる、四・一〇大阪着、四・一三伏見へ、四・一七京都錦小路藩邸に、四

同 二(一八六二)

・二三寺田屋事件。五・一二通称三郎。五・二三京都発江戸へ、六・七江戸着、幕政改革

同 二(一八六二)

につとめる、八・二一江戸発、生麦事件。閏八・八京都着、閏八・二三京都発、二九兵庫

同 二(一八六二)

乗船、九・七鹿兒島着

同 三(一八六三)

三・四鹿兒島発、三・一四京都着(二回目、知恩院借用)。三・一八京都発、四・一一鹿

同 三(一八六三)

兒島着。七・二薩英戦争。八・一八京都政変。九・一二鹿兒島発、二九兵庫着、一〇・三

同 三(一八六三)

京都新設の相国寺前二本松藩邸に(三回目)、号雙松、(一一・三〇久光の議により徳川

慶喜ら朝政参予に

元治 元（一八六四）

一・一三従四位下・左近衛権少将に任じ、朝政参予を命ぜられる（『明治天皇紀』）。

一月西郷隆盛を沖永良部島より召喚許可。二・一大隅守。三・一四参予辞任、参予会議解体、四・一一従四位上・左近衛権中将。四・一八京都発、五・八鹿児島着。七・一九禁門の変。七・二四幕府より長州征討令出る、一一・一征長軍鹿児島出發。一一・一六征長総督総攻撃延期を命ずる、一二・二七征長軍解兵命令出る

慶応 元（一八六五）

一・二〇イギリス留学生鹿児島発（三・二二串木野出發）

同 二（一八六六）

六・一六イギリス公使パークス鹿児島訪問、久光らと歛談。一一・一〇岩下方平らバリ万博へ出發

同 三（一八六七）

三・二五鹿児島発（三邦丸）、四・二大阪着、四・一二京都二本松藩邸に入る（四回目の上京）。五・一四松平春嶽らと二条城にて將軍慶喜に会い、長州処分・兵庫開港を論議。六・一六山県有朋らに薩長二藩協力の許可を与える（薩長同盟正式許可）。九・一五大阪発、二一鹿児島着（豊瑞丸、途中大久保正使として山口で薩長同盟正式締結）。一〇・一四討幕の密勅（日付十三日）。一一・一三茂久率兵鹿児島発、二三京都着。一二・九小御所會議

明治 元（一八六八）

正・三鳥羽伏見の戦、（戊辰戦争起る）

同 二（一八六九）

二・一三勅使柳原前光鹿児島着、二・一四勅使久光の上京を命ずる、二・二三勅使鹿児島

発。二・二六久光鹿兒島発、三・二京都着（五回目）。三・六従三位・参議兼左近衛中将

三・七官位辞退（許されず）、三・一三京都発、三・二一鹿兒島着、六・二久光従二位・権大納言、忠義（元年正月改名）従三位・参議、永世賞典禄一〇万石（官位辞退、許されず）、六・一七忠義鹿兒島藩知事、七・二一改めて賞典禄官位を辞す、許されず

同 三（一八七〇）

一・一九大久保利通鹿兒島帰着、久光・西郷に上京の朝命を達する、両者辞退。正月重ねて叙位辞退（三・四許可、久光従三位、忠義従四位に復す）。一二・一八勅使岩倉具視鹿兒島着、二二勅使鹿兒島城に、久光病氣により代理忠義迎える、二四久光病をおして勅使の宿舎を訪ね国事を談ず、二六勅使二の丸邸に至り、久光の上京を命ずる、代りに西郷を上京させることを答える、一二・二八勅使鹿兒島発

同 四（一八七二）

四・一六忠義戊辰丸にて親兵を率い鹿兒島発、四・二一東京着。七・一四廢藩置縣。九・一〇賞典禄の半額五万石をもって久光に一家を創設させる（玉里島津家）。九・一三改めて久光を従二位、忠義を従三位に叙す

同 五（一八七二）

三・二三忠欽を参朝させ分家賜禄を謝す、六・二二西国巡幸の天皇鹿兒島着、久光奉迎、六・二八久光一四カ条の意見書を奉呈、七・二二天皇鹿兒島出帆。一一・一〇西郷東京を発し久光に謝罪のため帰県

同 六（一八七三）

三・二一勅使勝海舟・西四辻公業鹿兒島着、二二勅使上京を命ずる、四・一七勅使に従い鹿兒島発、四・二三東京着、恩賜の桜田邸（内幸町）に入る。二八参内。五・一〇麝香之

同 七（一八七四）

開祇候、国事諮詢。五・二二桜田邸に天皇臨幸、子忠欽・忠経・久濟な（忠濟）にも謁見、（日付『明治天皇紀』）。六・二三年前の建言書の注釈を奉呈、一二・二五内閣顧問

二・一四横浜へ、汽船で西下、二・二〇鹿兒島着（佐賀の乱発生により西郷諭示のため）
 四・二勅使万里小路博房・山岡鉄太郎鹿兒島着、四・三勅使山下邸（旧二の丸邸）に至り、久光に帰京を命ずる、四・一五勅使に従い鹿兒島発、四・二一東京浜町邸着。四・二二参内、西郷諭示につき復命。四・二七左大臣。五・二三三条実美・岩倉に国政に関する二〇カ条を提議

同 八（一八七五）

四・一五服制の建言不採用を達せられる、六・一九休暇帰国を願い出る、許されず。一〇・二二左大臣の辞表提出（二七日許可）。一一・二麴香之開祇候に

同 九（一八七六）

二・一六高崎政風東京発（西郷上京説得に帰郷させる）、二・二四高崎鹿兒島着、西郷訪問（留守）、二・二八訪問（留守）、三・一高崎西郷を訪問、西郷上京を断る、三・四西郷高崎を訪問、答書を渡す、三・一三高崎鹿兒島発東京へ。四・三久光高崎を連れ東京発
 四・一三鹿兒島帰着（「玉里島津家史料」）

同 一〇（一八七七）

三・八勅使柳原前光鹿兒島着（『明治天皇紀』、西南戦争発生により久光慰撫に）三・一〇勅使久光邸に至り勅書を授ける。三・一二勅使鹿兒島発、久光三条太政大臣への上書を勅使に託す。四・一珍彦・忠欽鹿兒島発、（二〇日京都着、一六日参朝、勅使派遣を謝す）
 五・三薩軍来襲前に久光・忠義桜島地頭邸に避難、六・一五島内小池村に、七・一二鹿兒

島山下邸に帰る、九・一薩軍鹿兒島へ、桜島小池村へ避難。九・二山下邸戦火により焼失（『県庁日誌』）。一一・二五小池村出発、指宿二月田温泉邸に。玉里邸を修理

同 一一（一八七八）

一一・一七修理未完成の玉里邸に移る、読書三昧の生活を送る。この間に『通俗国史』など完成

同 一二（一八七九）

六・一七正二位
七・一五勲一等旭日大授章（『明治天皇紀』）

同 一四（一八八一）

七・七公爵、八・七誓文を呈し授爵を謝す

同 一七（一八八四）

六・二七体調異状、九・二一従一位、一〇・五発熱、病勢つる、一〇・二二勅使侍従堀

同 二〇（一八八七）

河康隆、侍医岩佐純と共に久光の病氣を見舞う。一一・五大勲位菊花大授章。一二・六死

去、享年七〇歳。一二・一七勅使侍従富小路敬直弔問、一二・一八国葬、福昌寺墓地に葬

むる

同 二一（一八八八）

一・二五忠濟家督を継ぐ、五月修史局総裁重野安繹に勅命で神道碑々文を選ばせたが、四年重野の死去により未完成

同 四四（一九一一）

七月改めて錦鶏間祇候小牧昌業に勅命で神道碑々文の作成を命ぜられる
七月碑文完成

大正一一（一九二二）

一一・二〇墓前に神道碑完成、孫島津忠承に賜る

同 一五（一九二六）

手荒い年譜で誤り無きを保証しがたいが、およその見当は付けられるだろう。すなわち文久元年藩政補佐となっ

て以後、久光の活躍はめざましい。しかし元治元年初め朝政参予となった時を頂点として、間もなく久光の公武合体運動は行き詰まってしまふ。

以後中央における薩摩藩活躍のリーダーシップは、西郷や大久保等の下級藩士らの手に移る。慶応三年の四度目の久光上京は、もはやこれら西郷・大久保らの画策によつたもので、久光はそれに乗つただけである。この時の雄藩会議が行き詰まると、以後事態は急速に薩長両藩を中心とする倒幕実現へと向かう。薩摩藩におけるその推進者が、西郷・大久保であることはもちろんである。そうでありながら久光が実質的に薩摩藩の権力の中枢にあることに変わりなかつた。西郷・大久保も単なる個人として、あるいは浪人として動いたのではない。したがって久光の意向を無視して藩を動かすことはできない。その点から慶応期の本史料を無視できないのである。

次いで明治元年から十年までの一一七〇点のうち、同六年二〇三点、七年三四八点、八年二三〇点合計七八一点で、約六七パーセントに及ぶ。これは久光が勅命を受け入れて上京し、内閣顧問や左大臣等の要職にあった期間である。

以上を総合して考えるとき、久光が権力の座にあった時期に史料が集中していることが明らかである。その中には久光自身はもとより、山階宮晃親王・近衛忠房・三条実美・岩倉具視・大原重徳・柳原前光・松平春嶽・山内容堂・伊達宗城・浅野長勲・黒田長知等の公卿諸侯から、真木和泉・西郷隆盛・大久保利通・小松带刀・岩下方平・桂久武・喜入撰津その他の藩内外の人の書簡類をはじめ、辞令・通達・報告書・建言等が多く含まれている。したがって本史料の刊行は単に薩藩史にとどまらず、わが国幕末維新史の解明に重要な意義を有すると言うべきであろう。

ただ相当数の史料が欠けている点が気になる。その中には前記『島津久光公』に掲載されているものもあり、また封筒は空であっても本寄託資料中の別の巻物仕立てのものに収められているものがあって、全てが失われた訳ではない。しかし貴重と思われる史料が失われたものもあり惜しまれる。

この『玉里島津家史料』は全一〇巻の予定で刊行されるが、今回はその一卷であるため最初の部分に、久光はもちろん薩摩藩に余り関係ないと思われるものも含まれているが、全体の分量から見ると極めて少量であり一部を省く必要もないと思われるので、そのまま刊行することになったことを付け加えておく。

(芳 即正)

例言

一本書は、島津忠廣氏所蔵「玉里島津家文書」（昭和四七年八月十日黎明館寄託資料）を底本とし、これを「鹿児島県史料 玉里島津家史料」全十巻として刊行するものである。収録史料の年代は天正十九年（一五九一）から文久二年（一八六二）十二月十七日までである。

一史料の配列は、玉里島津家で作られた文書目録番号による編年順である。

一文書名については、玉里島津家で整理された名称にしたがった。

一文書番号についても、玉里島津家で整理された番号にしたがった。但し、数種の内容に分かれる場合には、小番号を付した。

刊行に当って、文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

一字体は原則として常用漢字を用いた。

一仮名は、底本の体裁にしたがった。変体仮名は仮名に改めたが、江・茂・而はそのまま用いた。

一平出・擡頭・闕字および但書は、原則として底本の体裁にしたがった。闕字は一字分あけとした。

一目録に記載されてはいるが、文書の存在が確認されないものには史料番号の頭に○を付した。

一原注は、底本の体裁に従い括弧を付さず、新たに注を付す場合には、（ ）で囲んで原注と区別した。

一人名および地名については、適宜傍注を付した。

一文書・記事には適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

- 一 文書の年月日、差出書、宛所の位置などは、底本の体裁にしたがい、ある程度の統一をした。
- 一 文字の不明・抹消・訂正などを表現するため、欠所部は、その部分を□で囲み、底本の状態に応じ、(虫損)、(磨滅)、(破損)と傍注した。字数の推定できる場合は□で示し、推定できないものは□□で示した。
- 一 原文の抹消・訂正は、左傍に「ミミミ」を加え、右側に書き改めた文字を記した。
- 一 文意の通じない字または個所には、(ママ)、(衍カ)、(〇〇カ)と傍注を付した。
- 一 ルビは底本にあるもののみ付した。
- 一 朱書部分は(朱)と頭注し、その個所を「」で囲んだ。
- 一 文書の行間に朱書された返書は、差出書・宛所の関係を示す「上」「下」の位置は底本の体裁にしたがった。
- 一 合点は、頭または右肩に「し」で示した。
- 一 花押はすべて収載した。
- 一 各文書・記事の末に原寸を記した。但し、文書原寸(折紙)と記したものは折った状態の大きさを示す。
- 一 既刊の「鹿児島県史料」と重複する文書については、既刊史料名および文書番号を付した。
- 一 封紙・包紙の封じ目は、底本の体裁にしたがい、「メ」「封」「緘」の区別をし、印章は、□○で輪郭を模し、朱印は(朱)と注を付した。また印文の判読できるものは「」で記した。
- 一 本文以外の部分は、「」をつけ、その位置によって(端書)・(端裏書)・(端裏朱書)・(封紙ウワ書)を付した。
- 一 文書に付属する付箋・貼紙・付札・付紙・封紙・包紙などの文字は、右肩に(付箋)などと傍注した。

目次

一	天正十九年十月二十二日	龍伯公ヨリ川上武藏入道へ 乘馬糴古ニ付轡下賜	一
二	明曆元年二月	定勝日子靈神宝殿建立記及照国大明神号	一
三	元禄三年三月九日	本田八左衛門ヨリ上甕島噺所へノ届書	四
四	享保年間	慶長年間上甕島村流罪大炊御門中将頼国松木少将宗隆ノ履歴及子孫並近衛三貌院信尹卿履歴共 鹿兒島諸座付士ト外城衆中トノ分限ニ関スル藩庁記録ノ拔萃	八
五	寛延三年以前	薩隅日大坪流馬術伝統記	九
六	文政六年十月二十八日 及二十九日	中西十郎左衛門ト吉井七之丞トノ相互書翰 童舞抄云々ノ件	三
七	文政七年二月二十七日	賢章院ヨリ普之進公へ 年始状ノ返書	三
八	文政八年正月	又次郎殿重富家へノ移転御用掛任命	三
九	文政八年三月	普之進殿種子島家養子離縁ノ件	三
一〇	文政八年四月 十一月	普之進、又次郎ト改名仰出 重富家島津出雲婿養子仰出	三
一一	文政八年	又次郎殿へノ文庫其他御品覚書	三
一二	文政八年十一月	又次郎殿重富家婿養子ニ付待遇ノ件	三
一三	天保元年以降	財政整理主任氏名及期間	三

一四	天保八年ヨリ十年ニ至ル	毛利敬親事蹟……………	一三
一五	天保十年(?)三月	齊興公ヨリ家老ヘノ諭書及家老ノ副書布達 財政困難ニ付非常節儉ノ件……………	四
一六	天保十二年十月	大慈院薨去ニ付近衛忠熙公郁姫君ノ悼歌……………	四
一七	天保十三年記	重豪公以来ノ財政整理ト調所笑左衛門ノ功績……………	四
一八	天保十三年十一月	二宮金次郎ノ利根川分水路堀割工事見込書……………	四
一九	天保十四年 九月二十四日調	御家流犬追物伝来由緒……………	五
二〇	天保十五年三月 (弘化元年)	浜田林右衛門等処刑ノ件……………	六
二一	天保十五年甲辰 (弘化元年)六月十七日	忠教公御写本「後撰百人一首」……………	六
二二	弘化二年五月	二宮金次郎ノ日光御領荒地開墾方法……………	六
二三	弘化三年八月	外舶来航ニ付海防ニ関スル幕府ヘノ朝命 付京、伏見、大坂、堺警備ニ付幕府ノ手当……………	一〇
二四	弘化三年ヨリ 嘉永六年ニ至ル	鹿兒島ニ於ケル大砲取調数……………	一一
二五	弘化四年四月十三日	文武精励風俗矯正ノ子弟教育ニ付齊興公ノ諭書及家老ノ副書令達……………	一三
二六	弘化四年四月二十五日	外舶来航ニ付石清水八幡ヘノ勅使祈願文……………	一三
二七	弘化元年ヨリ 嘉永元年ニ至ル	仏英船琉球来着届書……………	一四
二八	弘化元年ヨリ 嘉永元年ニ至ル	齊興公御心願一卷書抜……………	一四
二九	嘉永元年二月二十八日	嘉永改元ノ詔書及字義……………	一四
三〇	嘉永二年二月(?)	齊興公従三位ニ御昇進ニ付近衛家其他ヘノ御礼進物……………	一五

三一	嘉永二年(?)六月三日 (天保十二年六月三日カ)	碓山将曹書翰(宛名不明)	唐物其他ノ件	三〇
三二	嘉永三年(?) 十一月二十九日	江戸川上筑後ヨリ鎌田図書へ	高輪邸竣成及斉彬公参観ノ件等	二三
三三	嘉永三年十二月三日	斉興公隠退御決意一件	朱衣肩衝茶入下賜	二四
三四	嘉永四年(?)正月八日	島津斉彬公御書翰別啓(宛名不明)	斉興公官位御昇進願ノ件?	二四
三五	嘉永四年正月二十九日	斉興公ヨリ久光公へノ密書	斉興公隠退ニ付	二五
三六	嘉永四年二月(?)	斉彬公襲封ニ付家老以下へノ論書		二六
三七	嘉永四年三月	家老ヨリ一門方へノ通達	斉彬公仰出ニ付	二六
三八	嘉永四年五月十六日	斉彬公論書ニ付家老ヨリ大身分其他へノ伝達		二六
三九	嘉永四年十月十八日 同年十一月二十九日	久光公ヨリ斉興公へノ願書	久光公ノ第二子右近養子ノ件	二六
四〇	嘉永五年六月	六人部美濃守是香ヨリ島津斉彬公へノ上書	斉彬公ノ徳ヲ頌ス	二六
四一	嘉永五年九月十七日	斉彬公参観途中播州正条ヨリ久光公へ		三〇
四二	嘉永五年十一月二日	江戸斉彬公ヨリ久光公へ	米艦来航、大船製造ノ件等	三三
四三	嘉永五年十一月三十日	江戸斉彬公ヨリ久光公へ	外艦防禦委任ノ件等	三三
四四	嘉永六年八月	奥医師河村宗澹家格届書		三三
四五	嘉永六年十二月	重富郷調書	高頭、人口、社寺	三六
四六	安政元年正月二日及五日	「ペルリ」来航ニ付阿久根白浜六郎ヨリ平川喜兵衛へノ書及		三六
四七	安政元年四月二十九日	喜兵衛ヨリ六郎へノ返書	国家ノ前途ニ対スル憂国ノ至情	三六
		斉彬公ヨリ久光公へ	幕府外交ノ拙劣等	三六

四八	安政元年五月二十九日	齊彬公ヨリ久光公へ 下田条約後ノ情勢……………	一四〇
四九	安政元年六月十七日 (一八五四・七・十一)	琉米条約 久光公手写並句読訓点……………	一四一
五〇	安政元年十月二十八日	真木和泉ノ魁殿物語……………	一四二
五一	安政元年十一月	重富領高調帳……………	一四三
五二	安政元年(9)	佐久間象山蟄居ノ幕命 吉田松陰米艦乗組一件ニ付……………	一四四
五三	安政二年正月	齊興齊彬二公へ下賜ノ御製……………	一四九
五四	安政三年(9)三月二日夜	齊彬公ヨリ伊達遠江守へ 八戸南部侯其他ノ件……………	一五〇
五五	安政三年十月	真木和泉ノ治国八策 国体、教化、封建、恭儉、農業、武備、人才、風俗……………	一五〇
五六	安政三年(9)十二月二日	島津齊彬公ヨリ伊達遠江守へ 登城ノ件……………	一五一
五七	安政三年	齊興公ノ文武奨励士風振興論達……………	一六一
五八	安政四年八月二十六日	齊彬公ヨリ久光公へ 島津下総申出ノ件ニ付……………	一六一
五九	安政四年十月七日	齊彬公文武奨励ノ論書及家老ノ副書……………	一六一
六〇	安政四年十二月	松平肥前守ヨリ幕府へノ願書 十八ヶ年間參觀猶予ノ件……………	一六一
六一	安政五年二月及六月	帖佐与御藏入米ニ付新納駿河ノ令達……………	一六六
六二	安政五年二月二十九日	島津齊彬公ヨリ伊達遠江守へ 武備充実ノ件并智鏡院問題……………	一六九
六三	安政五年四月九日 十日	在国島津齊彬公ヨリ出府途中豎山武兵衛へ 右添書……………	一七〇
六四	安政五年四月十二日	齊彬公ヨリ久光公へ 内々登城ノ件……………	一七三

六五	安政五年四月二十日	久光公ヨリ斉彬公へノ答書 島津豊後進退ノ件……………	一三
六六	安政五年四月二十七日	斉彬公ヨリ久光公へ 幕府勅許ヲ経スシテ条約締結ノ件……………	一三
六七	安政五年五月九日	万里小路博房卿ヨリ小松帯刀へ 哲丸君ニ付黒田清綱建言……………	一四
六八	安政五年五月二十六日	斉彬公ヨリ久光公へ 幕府へノ上書案ニ付……………	一四
六九	安政五年七月三日	斉彬公ヨリ久光公へ 將軍儲式決定失望ノ件……………	一五
七〇	安政五年七月十五日夜	山田壮右衛門へ斉彬公ノ御遺言……………	一五
七一	安政五年七月十九日	斉彬公ヨリ幕府へノ願書 跡目相続ノ件……………	一五
七二	安政五年七月二十二日	島津周防公ヨリ新納駿河へ……………	一五
七三	安政五年十二月二十五日	豎山武兵衛ヨリ永江休之丞へ 茂久公本日着府ニ付薩邸大奥向手続ノ件……………	一六
七四	安政五年十二月二十九日	仙波市左衛門等ヨリ永江休之丞へ 茂久公襲封、哲丸養子、斉彬公補佐ノ件……………	一七
七五	安政五年十二月二十九日	島津豊後ヨリ久光公へノ報告 茂久公襲封一件……………	一七
七六	安政五年(?)	久留米藩幽囚人名其他……………	一八
七七	安政五年	井伊大老ヨリ尾張老公隱居ノ件ニ付尾当主へノ密書……………	一八
七八	安政五年(一八五八)	英仏米蘭トノ条約書……………	一八
七九	安政六年正月四日夜	大山格之助ヨリ山川港菊池源吾へ 諸藩ノ形勢ト決筭延期ノ件……………	一八
八〇	安政六年正月十九日	永江休之丞ヨリ重富郷鹿島郷十郎山本五郎左衛門へ……………	一九

茂久公襲封一件書類久光公ノ一覽ニ供スル件

八一	安政六年正月二十五日	久光公ヨリ島津豊後へ 茂久公襲封一件答書……………	二一
八二	安政六年正月二十九日	江戸島津豊後ヨリ久光公ノ侍臣へ 茂久公襲封御礼済ノ件……………	二二
八三	安政六年二月八日	島津豊後ヨリ久光公へノ報告 茂久公將軍ニ謁見、賜名叙任ノ件……………	二四
八四	安政六年三月二日	江戸堀仲左衛門ヨリ大久保一藏へ(?) 水越薩有志義拳ノ件……………	二五
八五	安政六年三月(?)	茂久公(?) ヨリ近衛家へノ進物及參殿ノ件……………	二五
八六	安政六年三月	太守ヨリ久光公待遇ノ件……………	二六
八七	安政六年五月二十五日	菊池源吾ヨリ大久保税所へ……………	二七
八八	安政六年(?) 五月	島津豊後等ヨリ藩内へノ令達 齊興公士風振起ノ諭旨……………	二七
八九	安政六年六月七日	菊池源吾ヨリ大・税・吉・有へ……………	二七
九〇	安政六年九月(?)	田中直之進等義拳ノ趣意書草案……………	二八
九一	安政六年十月二十二日	周防公ヨリ新納駿河へ 島津豊後退役ノ件……………	二〇〇
九二	安政六年十月二十八日	襲封ニ付茂久公ヨリ家老へノ諭書 家老ヨリ一門及役々へノ伝達……………	二〇〇
九三	安政六年十二月二十九日	江戸有村雄助ヨリ堀仲左衛門へ 日下部伊三次復帰ノ件……………	二〇〇
九四	安政六年十二月	太守ヨリ久光公待遇ノ件……………	二〇〇
九五	安政六年以來	久光公関係ノ御書付類目錄……………	二〇〇
九六	万延元年二月十七日	茂久公參觀御発駕吉日撰定……………	二〇〇
九七	万延元年三月十二日	金子孫二郎(西存) ヨリ有村雄助ニ託シタル薩藩同志へノ書翰……………	二〇一

九八	万延元年七月	真木和泉ノ英断録……………	二〇三
九九	万延元年十一月及 文久元年四月・六月	五島領主ヨリ築城費一万兩借用方薩藩へ申入ノ件…………… 一千両宛年賦返済ニ対スル骨粉肥料ノ提供条件……………	二〇五
一〇〇	万延元年十一月七日	菊池源吾ヨリ税所へ……………	二〇三
一〇一	万延元年十一月七日	菊池源吾ヨリ堀大久保へ……………	二〇四
一〇二	万延元年	藩内士分以上出軍人数調…………… 鹿兒島城下ハ五十歳以下十八歳以上諸郷ハ五十歳以下二十歳迄……………	二〇五
一〇三	万延元年(?)	真木和泉ノ山柵窩文稿 安民策其他……………	二〇〇
一〇四	文久元年三月四日	菊池源吾ヨリ税所・大久保へ……………	二〇三
一〇五	文久元年(?)三月十八日	南貞助書翰(宛名不明) 江戸薩邸自燒ノ秘策……………	二〇四
一〇六	文久元年三月	久光公藩政輔佐ノ件……………	二〇四
一〇七	文久元年四月	久光公宗家へ復歸ノ件……………	二〇四
一〇八	文久元年五月二十二日	大島木場伝内ヨリ堀仲左衛門へ……………	二〇三
一〇九	文久元年五月二十八日夜	大島ニ於ケル苛政、菊池源吾ノ消息、太守茂久公參觀延期ノ件……………	二〇四
一一〇	文久元年五月	高輪東禅寺襲撃彼我死傷者姓名書……………	二〇四
一一一	文久元年五月	長井雅楽ヨリ朝廷ニ奉レル航海遠略策……………	二〇七
一一二	文久元年(?)七月八日	白石簾作ヨリ堀仲左衛門へ 薩藩用達公然拜命ノ件……………	二〇五

二三	文久元年七月	真木和泉ノ楠子論……………	二五
二三	文久元年九月	真木和泉ノ道弁説……………	二五
二四	文久元年(?) 十一月十七日	物主島津登等ヨリ城下士十六組ノ射撃演習通達……………	二五
二五	文久元年十一月	幕臣長坂蒼峯ヨリ幕府ヘノ獻議 朝幕一和ノ議……………	二五
二六	文久元年十二月二日	平野二郎ニ託セル真木和泉守ヨリ久光公ヘノ建言 天祐、迅速ノ二策……………	二六
二七	文久元年十二月十一日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿ヘ 久光公之上京を待つ……………	二六
二八	文久元年十二月十二日	真木和泉ヨリ東来ノ有志ニ示セル「再思録」及「檄文」……………	二六
		一勤諸侯、二仮諸侯兵、三義徒、挙事得失……………	
二九	文久元年十二月十七日	堀次郎ヨリ小松帯刀ヘ 江戸邸自燒後の情報……………	二七
三〇	文久元年(?) 十二月十八日	海老原宗之丞ヨリ藩庁重役ヘ 琉球通宝鑄造ニ付安田轍蔵ノ件……………	二七
三一	文久元年十二月下旬	近衛忠熙・忠房兩卿ヨリ島津和泉殿ヘ 小野道風書贈与の件……………	二七
三二	文久元年冬(?)	熊本ニテ大豆五千石買入其他ノ件……………	二七
三三	文久元年冬	熊本藩重役氏名書共……………	二七
三四	文久元年(?) 十二月二十七日	文久二年茂久公参府ニ付警衛人数書 小松帯刀覚書……………	二八
三五	文久元年十二月	江戸ニテ島津登ヨリ堀次郎ヘ 面会ノ件……………	二八
三六	文久元年十二月	近衛忠房卿ヨリ宸筆御詠下賜ノ副書……………	二八
三七	文久元年十二月	久光・茂久二公ヘ下賜ノ御製……………	二八
三七	文久元年	真木和泉ノ天業恢弘ノ上奏……………	二八

二六	文久元年(?)	京都・大阪両薩邸ニ於ケル大砲調査	二八一
二七	文久元年(?)	真木和泉ノ義拳計画	二八一
二八	文久二年一月上旬	濟範法親王ノ神仏論	二八一
二九	文久二年正月十五日	安藤対馬守坂下門外要撃一件	二八三
三〇	文久二年正月十五日	坂下門事變ノ書取	二八三
三一	文久二年正月九日	仁孝天皇御祭ニ付和宮様御代拝申渡書付	二八三
三二	文久二年正月	真木和泉ノ討幕上中下三策	三〇〇
三三	文久二年正月	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 朝廷の御模様	三〇八
三四	文久二年正月	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 内勅降下困難ノ件	三〇九
三五	文久二年正月	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 久光公ノ参府ヲ贊ス	三〇〇
三六	文久二年二月七日	鶴木孫兵衛・上田三左衛門ノ報告書	三〇〇
三七	文久二年二月十日	永井清左衛門聞合書 春日社神鏡墜落破損、和宮降嫁	三〇〇
三八	文久二年二月二十九日	鹿兒島ニ於テ真木和泉ヨリ久光公へノ和漢文兩様ノ上書	三〇三
		迅速出兵発駕ト義拳方策 草案共	
三九	文久二年二月(?)	久光公宗家復帰ニ関スル古実調草案 但前文欠ク	三二五
四〇	文久二年二月	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 内勅降下困難の件	三二六
四一	文久二年三月四日	島津登ヨリ堀次郎へ 堀、江戸出發ニ付面会要談ノ件	三三八
四二	文久二年三月九日	久光公御首途ニ付御内輪御次第	三三八
四三	文久二年三月十六日	久光公御上洛發途ニ付御次第	三三九

一四	文久二年(?)三月十六日	小松帶刀ヨリ堀次郎へ……………	三三
一五	文久二年三月十六日	久光公發駕ノ吉日吉時ノ卜定……………	三三
一六	文久二年三月二十八日	真木和泉入薩中ノ詩歌……………	三三
一七	文久二年三月	久光公ニ丸住居ニ付茂久公ヨリ家老中へノ論書……………	三四
一八	文久二年三月	久光公上洛ニ付藩士へノ論書……………	三四
一九	文久二年三月	茂久公ヨリ久光公ニノ丸御住居ノ通達……………	三六
二〇	文久二年三月	久光公東上ニ際シ藩士へノ訓諭……………	三六
二一	文久二年三月	久光公ヨリ藩士へノ論達……………	三六
二二	文久二年三月	久光公ニ之丸居住ニ付茂久公ヨリ家老中へ(再出)……………	三六
二三	文久二年三月	家老中ヨリノ令達共……………	三七
二四	文久二年三月	久光公ヨリ家老へノ論書……………	三七
二五	文久二年三月	家老ヨリノ令達共 当時世上之状態云々……………	三七
二六	文久二年三月	久光公ヨリ藩士へノ論書(再出) 外夷通商云々……………	三九
二七	文久二年三月至十二月	鹿兒島郡元村 砂糖黍植付ニ関スル本払調書……………	三四〇
二八	文久二年四月八日	谷山宇宿村……………	三四〇
二九	文久二年四月十日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 久光公ノ近衛家訪問ノ件……………	三五三
三〇	文久二年四月十日	酒井所司代ヨリ議伝兩奏へノ届書……………	三五三
三一	文久二年四月十日	酒井所司代ヨリ浪士鎮靜ニ付朝廷へノ上申 其他京師ニ於ケル風聞書……………	三五三
三二	文久二年四月十三日	松平美濃守大蔵谷ヨリ帰国ノ件 外雜件七通……………	三五七
三三	文久二年四月十四日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 四月十六日近衛家訪問の件……………	三六〇

目 次

一〇	文久二年四月十六日	酒井忠義ヨリ広橋坊城へノ答書 久世大和守上洛ノ件	三六一
一一	文久二年四月十六日	久光公ノ意見書草稿 近衛家ニ於テ提出	三六一
一二	文久二年四月十六日	久光公京都滞在ノ朝命	三六二
一三	文久二年四月十六日	近衛家ニ於ケル久光公口上覚 同時ニ朝廷へ提出ノ趣意書	三六四
一四	文久二年四月十六日	久世大和守上京スヘク酒井所司代へノ朝命	三六四
一五	文久二年四月二十五日	短刀御下賜勅書写 近衛忠房卿添書	三六五
一六	文久二年四月二十五日	久光公へ壮士鎮静ノ朝命	三六五
一七	文久二年四月二十五日	尾張前中納言等赦免ノ幕命	三六五
一八	文久二年四月二十五日	大赦ニ付板倉周防守等五閣老ヨリ酒井所司代へノ指令	三六七
一九	文久二年四月二十五日	久光公ヨリ近衛忠房卿へ二通・喜入撰津へ一通 寺田屋事変直後ノ諸件	三六七
二〇	文久二年四月二十九日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 浮浪輩取締ノ朝旨、酒井所司代辞職ノ件及副書共	三六九
二一	文久二年四月二十九日	酒井忠義ヨリ広橋坊城両卿へ 久世大和守上京ノ件	三六九
二二	文久二年四月三十日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 朝廷へ献金ノ件	三七〇
二三	文久二年四月晦日	岩倉具視ヨリ堀小太郎へ 幕府ヨリ所司代へノ通牒?	三七五
二四	文久二年四月(?)	獅子王院宮以下御赦免ノ朝命	三七五
二五	文久二年四月(?)	京都長州邸(?) 在番人数調	三七六

一六	文久二年四月	豊後岡藩士ヨリ薩士ヘノ書翰 久光公ノ朝權回復ノ件	三七六
一七	文久二年四月	大砲組什長其他姓名書	三七八
一八	文久二年四月	久光公ヨリ島津忠寛公ヘノ書翰草案 久光公上京出府ノ理由及家老処分ノ件	三七九
一九	文久二年四月	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿ヘ 浪士逮捕ノ件	三八一
二〇	文久二年四月	久光公上洛当時守衛方姓名書	三八一
二一	文久二年四月	久光公入京ヨリ寺田屋事変迄ノ風聞書	三八七
二二	文久二年四月	京都伏見ニ於ケル隊伍編成及職分規程	三九八
二三	文久二年四月	久光公京都滞在ノ勅書	四〇〇
二四	文久二年四月	右勅書拜見ニ付茂久公ノ仰出	四〇三
二五	文久二年四月	大坂ニ於テ久光公ノ訓令	四〇三
二六	文久二年五月朔日	毛利長門守ヘノ御沙汰書 薩藩ト協同尽力ノ事	四〇三
二七	文久二年五月二日	松平大膳大夫ヨリ幕府ヘノ建言 將軍上洛国是確定ノ件	四〇四
二八	文久二年五月六日	田中仲右衛門ヨリ小松帯刀ヘ 讃州高松侯入京ノ件	四〇五
二九	文久二年(?)五月六日	諸大名ノ江戸参覲交代往来日限控書	四〇六
三〇	文久二年五月六日夜	勅使関東ヘ差遣ノ仰出	四〇七
三一	文久二年五月七日	堀二郎ヨリ在國ノ重役ヘ 幕政改革勅語ノ漢訳	四〇八
三二	文久二年五月十日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿ヘ 近衛忠漁卿関白宣下之件	四〇九
三三	文久二年五月十日	近衛忠房卿ヨリ久光公ヘ 忠漁卿関白就任ノ件	四一〇

一三	文久二年五月上旬	薩長二藩ノ奮起ニ就テ（筆者不明）……………	四〇
一四	文久二年五月十一日	近衛忠房卿ヨリ久光公へ 三郎ト改名ノ件……………	四六
一五	文久二年五月十一日	近衛忠房卿ヨリ島津和泉殿へ 久光公改名及忠瀨卿関白宣下ノ件……………	四六
一六	文久二年五月十一日	聖策三事ニ関スル漢文勅諭 其他清国長髮賊乱ノ件……………	四七
一七	文久二年五月十三日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 議奏ヨリノ書付及久光公改名ノ件……………	四三
一八	文久二年五月十八日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 久世大和守上京ノ件……………	四三
一九	文久二年五月十八日 江戸着	一橋慶喜公ノ後見職松平春嶽公ノ政事総裁職ニ関スル久光公へノ朝命 別紙幕府へノ朝命……………	四三
二〇	文久二年五月十九日	中山忠能卿ヨリ近衛忠房卿へ 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 久光公出府及智恩院借用ノ件……………	四五
二一	文久二年五月十九日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 久世大和守上京ノ件……………	四六
二二	文久二年五月十九日	海賀宮門等ノ細島事件記事……………	四七
二三	文久二年五月二十日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 久光公出府延期ノ議……………	四八
二四	文久二年五月二十一日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 久光公東上ノ件……………	四九
二五	文久二年（？） 五月二十二日	將軍ノ上意振ト老中申渡之趣 士氣振興兵備充実……………	四〇
二六	文久二年五月二十二日	久光公ヨリ茂久公、図書・周防・英之進・悦之助・真之助ノ五公子、 於治・於珍・於寛・於成ノ四公女、留守家老喜入撰津へノ書翰草案……………	四二
二七	文久二年五月二十二日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎公へ 島津石見上京ニ就テ……………	四四
二八	文久二年五月二十四日	岩倉具視ヨリ堀小太郎へ 久世大和守上京云々ノ件……………	四五

三〇	文久二年五月二十六日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 伊勢桑名駅ニ於ケル会谈ノ件	三〇六
三一	文久二年五月	幕府へノ勅諭三箇条ニ付諮詢ノ詔	三〇七
三二	文久二年(?)五月	諸大名上洛氏名録	三〇七
三三	文久二年(?)五月	幕府ノ状況及久光公守護職任命ノ噂等	三〇八
三四	文久二年五月(?)	幕府ヨリ茂久公へノ御沙汰書 刀一口下賜	三〇八
三五	文久二年五月	久光公へ出府周旋ノ朝旨	三〇八
三六	文久二年五月	幕府へノ勅諭三ヶ条	三〇九
三七	文久二年五月	勅使下向ニ付テノ御沙汰書	三〇〇
三八	文久二年五月	島津図書入京ノ朝命	三〇〇
三九	文久二年五月	諸大名京都到着次第情報	三〇一
四〇	文久二年五月	大原勅使下向ニ付随従者名簿	三〇一
四一	文久二年五月	京都守衛ノ件	三〇三
四二	文久二年六月朔日	將軍ノ上意振 老中ヨリノ令達	三〇六
四三	文久二年六月三日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 近衛忠濃忠房両卿身边危殆ノ報告	三〇八
四四	文久二年六月五日夜	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 勅命伝達ノ件	三〇九
四五	文久二年六月六日	越前士大道寺等ヨリ薩士半田等へノ返書 久光公越前邸訪問ノ件	三〇〇
四六	文久二年六月七日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 勅使江戸着勅命伝達ノ件	三〇一

三六	文久二年六月八日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 將軍対顔ノ件	四三三
三七	文久二年六月十日	中山忠能卿ヨリ島津三郎公へ 京都ノ形勢ヲ報ス	四三三
三八	文久二年六月十日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 將軍へ勅諭伝達ノ件	四三四
三九	文久二年六月十日	正親町三条大納言ヨリ島津三郎殿へ 久光公之尽力を謝し京師ノ状況を報ス	四三五
四〇	文久二年六月十二日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 登城用談ノ件	四三七
四一	文久二年六月十三日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 京都へ書状ノ件	四三八
四二	文久二年六月十四日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 後見職大老名義ノ件	四三八
四三	文久二年六月十六日	久光公ヨリ脇坂閼老へノ呈書草案 勅諭奉行ノ件	四六〇
四四	文久二年六月十六日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 長州上洛ノ件其他	四六二
四五	文久二年六月十六日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 勅使久光公ト面会ノ件	四六三
四六	文久二年六月十六日	一橋越前任命ニ付久光公ヨリ脇坂中務大輔へノ書	四六四
四七	文久二年六月十七日	京都ヨリ国許へノ情報 今大路民部権少輔ヨリ西尾土佐守へノ書状写添	四六四
		久光公上京一件、島津石見病死ノ件	
四八	(文久二年六月十七日) 西曆一八六二・七・十三	和蘭松木弘安ヨリ長崎八木称平へ 蒸氣船買入ノ件及歐州事情報告	四六九
四九	文久二年六月十八日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 後見職及政事総裁職ノ件	四七三
五〇	文久二年六月二十二日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 老中へ交渉ノ件	四七四
五一	文久二年六月二十四日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 老中招致勅命奉行督促ノ件	四七五

三二	文久二年六月二十五日	松平春嶽公ヨリ島津三郎公へ 国事同意見ノ返書……………	四七
三三	文久二年六月(?)	大原勅使ヨリ近衛閑白(?)へノ对幕及薩長意見……………	四六
三四	文久二年六月(?)	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 勅使登城ノ件……………	四七
三五	文久二年(六月?) 八月六日	久光公ヨリ近衛忠熙忠房両卿へ書翰草案 閑白辞職ノ件……………	四八
三六	文久二年六月	久光公ヨリ大原重徳卿へ書翰草案 久光公官位推任叙ノ件……………	四八
三七	文久二年六月	久光公ヨリ松平春嶽公へノ書翰草案 国事ヲ論シテ春岳公ノ登城ヲ促ス……………	四八
三八	文久二年六月	老中ヨリ武伝へノ上申 將軍上洛ノ件等……………	四八
三九	文久二年六月	正月三月兩度春日神鏡墜落ノ件 兵革ノ兆云々……………	四八
四〇	文久二年六月	酒井若狭守帰府酒井雅楽頭相国寺借用ノ件 薩州借用ニ付相国寺謝絶ノ事……………	四八
四一	文久二年六月	水藩平野隼次郎官本辰之介ヨリ大原勅使へノ建言……………	四八
		公武合体ニ関スル各種ノ要望……………	
四二	文久二年六月	久光公江戸御到着御次第……………	四九
四三	文久二年七月三日	大坂菱刈李之介ヨリ島津登小松帶刀へ 京摂ノ形勢別紙三通添……………	四九
四四	文久二年七月五日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 近衛忠熙卿閑白辞任ノ件……………	四九
四五	文久二年七月五日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 酒井若狭守帰府延引ノ件……………	四九
四六	文久二年七月八日	久光公ヨリ幕府へノ建言 公武合体 国是確立……………	四九
四七	文久二年七月八日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 国是決定大政委任云々の件……………	四九
四八	文久二年七月九日夜	中山忠能卿ヨリ島津三郎公へ 幕府勅命奉行ノ件……………	四九

二四	文久二年七月九日	正親町三条大納言より島津三郎殿へ 幕府奉勅之件	四九
二五	文久二年七月十二日	大原重徳卿より島津三郎公へ 久光公献白之件	五〇
二六	文久二年七月十四日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 一橋越前会合ノ件	五一
二七	文久二年七月十五日	中山忠能・正親町三条実愛両卿ヨリ島津三郎公へ 所司交代送ノ件	五二
二八	文久二年七月十八日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 一橋慶喜松平春嶽招致ノ件	五三
二九	文久二年七月十九日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 勅使登城ノ件	五四
三〇	文久二年七月二十日	中山忠能・正親町三条実愛両卿ヨリ島津三郎公へ 幕府勅命奉行ノ件	五五
三一	文久二年七月二十一日	大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ 一橋松平両卿と出会之件	五五
三二	文久二年七月二十五日	村上銀右衛門書翰(宛名不明) 下之関ニテ幕船砲撃ノ件	五六
三三	文久二年七月二十七日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎公へ 長州周旋ノ件、近衛関白辞意ノ件	五六
三四	文久二年七月二十七日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎公へ 関白叙任ノ件	五九
三五	文久二年七月二十七日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 関白及近衛左大将拜命ノ件	五〇
三六	文久二年七月	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 政事総裁職名目ノ件	五一
三七	文久二年八月六日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 久光公推任叙ノ件	五二
三八	文久二年(?)八月八日	岩下佐次右衛門ヨリ大久保一藏へ 江戸田町屋敷大砲ヲ薩摩へ送ルノ件	五三
三九	文久二年八月十五日	朝廷ヨリ御菓子一折拝領 勅使東久世卿	五四
四〇	文久二年八月十六日	幕府ヨリ久世大和守安藤对馬守処分ノ件	五四

二五	文久二年八月十七日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ	中將昇進及毛利長門守面会ノ件	五五
二六	文久二年八月十八日	松平春嶽公ヨリ島津久光公へ	上京延引ノ執成ヲ請フ	五六
二七	文久二年八月十九日	久光公ヨリ幕府へノ国是要目二十余条ノ建言	五七
二八	文久二年八月十九日	久光公ヨリ幕府へノ建言	国是二十四箇条	五七
二九	文久二年八月二十日	戦亡者祭祀ノ件	五九
三〇	文久二年八月二十日(？)	水戸烈公贈位ノ件	勅諭写	五九
三一	文久二年八月二十一日	大原重徳ヨリ進藤式部権少輔へ	一橋慶喜等登城ノ件	五〇
三二	文久二年八月二十一日	近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ	四姦臣処分の件	五〇
三三	文久二年八月二十五日	近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ	伏見一条削除ノ件、近衛閑白辞職ノ件	五一
三四	文久二年八月二十八日	遠藤文七郎ヨリ朝廷へノ上書	仙台藩ヨリ攘夷ノ勅命ヲ請フ	五一
三五	文久二年八月	島津毛利両公へノ建白書	所謂四姦処罰ノ件	五二
三六	文久二年八月	近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ	四姦両嬪処分ノ件	五三
三七	文久二年八月	生麦事件ニ付見親王ノ詠詩	五九
三八	文久二年八月及閏八月	長藩主ヨリ破約攘夷ニ付朝廷へノ建言	五九
三九	文久二年閏八月九日	久光公ヨリ議奏衆へノ建言	幕府ニ対スル朝廷ノ態度	六一
四〇	文久二年閏八月十日	英代理公使「ジョン・ニール」ヨリ外国奉行へノ書翰及答書	六四
四一	文久二年閏八月十一日朝	近衛忠房卿より島津三郎公へ	近衛閑白辞職の件	六四
四二	文久二年閏八月十二日	京都原田才之丞聞取書	三州総持寺家来香山源七郎身上ニ付	六五

三三	文久二年閏八月十三日	近衛忠房卿より島津三郎殿へ 進物礼詞及東寺借用ノ件	三三六
三三	文久二年閏八月十五日	久光公へ 建策ノ御沙汰書 正親町三条大納言より御渡	三三七
三四	文久二年閏八月二十日	近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ 意見書提出ノ件	三三八
三五	文久二年閏八月二十一日	近衛忠熈忠房兩卿ヨリ島津三郎殿へ 久光公建白書ノ件	三五九
三六	文久二年閏八月二十一日	英国代理公使ヨリ生麦事件ニ付外国奉行へノ督促状	三六〇
三七	文久二年閏八月二十一日	京都本田弥右衛門報告 久光公帰国ニ付京都ヨリ伏見へノ道順	三六一
三八	文久二年閏八月二十一日	久光公ヨリ近衛家へ提出ノ意見書 攘夷其他ノ件	三六二
三九	文久二年閏八月二十二日	久光公ヨリ近衛家ニ提出ノ意見書草案 武備充実外寇逐斥	三六三
四〇	文久二年閏八月二十二日	大原重徳卿より島津三郎公へ 大原卿より贈物の件	三六四
四一	文久二年閏八月二十二日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ 久光公ノ帰国ヲ惜ム	三六五
四二	文久二年閏八月二十八日	薩藩ニ先鞭ヲ着ケラルタルニ対シ長人有志憤起計画	三六六
四三	文久二年閏八月	仙台ノ建白ニ対スル朝旨	三六七
四四	文久二年閏八月(?)	久光公大坂邸ヨリ住吉參詣往復道筋	三六八
四五	文久二年閏八月(?)	久光公帰国ノ件	三六九
四六	文久二年閏八月	久光公ヨリ国事ニ関スル朝廷へノ建言	三七〇
四七	文久二年閏八月	軍用米貯蔵高寛	三七一
四八	文久二年閏八月	水戸烈公贈官位其他ノ朝命 久光公手写	三七二

三〇	文久二年閏八月	戸田越前守ヨリ歴代山陵修補ノ建白……………	五五
三一	文久二年閏八月及九月	京都所司代ヨリ伝奏ヘノ上申 参勤交代制ノ変更等……………	五五七
三二	文久二年九月五日	松平肥後守細川越中守山内容堂ヘノ御沙汰書 京都守護職増加交替輪番ノ件等……………	五五八
三三	文久二年九月七日	岩下佐次右衛門等三人ヨリ小松帯刀ヘ 生麦事件ニ付幕府ヘノ返答……………	五五九
三四	文久二年(〇)九月十六日	久光公御光着当日ノ御次第……………	五六〇
三五	文久二年九月十八日	永井清左衛門認書 大坂長州屋敷ニ於テ彈丸製造ノ件……………	五六三
三六	文久二年九月十九日	大原重徳卿ヨリ島津三郎公ヘ 久光公ノ帰国ヲ祝ス……………	五六四
三七	文久二年九月二十日	茂久公ヨリ近衛閑白ヘノ願書 久光公ノ添書 斉彬公贈官位ノ件……………	五六五
三八	文久二年(〇)九月二十二日	一橋刑部卿等四人ヨリ坊城大納言ヘ 兵庫開港風説ニ付……………	五六六
三九	文久二年(〇)九月二十五日	大坂ニ於ケル長藩士動靜探聞記……………	五六七
四〇	文久二年九月二十七日	大坂長州屋敷其他ニ於ケル同藩士動靜探索書……………	五六九
四一	文久二年九月二十八日	薩藩献上米ヨリ社寺ヘノ初穂奉納仰出……………	五七三
四二	文久二年九月二十九日	外国奉行ヨリ生麦事件ニ付英代理公使ヘノ答書……………	五七三
四三	文久二年九月三十日	寺師善真ヨリ江戸島津登ヘ 島津登ヨリ朱書返信 鹿兒島ノ近事ト江戸ノ近事……………	五七三
四四	文久二年九月晦	正親町三条大納言ヨリ島津三郎殿ヘ 久光公ノ上京ヲ促ス……………	五七六
四五	文久二年九月晦日	尊融法親王ヨリ島津久光公ヘ 朝議常変云々の件……………	五七七
		久光ヲ召サセラル、近衛閑白ヘノ宸翰……………	五七七

三三	文久二年九月晦日	久光公上京召命ノ御沙汰書……………	五七
三七	文久二年九月	攘夷ノ勅使御差遣ノ上奏(長州?)……………	五七
三六	文久二年九月	大赦ニ付幕府ヨリ朝廷ヘ伺ノ件……………	五八
三九	文久二年九月下旬	京都ニ於ケル天誅処罰ノ帳紙等……………	五八
三〇	文久二年九月	茂久公ヨリ幕府ヘノ請書……………	六一
		久光公後見職許可ノ幕命……………	六一
三一	文久二年十月一日	中山忠能卿ヨリ島津三郎公ヘ 久光公ノ上京ヲ促ス……………	六一
三三	文久二年十月朔日	京都本田弥右衛門ヨリ二之丸側役衆ヘ 宸翰奉護藤井良節帰国ノ件……………	六一
三三	文久二年十月朔日	近衛閔白ヨリ久光公ヘノ書翰……………	六一
三四	文久二年十月二日	御記録奉行伊地知小十郎調書 慶長元和年間將軍參内ニ付御供ノ件……………	六二
三五	文久二年十月二日	喜入撰津ヨリ小松帶刀ヘ 茂久公參府ノ件……………	六九
三五	文久二年十月三日	近衛忠熙卿ヨリ薩摩少將殿ヘ 斉彬公贈官位及久光公任叙ノ件……………	五九〇
三七	文久二年十月四日	小松帶刀京都ヨリ在藩ノ中山大久保ヘ 久光公上京ノ召命、斉彬公御贈官其他……………	五九一
三六	文久二年十月十日	近衛忠熙卿ヨリ修理大夫三郎兩公ヘノ通告……………	五九四
三六	文久二年十月十日	故島津斉彬贈官位宣下写添ヘ……………	五九四
三九	文久二年十月十三日	生麦事件ニ付閣老ト英代理公使トノ応接……………	五九六
四〇	文久二年十月十六日	大門口台場ヨリ神瀬ニ至ル海底水深測量報告……………	五九六
四二	文久二年十月十六日	神瀬ヨリ桜島洗出台場ニ至ル海底水深測量……………	六〇三
四三	文久二年十月十七日	砂場場ヨリ神瀬ニ至ル海底水深測量報告……………	六〇六

三〇	文久二年(〇)十月二十日	筑後守ヨリ高崎左太郎へ 宇和島家臣五郎ヨリ筑後守へ 賜暇帰国ノ御沙汰書 伊達伊予守賜暇帰国の件	六二
三〇	文久二年十月二十五日	越通船申請ニ付御船奉行ノ報告	六三
三一	文久二年十月二十七日	軍役奉行軍賦役ヨリ鹿兒島防備意見書	六四
三一	文久二年(〇)十月二十九日	堀仲左衛門ヨリ在国ノ同志へ 江戸薩邸ニ於ケル水藩浪士保護ノ件	六六
三二	文久二年十月	久光公ヨリ青蓮院宮へノ答書 朝議常変ニ道ノ件	六八
三二	文久二年十月	久光公ヨリ近衛閑白へ 召命御請ト上京猶予ノ内願	六九
三三	文久二年(〇)十月	佐土原藩京都守衛人数書	七〇
三三	文久二年十月	有馬新七等処罰ニ付久光公ヨリ家老へノ口達	七三
三三	文久二年十月	仙台藩玉虫左大夫報告ノ京都ニ於ケル薩長土三藩ノ勢力	七三
三三	文久二年十月	攘夷ニ関スル幕府へノ御沙汰書	七三
三三	文久二年十月	新納次郎四郎等ヨリ砲台築造意見上書	七三
三四	文久二年十月	沖小島砲台備付ノ件	七四
三五	文久二年十月 十月十六日	攘夷期限制定ニ付幕府へノ勅諭 本田弥右衛門ヨリ国元御側衆へ	七五
三六	文久二年十月(〇)	藩内沿海諸郷へ備付ノ野戦砲取調書	七六
三七	文久二年十月(〇)	集成館其他格護之銃砲取調書	七七

三六	文久二年十月及十一月	江戸ニ於ケル幕臣任職面々書留	三六
三六	文久二年十一月四日	須貝祿船申請ニ付船頭ヨリノ届書	三六
三六	文久二年十一月五日	久光公ヨリ尹宮ヘノ書翰	三六
三六	文久二年十一月五日	本田弥右衛門ヨリ中山大久保ヘ 京都及関東ノ事情並朝廷ヘ献米ノ件	三六
三六	文久二年十一月五日	藤井良節ヨリ中山大久保ヘ 勅使東行并近衛閑白辞職ノ件	三六
三六	文久二年十一月五日	藤井良節ヨリ中山大久保ヘ 茂久公参覲猶予、久光公守護職ノ件	三六
三六	文久二年十一月五日	藤井良節ヨリ中山大久保ヘ 京都ノ形勢ヲ報ス、神社遙拜所建設ノ議	三六
三六	文久二年十一月七日	中川修理大夫ヨリ朝廷ヘノ謝罪状 小河弥右衛門等一列幽閉ノ件ニ付	三六
三六	文久二年十一月十日	青蓮院宮ヨリ薩藩ヘ御渡ノ書付 後醍醐天皇御陵鳴動ニ付	三六
三六	文久二年十一月十二日	一橋中納言等ヨリ坊城大納言ヘ	三六
三六	文久二年十一月十九日	近衛忠熙卿ヨリ島津久光茂久両公ヘ 斉彬公贈官位ノ件	三六
三六	文久二年十一月十二日	久光公京都守護職任命ニ付將軍ヘノ御沙汰書一通	三六
三六	文久二年十一月十二日	久光公上京御沙汰書	三六
三六	文久二年十一月十二日	本田弥右衛門ヨリ二之丸御側役衆ヘ 勅証書通達ノ件	三六
三六	文久二年十一月十三日	青蓮院宮御容体書	三六
三六	文久二年十一月十三日	近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公ヘ 京都守護職トシテ上京ノ件	三六
三六	文久二年十一月十三日	志々目献吉ヨリ高崎左太郎ヘ 粟田宮御病状	三六
三六	文久二年十一月十三日	近衛閑白ヨリ久光公ノ上京ヲ促ス	三六
三六	文久二年十一月十四日	桂右衛門ヨリ小松帯刀ヘ 江戸屋敷引上ノ件	三六

三七	文久二年十一月十四日	京都本田弥右衛門ヨリ小松帯刀へ 久光公京都守護職任命ノ件	六八〇
三八	文久二年十一月二十日	村山斎助ヨリ大久保一蔵へ 中川修理太夫問題	六八一
三九	文久二年十一月二十一日	攘夷ニ付対州ノ防備ニ関スル長州へノ御沙汰書	六八二
四〇	文久二年正月三日	攘夷ニ付対州へノ勅諭	六八三
四一	文久二年十一月二十五日	朝廷大赦ニ付諸藩殉難者調査届出ノ幕命其他ノ件	六八四
四二	文久二年十一月二十八日	島津登ヨリ在藩ノ家老中へ 仏国巴理ヨリノ松木弘安書翰添 仏国の琉球奪取計画	六八五
四三	文久二年十一月晦日	岩下高崎ヨリ中山大久保へ 久光公御上京ノ件	六八六
四四	文久二年十一月晦日	江戸高崎猪太郎ヨリ中山大久保へ 久光公ノ上京ヲ促ス	六八七
四五	文久二年十一月	軍役奉行軍賦役ヨリノ砲台建築意見書	六八八
四六	文久二年十一月	屋久島物産経営ニ付松岡十太夫ノ上書	六八九
四七	文久二年十一月	記録奉行伊地知小十郎ヨリ藩内寺社ノ文書等調査条項(通達)	六九〇
四八	文久二年十一月	中川宮ヨリ久光公ノ上京ヲ促サル、御伝言	六九一
四九	文久二年十一月	薩藩ヨリ近衛閑白へノ建言(?) 浮浪取締ノ件	六九二
五〇	文久二年十一月	鹿兒島城下寺院調査寺社奉行届書	六九三
五一	文久二年十一月	久光公ヨリ重臣へノ諭旨 永年勤王ノ誠意連続云々	六九四
五二	文久二年十一月	中川宮ヨリ久光公へノ御伝言扣	六九五
五三	文久二年十一月	幕府へ攘夷ノ勅使差遣ニ付京都非常警衛ノ件 在京諸藩ノ滞在ヲ命ス	六九六
五四	文久二年十二月朔日	松平春嶽公より島津久光公へ 久光公之上京を促す	六九七

目次

三二	文久二年十二月朔	松平容堂公ヨリ島津久光公へ 久光公之奮起を促す……………	三六
三三	文久二年十二月朔日	松平春嶽公ヨリ島津三郎公へ 国事周旋ノ件……………	三七
三四	文久二年十二月朔日	越前春嶽卿ヨリ近衛忠熙卿へノ書翰写 久光公召命ノ件……………	三七
三五	文久二年十二月三日	幕府ノ軍制改革 久光公手写……………	三八
三六	文久二年十二月五日	攘夷勅諭ニ付將軍ヨリノ奉答……………	三〇
三七	文久二年十二月五日	將軍家茂ヨリ朝廷へノ奉答書 攘夷之布告、京師守衛ノ件……………	三一
		同年十二月十三日京都藤井良節ヨリ鹿兒島へノ飛脚便……………	
三六	文久二年十二月五日	三条実美卿ヨリ中山正親町三条兩卿へ 幕府攘夷ノ勅命奉行ノ件……………	三一
三九	文久二年十二月五日	中川修理大夫へ八幡山崎ニ砲台新築ノ朝命……………	三三
四〇	文久二年十二月九日	国事掛任命氏名……………	三三
四〇	文久二年十二月九日	大坂銀主出銀請書……………	三四
四一	文久二年十二月九日	小松帶刀ヨリ中山大久保へ 障炬様帰国ノ件及中川宮等……………	三四
四二	文久二年十二月九日	京都小松帶刀ヨリ中山大久保へ 松平春嶽上京、高崎猪太郎帰国ノ件……………	三四
四三	文久二年十二月九日	西之宮中山次左衛門ヨリ京都小松帶刀へ 江戸姫君帰国ノ途次播州辺巡覽ノ件……………	三九
四四	文久二年十二月十一日	藤井良節ヨリ中山大久保へ 久光公京都守護職ノ件并粟田宮御建立ノ件……………	三九
四五	文久二年十二月十三日	藤井良節ヨリ中山大久保へ 將軍及一橋公上洛ノ件……………	四一
四六	文久二年十二月十三日	大久保一藏ヨリ桂右衛門へ 攘夷ノ勅使東下ノ件……………	四二
四七	文久二年十二月十六日		四二

四六 文久二年十二月十七日

島津登ヨリ山口直記谷川次郎兵衛へ……………七三

同年十一月攘夷ニ関スル南部弥八郎ノ建言添

四七 文久二年十二月十七日

江戸岩下佐次右衛門ヨリ中山大久保へ 江戸ノ情況及久光公上洛ノ件……………七四

一 龍伯公ヨリ川上武蔵入道へ

乘馬稽古ニ付轡下賜

(朱) 「正文在川上十郎左衛門」

尚以当家之馬乘様稽古候とて、早道を可被捨にてハ
無之候、是非共稽古可為肝要候、

令上洛、爰元之御仕合万可然候之条、可心易候、随而又
一郎事器量ニ相見候之故、從 関白様縁重并家婚之儀被
仰定、尤珍重候、然は早道之馬稽古之様ニ相聞候、当世
はやり物ニ候之間、ケ様にも不苦候之欵、乍去当家乘馬
之事候、稽古候へてハにて候、畢竟武度御前可有之候之
条、拙者為使被參、此等之段具ニ可被申上候、仍轡一間
遣之、聊祝儀計候、恐々謹言、

(朱) 「天正十九年」

十月廿二日

川上武蔵入道殿

(島津義久)
龍伯

(朱) 「上書」



川上武蔵入道殿

龍伯

冊子原寸 縦二八・一糎 横二五糎 二枚

二 定勝日子靈神宝殿建立記及照国大明神号

二通

(包紙ウツ書)
「御神号」

二ノ一

「照国大明神

テラシノゾミ玉ハン アマツクニワ
日本書紀照ニ臨天 国

鶴丸大明神

文書原寸 縦三〇・八糎 横一四・五糎 包紙原寸 縦四七糎 横三三糎

二ノ二

大檀主薩隅日三州老大君栄翁公

奉勸請定勝日子靈神宝殿一字

施主 入来院隼人定経敬建

神君諱定勝、自称大和、本姓島津氏、実廿二世 邦君

(島津義隆) 有邦公之第四子、而 廿三世邦君慈徳公之母弟也、以

元文丙辰四月九日、生於府城、明年三月五日、命我家

廿三世主馬定恒、迎為嗣子、因冒入来院、小字曰千之

丞、四月六日、降自 府城入鞠府宅、方 慈德公朝于

江戸、以番頭格、從其高駕、而 公蚤薨、次 令弟(胤)門

德公(律直年)嗣、亦未幾薨、 重豪公嗣、是為老大君、則於神

君、有叔姪屬、為番頭、兼補組頭、授栗野地頭、皆辭

致職、明和五年、 大家俊明廟、馭致鷹所捉鶴、賜

公、乃遣神君謝 恩、神君造 朝為 公陣聘物、進見

大家、行謝使礼、至竣將帰、命留滯江戸、時会国用乏

有減省令、 淨岸君乃諭神君、令急辭還、其冬回家、

六年二月、上疏告老、伝事於息定馨、退栖于邑、以天

明元年十月九日、病卒、年四十六、葬壽昌寺、法諡大

心院殿霜雲里暁大居士、主亦實焉、後四十二年、至文

政五年、老大公亦既老、在高輪邸、更号 栄翁公、屢

夢神君、有所感通、每 公遭變、以誠告祈、莫不奇驗

因窃建祠於高輪邸、崇曰、定勝日子靈神、既而其十一

月、伝 旨定経、令以論事、二十八日、始拜其命、二

十九日、乃親詣寺、使主僧某薦清酌庶羞之、奠以告諭

旨於神君之靈、相攸於副田村小園、以下社山、凡一板

葺宝殿、堅三尺五寸横三尺、茅葺上屋、四敷、創建社殿、社地二、起

功乎六年二月十二日、告竣於其十一月、越二十四日、聚

社人九名、以奏神樂、奉納神鏡一面、直徑六寸、行勸請法、

定経自為施主焉、伏願後奉祀者、以歲之十一月九日、

永定例祭、伝諸無窮、令以万世勿懈怠焉、因記概於棟

札、載預事姓名於其陰爾、(朱)「当亥二月廻勤ニ付、役人共任

頼綴置申候、」

重来大明神 入来副田村之小園ニ在リ棟札写

曾祖父又六重時者、当家正統十五世之主也、慶長五年

庚子九月廿三日、於美濃之国関ヶ原、遂戰死畢、有其

靈示現寄妙之事、因茲、祖父伯著前司重国、相攸於入

来院副田村、建立新社、崇置其靈、称雅号於日吉、然

而神祇管領之神号、未慊我心、是歲承応第四、「即明

曆元年」乙未春二月、鹿兒島諏訪神主正六位宇宿若狹

守久広有奉 太守公命、赴京師便宜、憑久広請神号於

神道管領之長卜部朝臣兼起、許諾号重来明神、作為鎮

札、以賜焉、且復請依卜部朝臣、兼從写其額、兼從亦

諾書之、以重来神社、件神器久広受之、帶之來格而付

与吾、於茲撰吉日良辰、所以寄進也、仰冀神威与山弥

高、当家根与水長、子孫繁茂武運長久無窮、寄進之志

在于此而已矣、入来院石見守平重頼敬白 明曆元年

乙未二月吉日、

宣旨

宗源

靈社

今宜授

重来明神号

右依

今上皇帝 聖勅 神宣

御表之神 鹽如件

薩州入来院村

承応四年二月吉曜日

神道管領長上卜部朝臣判 神部耆岐宿祢判

維承応四年歲次乙未二月廿九日、吉日良辰乎択定天、

高天原仁神留坐須、皇親神漏岐神漏美乃命乎以天、掛

毛畏幾薩州入来院村靈社乃広前仁、恐美恐美毛申佐久

夫当社波武勇不尋常、奇瑞乃靈驗有仁依天、爰ニ入來

院石見守平重頼篤凝精誠志、恭抽信心天神道管領長上

卜部朝臣兼起仁告天、神号乎重来明神止授介奉留、夫

吾神道波天兒屋根尊乃相承宗源神道乎執行之稱辞竟奉

留、此杖扶乎平介久安介久聞食天、弥重頼壽命長遠、武

運長久、子孫繁昌乃冥助乎加給比天、常盤堅磐仁夜乃

守、日乃護幸賜陪止申須辞別仁申佐久、今度宣旨乎納

奉利勸喜賜覽、然上波愛慈納受乎垂給天、无咎无崇護

賜陪止恐美毛申須、

新納氏 新建氏神堂記ノ抜抄 (朱) 忠元 靈社之遺烈、往々如在、靡禱不

驗、大口士民多蒙蔭庇、邑正胥議欲建祠廟、崇贈神号

以歲時祀之者久矣、迨天保壬寅(朱) 十五年云々、勸民農業、始自

大口、其十二月、邑正有村隼治等、陳嘗所欲、以請海

老原清瀨、清瀨且諾、因吾族人新納時升、有訪乎余、

於是三日、招會時升及伊地知季安等於宅、以議其事、

遂煩季安、博稽古編、著撰忠元伝上下二卷云々、国老

広郷以聞 (朱)十四年癸卯也 公、五月、広郷奉 旨如京、時会大官司本

田出羽守親徳亦同在京、乃使親徳就神祇管領卜部良芳

敬陳民情、以奏請之、乃十一日、神宜贈忠元靈神、十

三日、又贈靈社号、且親書社号、以賜其額、使家老鈴

鹿筑前守等悉授親徳、云々、

冊子原寸 縦二九糎 横二一・五糎 二枚

三 本田八左衛門ヨリ上飢島噺所へノ届書

慶長年間上飢島村流罪大炊御門中将頼国松木少将宗
隆ノ履歴及子孫並近衛三藐院信尹卿履歴共 合三通

三ノ一

口上覚

松木少将殿先年此島江配流被成候時節之儀、御記録所

より御見合ニ付御用之由、伊地知助右衛門殿被仰之由

御地頭所より各江御承之通、奉得其意候、就夫私儀由

緒御座候ニ付、相記可申上之段、被仰聞候、最早歳久

為罷成儀御座候得は、細ニは承得不申候、乍然大炊御

門中将殿・松木少将殿御当国江配流ニ而、当島江居住

被成候比は、慶長年号之由候、何そ文書等無御座候得

共、承伝申候段、左ニ大抵相記差上申候、

大炊御門中将殿

一 飢島江居住被成候比は、慶長年号之由候、何そ文書等

無御座候、

一 妻ハ上飢島衆中梶原宗故娘、(政力) 中将殿死去以来、松木少

将殿江被取合候、

女子 中将殿息女
母ハ梶原宗故娘腹

一中納言公江九歳之比より松木少将殿取立ニ而御奉公仕

廿六歳ニ而御暇為被下之由、母存生之時分申聞置候、

一中将殿死去被成候時分、母二歳之比之由申聞置候、

一 慶長十七年子誕生、法名喜庵妙寿大姉、貞享三年 丙寅 正

月廿六日死去、行年七十五、上飢島衆中本田八郎兵衛妻

但八郎兵衛親八左衛門、甕島地頭本田伊賀殿鹿兒島よ

り寛永十三年ニ相付、高三十斛

中納言より拝領仕、上甕島江被召移候、

本田八左衛門父ハ本田八郎兵衛、母ハ中将殿息女

女子父同人、母同人

上甕島衆中村岡舍人妻

次男

本田次右衛門父同人、母同人

松木少将殿

一甕島江居住被成候比は、中将殿同前ニ慶長年号之由、

母より承伝申候、

一法名松雲院殿法普受慶居士、寛永五年辰八月廿二日死

去、

(朱)押札ニ有リ

少将殿死去之時分、京都所司代板倉周防守様江御披

露御座候由、周防守様より其御返書参候を、藤崎半

右衛門家ニ御座候、御記録所江被差上候処ニ、元禄

九年子四月廿三日、御城御回禄之節、右之御返書焼

失仕候由、伝承及申候、

一妻ハ上甕島衆中梶原宗故娘、中将殿妻、死去以後少将

殿取合、法名ハ安清妙隠大姉、万治元年十一月二日、

本田八郎兵衛側ニ而死去、

一中納言公より甕島江少将殿居住之内、歳々為御養十人

御扶持方被為給、毎日水夫兩人ツ、入、歳々節供毎ニ

時服迄被為給候之由、母存生之時分申置置候、

女子千代 少将殿息女、母ハ梶原宗故娘腹

早世

女子少将殿息女、右同人腹、

一光久公江正保四年亥御奉公、名ハおいちや

松木少兵衛少将殿嫡子、右同人腹

一慶安四年卯鹿兒島江被召移候、上甕島江少兵衛居住之

時分、鹿兒島高三十石余買地有之、鹿兒島江罷移被申

候而より、少兵衛高ニ相直り、小番被相勤候、

一妻ハ水引衆中寺田休左衛門姉、少兵衛甕島江甕島江居

住之時分離別、于今存生、当時ハ隈之城衆中和泉寛左

衛門妻、

一古今一冊・本所之鞍一口・茶入茶杓

光久公江少兵衛存生之刻被差上候、

一切米二十石ツ、歳々為御心付、少兵衛存生之内被給候、

松木伊兵衛少兵衛嫡子、母ハ寺田休左衛門姉腹、

一親少兵衛被相果候時分、伊兵衛幼稚ニ御座候、喜入休

右衛門殿側江罷居養育ニ而、盛人被申候而より、少兵

衛并ニ小番ニ入被相勤候、

一伊兵衛妻ハ大場休右衛門妹、伊兵衛死去以来、大久保

高字妻、

一系凶害通有之候、私所持仕居申候、

一切米二十石ツ、伊兵衛盛人被申候而より、親少兵衛并

ニ被給候、然処ニ伊兵衛病死仕、切米茂被召上候、持

高三十石余茂伊兵衛存生之内ニ私被申候、

女子伊兵衛息女、大場休右衛門妹腹、当分母方ニ付、大久保高字所江罷居候、当年十六歳、

右之段々私母存生之時分申聞置候筋、又松木伊兵衛儀、

近年ニ罷成事ニ候条、覚申候通書記、差出申候、以上、

元禄三年午三月九日

松木伊兵衛從弟
本田八左衛門

上甕島
御暖所

文書原寸 縦一四種 横四二〇種

三ノ二

〔朱〕
「日本野史文臣列伝」

大炊御門頼国、姓藤原氏、権大納言兼按察使経実之後

也、父経頼、権大納言、天正六年頼国叙從五位下、歴侍

從左近衛少将、十五年転中将、慶長三年進正一位（三カ）補任、

諸家、十三年三月頼国及猪隈教利・烏丸光広・花山院忠

長・飛鳥井雅賢・難波宗勝・木松宗信（朱）隆・徳大寺実久・

備後守兼保結伴密勾宮女五人会飲嬖媾、事発覚、天

皇震怒、四月幕府命所司代板倉勝重糾之、教利亡命下

令大索、次年復之於西陲、天皇欲悉処極刑、東照

宮患之、召勝重屢与大臣議、遂令勝重奏請城其罪、教

(朱)本ノママ(本カ)内カ
利・兼保木掌宮門管鑰、且淫行之首其罪殊重、 天皇

深惡之、処教利・兼保於斬、配宮女五人于八丈島、竄

忠長于蝦夷、流頼国・宗信于硫黄島、放雅賢于隠岐、

置宗勝于伊豆、光広・実久削籍屏居東遷基業逸史、孝亮記補任、十八

年五月頼国死于謫所、年三十七補任、弟経孝本名経敦、

慶長十九年正月叙爵累遷至左大臣従一位、子経光嗣官

至左大臣補任、系 図家伝

(朱)
「日本野史文臣列伝」

信尹本名信基、天正五年七月元服、信長加冠、授諱字

称信基織田家譜、是日叙正五位下、聴禁色昇殿、 歴任内

大臣、叙正二位、改信基名信輔、越任左大臣、陞従一

位補任、十九年三月有事居采邑、 文禄元年辞左大臣

二年二月請従征明之役、遊観異域、 後陽成帝弗聴、強

請、太閤秀吉聞之曰、は無益之大事、作書使前田玄以

達之、 帝亦賜書於秀吉止之、於是信輔不得遂葦航之

志豊臣家譜、慶長六年更名信尹、(朱)本ノママ(遺カ) 運任左大臣、 十年七月

詔為関白氏長者、牛車兵仗等如故事、辞左大臣、八月

詔准三宮、明年十二月辞職補任、十九年十一月薨、年

五十補任、号三藐院補任、(朱)能之 有配書之称統王代、信尋嗣、

文書原寸 縦二九種 横二二種 二枚

三ノ三

(朱)
「三因名勝図会之内」

大炊御門中将墓

上甕村里にあり、大炊御門正三位中将藤原頼国の墓な

り、第百八代 後陽成帝の御宇、慶長十四年七月頼国

と松木少将宗隆と二人、猪熊侍従の事に座して、硫黄

島に流さる、宗隆ハ飛鳥井雅庸の親戚たり、故に雅庸

書を 邦君に贈て、宗隆を懇属せらる、因て二人を甕

島に処て優待し玉へり、同十八年三月十日病て卒す、

法諡を一清院殿と号す、頼国此地にて島の土人梶原藤

右衛門宗政か女を妾として、女子一人を生む、名ハ春

此女 慈眼公に仕ふ、年二十六歳の時 公此島土本田

親豊に嫁せしめ給ふ、因て親豊か裔孫世々頼国の墓を守れり、此墓に松を植て標とせしか枯れし故、山茶を植たり、按に知譜拙記に、頼国ハ権大納言経頼の男、慶長三年左中将正三位、同十四年流罪、同十八年五月硫黄島に薨す、三十七と記せり、頼国は此年三月薨せるに、五月薨とあるハ、京都に聞へし時なるへし、公卿補任に、慶長三年従三位藤原頼国二十左中将、正月五日叙正三位云々見へたり、

松木少将墓

上甕村西昌寺境内にあり、自然石を建て標とす、少将宗隆の事実前条に記せり、少将ハ寛永五年戊辰八月廿二日爰に没す、法諡を松雲院殿といふ、島土本田藤右衛門家此墓を守る、梶原宗政か系譜を按するに、少将此島に在て、大炊御門中将没せし後、中将の妾梶原氏を寵し、二女一男を生す、長女千代早夭す、第二女ワイチヤ老茶 慈眼公に仕ふ、承応二年痘を患へて没す、男を少兵衛といふ、松木氏を冒す、其子伊兵衛嗣子なし、

知譜拙記を按するに、松木家ハ中御門家の事にして、

硫黄島に流されし人系譜に見えず、権中納言宗満の第三子宗信兄宗則の養子となりて、少将従四位下に拜任せるあり、時代此人に当れり、

文書原寸 縦二九糎 横四二糎

四 鹿兒島諸座付士ト外城衆中トノ分限ニ関スル藩庁記録ノ抜萃

御書付之写

一 諸座付士は外城衆中より一等上之筋相見得候、其訳は仰渡雑之部八之場、座付士御赦免之儀ニ付、段々ヶ条を以被仰渡候内、脇船頭之儀は外城衆中ニ御赦免被仰付、依功は其身一代御船手付士被仰付、三代相統候は永々御船手付士可被仰付由、相見得候、

右享保三年戊二月、御記録方江御糺被仰渡候由ニ而御家老座書役椎原休左衛門より書写もらひ置候事、一座付士其座江相勤候内、三ヶ石ニは被仰付間敷候、

一 座付士座を離御奉公仕候者は、百石成御免可被成候、諸奉行之格、御馬廻又は小番御免被成候は、百石成御免可被成候、

一 座付士座を不離者、三拾石ニは不被仰付候得共、只今迄持来候者は、右之程より上り高ニ而候は、其上高上りは被仰付間鋪候、

享保三戌七月廿七日 彈正

一 近年表医師之儀、座付士・外城衆中も被仰付候処、鹿兒島士・座付士・外城衆中之分ケなく、都而表医師被唱候ニ付、旁紛敷有之候間、向後鹿兒島士迄を表と唱座付士・外城衆中を表寄番医師と唱、尤当分相勤居候座付士・外城衆中之分は、都而早速より表寄番医師と唱可申候、

一 表・奥寄番医師之儀、節句日其外折目之

御目見仕儀有之節は、奥医師・表医師同席ニ罷出来候得共、自今以後御祝義申上節は、外城衆中之儀は、夫々之地頭宅、役所有月番御用人宅江罷出、御祝儀可申

上候、座付士之儀は、奥医師罷出候場所ニ而席近皆御目見可被仰付候、

右之通、組中支配中江可致通達候、以上、

享保十一年七月 中務

一 座付士座を放御奉公仕候者は、百石成之願申出候は、御免可被成候、且亦座付士小番相勤候筋目之養子ニ罷成、小番相勤候者、三百石成御免可被成候、

享保十三申十二月十五日 李

取次

戸田平次

文書原寸 縦一六種 横二〇種

五 薩隅日大坪流馬術伝統記

〔表紙〕 一 薩隅日

大坪流伝統之記

○ 惟新君は荒木志摩守入道安志ヲ師トシテ大坪流ノ奥義

ヲキワム、安志死シテ後又其子荒木元満ヲ師トス、公ノ馬術ヲ好ゴトキハ、日本無双也ト、元満奉書ノ端ニ言上ス

義弘入道惟新公ハ馬術(朱)「ヨ」ノ名譽世ニ無レ隠レトイヘトモ(朱)「アツタニ」諷 君名ヲアラワスニ恐レアリテ細事ヲ不レ記、公伝ヲイタ、ク人三原左衛門其外略ス、

○矢野主膳始休次ト云、義弘公ノ近侍也、隅州加治木ニ居、後移レ鷹府ニ、自レ少年好シ馬術ヲ、中年ニシテ君命ヲカウムリ、荒木安志ノ元ニテ大坪流ヲ練習シテ上達ス、安志、元満モ又 公ノ命也トトテ重レ之シテ不レ殘ニ秘法ヲ、

(朱)「ハイシヨ」主膳ハ後故アツテ配所ニアリ、我カ芸ノスタランコトヲカナシミ、牢中ニテ馬書ヲアミ、子孫ノ方ハ渡ス、今此書ヲ大坪流ノ重宝トス、然共意味不レ寛、(朱)「カケラ」天下ノ広大ナルコトヲ忘レ、一身ノ芸術ニセマリ、(朱)「ラノレ」己ヲ以テ無レ上トイフ、配所ノコ、ロ屈シタルコト見ヘタリ、初学ニシテ此ノ書ヲ熟読セハ、必スヘン固ナ

(朱)「モトヒ」ラン基ナリ別ニ引レロツノ書ヲアム、寛永拾四年霜月朔日、アルヒト 光久公江於江戸進上ス、此写モ又(朱)「カコラス」不レ輕トス、

○島津下野守久元は荒木元満ニ馬術ノ伝ヲウケ、元満ヨリ印可免状ヲサツク、

○土持平左衛門綱辰は鹿兒島ノ士也、島津下野守久元ヲ師トシテ、嗜レ御一術而得レ馳一駆、人亦云善御也ト、

(朱)「ユヘン」(朱)「シルン」(朱)「ウル」所一以ニ其驗ヲ得レ編集欲レ遺ニ子孫、慶安年中ニ新編御術内外最要集ヲ作ル、大坪流ヲ学者今猶此尤要集ヲ觀覽ス、

○相良内蔵丞は本肥後求摩ノ相良家ナリ、馬術ヲ荒木元満ニ習テ得ニ其驗、入ニ其門ニ伝書ヲサツカル者多シ、実名ハ頼章ト云、

○村山内記は相良内蔵丞頼章ノ家臣ナリ、頼章ヨリ大坪流ノ伝ヲウケテ上達ス、此門ニ從者多、

○島津市正忠広ハ大坪流ノ伝ヲ能勢勝左衛門頼春ニ受、(朱)「ウケ」馬術ヲ薩藩ニホドコス、

○島津大学忠守は市正忠広ノ伝ヲ継テ、大坪流(朱)ワシニヲ教(二)國

人ニ、

○脇元七右衛門清長は大学忠守ノ伝ヲ受テ大坪流ヲ相統

シテ教(朱)シタカワレ馬術、從(朱)シタカワレ是ニモノ多シ、

○上田主計(朱)カミタは始佐土原ノ人也、後鹿兒島ニ移(ル)、大坪流ヲ

荒木元満ノ子、同十左衛門元政ノ弟子、永岡七左衛門

直次(朱)ウケニ請、伝習シテ有(朱)ウケニ其驗、然共此伝統不(レ)統、馬書

ノミ上田カ家ニ有、

○松山甚六景時ハ始馭馬ノ口ヲ取者也、從(レ)少年御法ヲ

好ミ、在郷ノ間は村山内記及脇元七右衛門ニシタカツ

テ練(二)習(一)御(一)法(一)、江都ニ赴テハ其地人永井茂左衛門正

毅ニシタカツテ練習シ、大坪流ノ宗ヲ得(テ)立身ス、出(二)

入(二)ス(一)此門ニ者多シ、享保十六年辛亥十二月十四日死、南

林寺ニ葬、行年七十七、法名大心、其子松山友悦始学(レ)

御(一)術(一)、中(朱)ナカコ口捨テ、学(レ)医(一)術(一)、後信証院殿ノ薬医ト

ナル、名医ノホマレアリ、

○大内山乗左衛門兼亮は始加治木ノ家臣也、主人ノ命ニ

因テ、十九歳之時ヨリ馬芸ヲ松山甚六景時ニナロフコ

ト凡二十六年、景時ヨリ年ノヲクレタルコト三十四年

終(朱)トニ精妙之緒ヲサトル、後身(朱)ナチヲ立(朱)タテ、国司ノ殿士ト成也、

入(レ)此門学(レ)馭法者ソクバク、明和六年丑正月十二日

死、葬松源山ニ、法名伯勇、年八十一、

伝書曰

○上田吉之丞・武田与右衛門在判 元和四年五月吉日

能勢小十郎殿

能勢小十郎頼隆在判 寛永七年午正月吉日

能勢勝左衛門殿

能勢勝左衛門頼春在判 寛文寅卯月九日

島津市正殿

島津市正忠広在判 延宝五年巳正月十四日

島津大学殿

島津大学忠守判 貞享元年子十二月廿四日

脇元七右衛門殿

脇元七右衛門清長判 貞享五年辰八月二日

松山甚六殿

松山甚六景時判 宝永七年寅十月十二日

大内山乘左衛門殿

大内山乘左衛門兼亮判 宝曆十二年九月日

町田佐平次殿

松山景時江戸伝書曰

○森勘解由亮長明 寛永十四年正月吉日

能勢勝左衛門殿

能勢勝左衛門尉頼春 寛永二十年八月吉日

能勢山城守殿

能勢山城守頼隆 延宝六曆六月吉日

永井勘七殿

永井茂左衛門正毅 元禄元年 月 日

松山甚六殿

松山甚六景時 正徳元年十二月吉日

大内山乘左衛門殿

大内山乘左衛門兼亮 寛延三年八月廿二日

町田佐平次殿

冊子原寸 縦二六・八糎 横二〇糎 七枚

○六 中西十郎左衛門卜吉井七之丞卜ノ相互

書翰

童舞抄云々ノ件

二通

○七 賢章院ヨリ普之進公へ

年始状ノ返書

○八 又次郎殿重富家へノ移転御用掛任命

○九 普之進殿種子島家養子離縁ノ件

○十 普之進、又次郎卜改名仰出

重富家島津出雲婿養子仰出

二通

○十一 又次郎殿へノ文庫其他御品覚書

一実名天保二年辛卯二月廿三日称教明、

天保八年丁酉三月十日敬親ト改ム、

○十二 又次郎殿重富家婿養子ニ付待遇ノ件

同年六月十八日將軍家賜一字為慶親一字折紙在
于叙任之部

元治元年甲子十月除慶字復敬親、

○十三 財政整理主任氏名及期間

二通

十四 毛利敬親事蹟

一長州阿武郡萩城主

(表紙)
「毛利敬親事蹟从天保八年
至十年」

周防長門一円領之高三十六万九千四百一十一石

天保十年己亥三月六日家慶將軍判物如左、

周防長門兩國一円高三拾六万九千四百拾壹石目録在
別紙

苗字姓尸実名

贈従一位毛利敬親

事充行之訖、依代々之例領知之状如件、

一毛利氏大江姓又稱松平氏

天保十年三月六日 判

幼名毛利猷之進

長門侍從殿へ

天保八年丁酉三月八日稱松平猷之進、

同年六月十八日大膳大夫ト改ム口實在于
叙任之部

元治元年甲子十月除松平稱毛利大膳、

安政二年三月五日 判

慶応三年丁卯十二月十三日復大膳大夫、

長門少將殿

生誕年齢

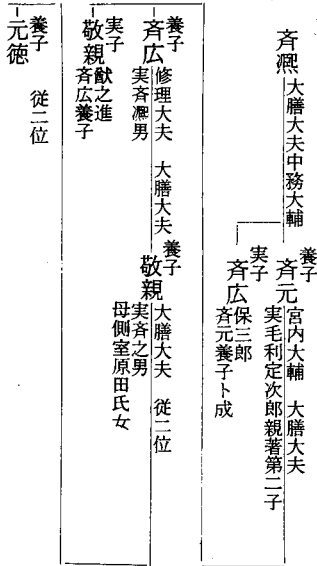
一文久二年己卯二月十五日実ハ十日誕生于武藏国豊島郡江戸麻布龍土邸、

明治四年三月廿八日薨于防州吉敷郡山口瀧村、齡五十三歳五十二年当一月二相当

世系

一実大膳大夫齐元長男齐元イニタ齊熙ノ養子ニ不相成以前部屋住ノ子也大膳大夫齐広養子卜成、世系如左、

毛利元就十三世



叙任

一天保八年丁酉六月十八日敬親因召、毛利甲斐守同道登城、於白書院謁于家慶將軍・大納言家祥卿、奏者番板倉阿波守披露、下段敷居之内右江著座、上意有之、一字之折紙老中水野越前守ヨリ渡之、敬進而頂戴之、於御次被叙任從四位下侍從之旨、老中列座越前守申渡之名大膳大夫卜成、其後造太刀卷物十・白銀三十枚・馬一匹獻上之、一字并官位之御礼申上退座、重而出座二之間、右之方著座、家慶將軍賜盃、進而頂戴之、備中国重之刀拝領之、帶刀御礼相濟退座、名之儀ハ各別申渡ハ無之、一字折紙ニ改之、名調有之、一字之折紙從五位下口宣・位記、大膳大夫口宣、從四位下口宣・位記侍從口宣、紫組冠懸緒免許、禁裡江御官物其如左、

慶

天保八年酉

六月十八日

家慶判

松平大膳大夫殿江

口宣案

上卿花山院右大将

天保八年六月十八日

宣旨

大江慶親

宣令叙従五位下

藏人頭右近中将兼皇太后宮権亮藤原忠能

大江朝臣慶親

右可従五位下

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣授
榮爵、用旌寵章、可依前件、主者施行、

天保八年六月十八日

二品行 中務 卿 韶 仁 親 王

宣

正四位下行中務大輔臣卜部朝臣行学

奉

従四位上行中務少輔臣藤原朝臣随資

行

正二位行権大納言兼右近衛大将臣 家厚

正二位行権大納言臣 輝弘

正二位権大納言兼皇太后宮大夫臣 実堅

正二位行権大納言臣 基豊

正二位行権大納言兼皇太后宮権大夫臣

正二位行権大納言臣

正二位行権大納言兼左近衛大将臣 輔熙

正二位行権大納言臣 実揖

従二位行権大納言臣

従二位行権大納言臣 斉敬

正二位行権中納言臣 光成

正二位行権中納言臣 建通

正二位行権中納言臣 言知

正二位行権中納言臣 隆生

正二位権中納言兼右衛門督臣

正二位権中納言兼右衛門督臣 顯孝

従二位行権中納言臣 隆光

正三位行權中納言臣 実久

正三位行權中納言臣 公遂

權中納言從三位兼行左近衛權中將臣 幸経等言

制書如右、請奉

制、付外施行、謹言、

天保八年六月十八日

制可

月日辰時從四位上行大外記兼掃部頭助教中原朝臣師徳

右中弁光政

正三位行右大弁兼勘解由長官隠長

告從五位下大江朝臣慶親、奉

制書如右、符到奉行、

正五位下行兵部少輔兼因幡守嘉純

大錄氏万

少録

少録

天保八年六月十八日

口宣案

上卿徳大寺大納言

天保八年六月十八日 宣旨

從五位下大江慶親

宣任大膳大夫

藏人左少弁兼左衛門權佐皇太后宮權大進藤原俊克奉

從五位下大江朝臣慶親

兵部大輔闕

二品行兵部卿貞敬親王

從一位行内大臣朝臣

從一位行右大臣朝臣

從一位行左大臣朝臣

太政大臣闕

関白從一位朝臣

正二位行權大納言兼皇太后宮大夫藤原朝臣実堅

天保八年六月十八日

宣、奉 勅、件人宜令任

二品行中務卿韶仁親王 宣

大膳大夫者、

正四位下行中務大輔臣下部朝臣行学 奉

天保八年六月十八日大外記兼掃部頭助教

從四位上行中務少輔臣藤原朝臣随資 行

中原朝臣師德奉

口宣案

上卿醍醐大納言

正二位行權大納言兼皇太后宮大夫臣 基豐

天保八年六月十八日 宣旨

正二位行權大納言兼皇太后宮權大夫臣

從五位下大江慶親

正二位行權大納言臣

宣叙從四位下

正二位行權大納言兼左近衛大將臣 輔熙

藏人右少弁藤原恭光奉

正二位行權大納言臣 実揖

大江朝臣慶親

從二位行權大納言臣 斉敬

右可從四位下

正二位行權中納言臣 光成

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣申

正二位行權中納言臣 建通

榮級、式顯朝章、可依前件、主者施行、

正二位行權中納言臣 言知

正二位行權中納言臣 隆生

從一位行內大臣朝臣

正二位行權中納言臣

二品行兵部卿貞敬親王

正二位行權中納兼右衛門督臣 顯孝

兵部大輔闕

從二位行權中納言臣 隆光

正三位行右大弁兼勘解由長官聡長

正三位行權中納言臣 実久

告從四位下大江朝臣慶親、奉

正三位行權中納言臣 公遂

制書如右、符到奉行、

權中納言從三位兼行左近衛權中將臣 幸経等言

正五位下行兵部少輔兼因幡守嘉純

制書如右、請奉

大録氏万

制、付外施行、謹言、

少録

天保八年六月十八日

少録

制可

天保八年六月十八日

月日辰時從四位上行大外記兼掃部頭助教中原朝臣師徳

右中弁光政

口宣案

関白從一位朝臣

上卿徳大寺大納言

太政大臣闕

天保八年六月十八日 宣旨

從一位行左大臣朝臣

從四位下大江慶親朝臣

從一位行右大臣朝臣

宣任侍從

藏人頭中弁兼皇太后宮亮藤原正房奉

從四位下大江朝臣慶親

正二位行權大納言兼皇太后宮大夫藤原朝臣実堅

宣、奉 勅、件人宜令任

侍從者、

天保八年六月十八日大外記兼掃部頭助教

中原朝臣師德奉

從五位下諸大夫成

禁裏 御太刀折紙黃金杓枚

上臈御局 銀子杓枚

長橋御局 右 同斷

大御乳人 右 同斷

執次 銀子式拾目

仙洞 御太刀折紙白銀三枚

新大納言御局 銀子杓枚

權中納言御局 右同斷

別当御局 右同斷

刑部殿 右同斷

執次 銀子拾文目

大宮 白銀三枚

万里小路御局 銀子杓枚

梅小路御局 右 同斷

御乳人 右 同斷

執次

蹴鞠為門弟紫組
冠梟之事、窺

叡慮所免之如件、

天保八年

六月十八日 雅光

長門侍從殿

松平大膳大夫大江慶親朝臣從五位下諸大夫・從四位下侍

從成御官物之事、

親王 御太刀折紙白銀三枚

高松御局

銀子壹枚

御乳人

右 同断

執次

銀子拾文目

准后 白銀三枚

於千万御方

銀子壹枚

於登志御方

右 同断

執次

銀子拾文目

内侍所 御太刀折紙白銀四拾目

上卿

銀子六拾目

職事

右 同断

上卿

右 同断

職事

右 同断

位記

銀子五枚

宣旨

右 同断

御請印

銀子六拾目

中務大輔

右 同断

中務少輔

右 同断

兩伝奏

銀子六拾目充

中務省

銀子壹枚

主鈴兩人

銀子壹枚宛

位記副使

銀子拾五文目

宣旨副使

右 同断

雜掌四人

銀子貳拾目宛

從四位下成

禁裏 御太刀折紙黃金壹枚

上藤御局

銀子壹枚

長橋御局

右 同断

大御乳人

右 同断

執次

銀子貳拾目

仙洞 御太刀折紙白銀三枚

新大納言御局

銀子壹枚

權中納言御局

右 同断

別当御局

右 同断

刑部殿	右 同断	職事	右 同断
執次	銀子拾文目	上卿	右 同断
大宮	白銀三枚	職事	右 同断
万里小路御局	銀子壹枚	位記	銀子五枚
梅小路御局	右 同断	宣旨	右 同断
御乳人	右 同断	御請印	銀子六拾目
執次	銀子拾文目	中務大輔	右 同断
親王	御太刀折紙白銀三枚	中務少輔	右 同断
高松御局	銀子壹枚	兩伝奏	銀子六拾目宛
御乳人	右 同断	中務省	銀子壹枚
執次	銀子拾文目	主鈴兩人	銀子壹枚宛
准后	白銀三枚	位記副使	銀子拾五文目
於千万御方	銀子壹枚	宣旨副使	右 同断
於登志御方	右 同断	雜掌四人	銀子貳拾目宛
執次	銀子拾文目	侍従成	
内侍所	御太刀折紙白銀四拾目	禁裏	御太刀折紙白銀五拾枚
上卿	銀子六拾目	官錢貳百貫文	

仙洞 御太刀折紙白銀三拾枚

大宮 白銀三拾枚

親王 御太刀折紙白銀三拾枚

准后 白銀三拾枚

内侍所 御太刀折紙白銀貳枚

上卿 銀子六拾目

職事 右 同断

宣旨 銀子五枚

兩伝奏 銀子五枚宛

宣旨副使 銀子貳拾目

雜掌四人 銀子四拾目宛

右之通請取差上、銘々へ相渡申候、以上、

日野前大納言殿家

天保八年酉七月

古田 藏人 印

山中左近番長同

徳大寺大納言殿家

滋賀右馬大允印

国司丹下殿

淡川伊勢守同

松平大膳大夫殿懸 御礼物

禁裏 白銀五枚

仙洞 白銀三枚

大宮 白銀三枚

親王 白銀三枚

准后 白銀三枚

飛鳥井家 銀子三枚

同家雜掌兩人 銀子老枚宛

右之通請取申候事、

飛鳥井家

天保八年七月

安田監物

市岡兵部

国司丹下殿

一弘化四年丁未十二月十六日、因召登城、毛利淡路守同

道、於白書院椽頼老中・大目付其外列座、被任少将之

左近衛権少将者、

旨、戸田山城守申渡之、同廿五日登城、於黒書院謁于

弘化四年十二月十六日大外記兼掃部頭造酒正

公方家、昇進御礼申上、老中取合上意有之、公方家江

中原朝師身奉

太刀一腰・縹紗五卷・馬代黄金十兩一匹、右大将江太刀

一腰・馬代黄金十兩一匹、御簾中江白銀五枚献之、

松平大膳大夫大江慶親朝臣

口宣并御官物如左

少将成御官物之事

少将成

口宣案

禁裏 御太刀折紙白銀三十枚

上卿徳大寺大納言

上藤御局 白銀二枚

弘化四年十二月十六日 宣旨

長橋御局 同二枚

侍従大江慶親朝臣

大御乳人 同二枚

宣任左近衛権少将

執次 同一枚

藏人頭左中弁藤原俊克奉

内侍所 御太刀折紙白銀二枚

上卿 銀六拾目

侍従大江朝臣慶親

職事 銀六拾目

正二位行権大納言藤原朝臣実堅

宣旨 銀五枚

宣、奉 勅、件人宣令任

両伝奏 銀三枚宛

宣旨副使

銀貳拾目

雜掌四人

銀四拾目宛

右之通請取差上、銘々相渡申候、以上、

坊城前大納言殿家

山本將監印

高須縫殿印

徳大寺大納言殿家

滋賀右馬大允印

物加波周防守印

氏家与三左衛門殿

一安政四年丁巳十二月十六日、因召登城、於白書院椽

老中・大目付其外列座、被叙従四位上之通申渡有之、

如左、

松平大膳大夫

其方儀、未年輩と申ニも無之候間、昇進之御沙汰ニは

難被及候得共、家督已来国政向格別入精、其上相模国

御備場御用引請被仰付、防禦筋之儀万端御委任被成候

ニ付、出格之 思召を以、従四位上ニ被仰付候儀と被

相心得、御備場之儀弥以相励候様可被致候、

同廿一日御礼登城、公方家御台所其外献上物有之、口

宣・位記并御官物如左、

禁裏江後之御礼献上

御太刀 一腰

縹紗 十卷

御馬代黄金十兩 一匹

口宣案

上卿坊城中納言

安政四年十二月十六日 宣旨

従四位下大江慶親朝臣

宣叙従四位上

長門少将

慶親

藏人頭左大弁藤原胤保奉

從四位下大江朝臣慶親

右可從四位上

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宜申

榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

安政四年十二月十六日

二品行中務卿 幟仁親王 宣

正四位下行中務大輔臣 卜部朝臣 久隆 奉

正五位下行中務少輔臣 藤原朝臣 資生 行

正二位行權大納言臣 建通

正二位行權大納言兼左近衛大將臣 忠香

正二位行權大納言臣 齊敬

正二位行權大納言臣 幸經

正二位行權大納言臣 公純

正二位行權大納言臣 忠能

正二位行權大納言臣 正房

正二位行權大納言臣 家信

正二位行權大納言臣

正二位行權中納言臣

正二位行權中納言臣

正二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣

從二位行權中納言兼左近衛權中將臣

從二位行權中納言臣

正三位行權中納言臣

權中納言從三位兼行左衛門督臣

制書如右、請奉

制、付外施行、謹言、

安政四年十二月十六日

制可

月日辰時正四位下行大外記兼掃部頭造酒正

光政

實愛

實德

愛長

俊克

實良

忠順

道孝等言

中原朝臣師身

右中弁経之

松平大膳大夫大江慶親朝臣從四位上成

関白從一位朝臣

御官物之事、

太政大臣闕

禁裏 御太刀折紙黄金耖枚

從一位行左大臣朝臣

上臈御局 銀子一枚

從一位行右大臣朝臣

長橋御局 右 同断

内大臣正二位兼行右近衛大将朝臣

大御乳人 右 同断

三品行兵部卿貞教親王

執次 銀子式拾目

從四位上行兵部大輔紀季

准后 白銀三枚

正四位下行右大弁長順

於八百御方 銀子一枚

告從四位上大江朝臣慶親

於五百御方 右 同断

制書如右、符到奉行、

執次 銀子拾文目

從四位下行兵部少輔兼出雲守長教

内侍所 御太刀折紙白銀四拾目

大録氏裕

上卿 銀子六拾目

少録

職事 右 同断

少録

位記 銀子五枚

安政四年十二月十六日

御請印 銀子六拾目

中務大輔

右 同断

中務少輔 右 同断

両伝奏 銀子六拾目

中務省 銀子一枚

主鈴兩人 銀子一枚宛

位記副使 銀子貳拾目

雜掌四人 銀子貳拾目宛

右之通請取差上、銘々相渡申候、以上、

東坊城前大納言殿家

安政五午年正月 宮崎造酒 印

三上信濃介 印

広橋前大納言殿家

浜路阿波守 印

藤堂兵庫権助 印

羽仁彦右衛門殿

禁裏江後之御礼献上

御太刀 一腰

縹紗 十卷

御馬代黄金十兩 一匹

准后江

縹紗 五卷

一安政六年己未十二月十六日、因召登城、毛利讃岐守同道、於白書院椽頼井伊掃部頭・老中列座、被任中將之旨、内藤紀伊守申渡有之、如左、

松平大膳大夫

其方儀、此上昇進之難被及沙汰筋ニ候得共、先達而相模国御備場御用被仰付、尚又兵庫表御警衛一手ニ被仰付、同所之儀は京都近之海岸、殊ニ場所柄之処警衛向万端其方奄人江御委任被成置候儀ニ付、出格之 思召を以、中将被仰付候儀ニ被相心得、御警衛筋之儀弥入精相励候様可被致候、勿論以来之家格ニ被相心得間敷候、

同廿三日御礼登城、公方家江御太刀・金・馬代・縹紗

五卷献上、其外略之、

口宣并御官物如左、

口宣案

上卿坊城中納言

安政六年十二月十六日 宣旨

左近衛權少将大江慶親朝臣

宜転任左近衛權中將

藏人頭右大弁藤原長順奉

左近衛權少将大江朝臣慶親

正二位行権中納言藤原朝臣俊克

宣、奉 勅、件人宣令転任

左近衛權中將者、

安政六年十二月十六日大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身奉

松平大膳大夫大江慶親朝臣左近衛權中將成御官物之事

禁裏 御太刀折紙黄金三枚

上薦御局 杉原十帖
緞子一卷

長橋御局 銀子三枚

大御乳人 杉原十帖
緞子一卷

執次 銀子一枚

准后 黄金貳枚

於八尾御方 (百九) 杉原十帖
緞子一卷

於五百御方 右 同断
銀子五兩

執次 銀子五兩

内侍所 御太刀折紙白銀五枚

上卿 銀子六十目

職事 右同断

宣旨 銀子五枚

兩伝奏 銀子五枚宛

宣旨副使 銀子貳拾目

雜掌四人

銀子四拾目宛

坊城中納言殿家

安政七申年正月

山科筑前守 印

淺野主膳 印

広橋前大納言殿家

野村主馬 印

藤堂兵庫權助 印

祖式宗助殿

禁裏後之御礼献上

御太刀 一腰

縹紗 十卷

御馬代黄金拾兩 一匹

准后江

縹紗 五卷

一文久三年癸亥正月十七日、因御召參 内、拜 龍顏、

天盃頂戴、於御取合廊下 御太刀拜領、於虎之間參議御

推任被 宣下之旨、坊城大納言殿被仰渡之、如左、

奉為 皇国、抽丹誠、周旋有之、功勞不少、

叡感被為有候、依之以別段之 思食、賜 御劍候事、

正月

松平大膳大夫

奉為 皇国、抽丹誠、周旋有之、功績不少候条、

叡感被為在候、依之參議推任被 宣下候、猶尽力 様

思食候事、

口宣案

上卿坊城大納言

文久三年正月十七日 宣旨

左近衛權中將大江慶親朝臣

宣任參議

藏人右少弁藤原俊政奉

左近衛權中將大江朝臣慶親

正二位行權大納言藤原朝臣俊克

宣、奉 勅、件人宜令任

參議者、

文久三年正月十七日大外記兼掃部頭造酒正助教

中原朝臣師身奉

拝領 御太刀之注文

一御太刀卷腰 波平安周、長式尺式寸三步按ニ安周明和比薩州之人 鏝

単金無垢、此目九匁八分五厘

切羽六枚、内式枚赤銅、四枚金無垢、此目八匁八分、

鏝赤銅三枚、惣地七子、小縁金彩、御紋菊桐、彫上ケ

金彩、鞘惣梨地、菊桐御紋、高蒔絵、鯉口金泥塗、鉄

貝赤銅

地七子、菊桐御紋、彫上ケ金彩、卷式之間鞆渡り、

卷下浅黄金入、包糸巻鞆革浅黄、鉄物赤銅、地七子

金小縁、内式ッ菊御文彫上、帯取亀甲、打浅黄金入

包

柄縁頭赤銅、七子、小縁金、御紋菊桐、彫上金彩猿手

共

同断鯨之所浅黄金入包糸巻

目貫赤銅、菊桐御紋三ッ並金彫

星目釘金無垢此目卷匁分

袋巻ッ、表浅黄地金入・裏白紬付緒浅黄綾杉打房付、

御太刀箱巻ッ、桐白木、唐戸面取、菊桐御紋、金高蒔

絵

飢々座共銀飢座菊形付、緒浅黄綾杉打房付

一明治元年戊辰九月十八日依 御召午半刻参朝之処、於

輔相候所、中將兼任従三位進階両通之宣下岩倉卿被渡

之、更ニ 御学問所被為 召

主上臨御、中山儀同殿伺候、御召シ古シ之御引袴御

合御 拝領御品御広蓋ニ載 儀同殿御伝達之旨有之、畢而退

座、於新廊下著衣冠此迄常服直垂ナリ、御釋児衆ヲ以御礼申上更

ニ 御前江因幡中將一同被為召、輔相御取合ニテ御菓

子頂戴、了而退 朝、

中将兼任従三位進階兩通之宣下其外、如左、

毛利宰相

兼左近衛權中將

叙従三位

右

宣下候事、

九月十八日

毛利宰相

参議兼中将之事、雖無家例出格之

思召ヲ以テ被

宣下候事、

九月

行政官

毛利宰相

先般依 召、速ニ登京、殊ニ滞在中時々参 朝、

御前抵候、國家之大事彼此献言、深摯之忠情 御満

足被 思召候、然処頃日依病氣、帰国願出 御残念

被 思食候得共、不得止願之通被 聞食候、因而別

段之訳ヲ以、別紙之 御品下賜候事、

九月

行政官

一明治二年己巳六月二日、於大広間

御前 詔書輔相誦上、御沙汰書弁事五辻彈正大弼伝達

敬親依在國
元徳拜承

詔書写

朕惟、復皇道之衰、濟天下之溺、一資汝有衆之力而

其建節巖疆、宣威遠方、艱苦尽瘁無所不至、朕切嘉

獎之、乃頒賜以酬有功、願前途其遠矣、厥克翼賛大

成、朕益有望汝有衆、汝有衆其懋哉、

毛利宰相中將

毛利少將

積年勤

王之称首ト為リ、精忠不屈之大義ヲ以テ

皇運ヲ一方ニ維持シ、戊辰ノ春、(伏見)伏水一戦大ニ賊胆

ヲ破リ、天下人心ノ方嚮ヲ決シ、統テ大兵ヲ東北諸

道ニ出シ、毎戦取捷竟ニ今日平定ノ偉功ヲ奏シ、奉

安

宸襟候段、洵ニ国家柱石ニ被

思食、 叡惑不斜、依テ為其賞官位昇進、禄拾万石

下賜候事、

六月

行政官

毛利宰相中将

任權大納言、叙従二位

右

宣下候事、

六月

行政官

毛利宰相中将

高拾万石

依勲功永世下賜候事、

明治二年己巳六月

毛利少将

任參議、叙三位、

右

宣下候事、

六月

行政官

一明治四年辛未四月廿八日、勅使堀川侍從殿山口御下向

元徳忌中ニ付豊浦知事毛利従五位名代相勤、於旅館敬

親江 御贈位之儀被仰渡之、同廿九日贈従一位、幕前

江 勅使御参拜、宣命御読上ケ、御幣物絹綿及鱈三種

御奠備有之、

故従二位大江朝臣敬親

首倡勤 王回 皇運、于既衰誓期報効賛 大政乎

更始維忠維義、洵是国家柱石、厥功厥績、実為藩翰儀

型、茲聞溘亡曷勝痛悼、因贈従一位、以彰偉勲 宣

明治四年辛未四月十五日

故従二位大江朝臣敬臣

贈従一位

右大臣従一位藤原朝臣実美宣

大弁従三位藤原朝臣俊政奉行

明治四年辛未四月十五日

天皇乃大命尔座世、贈従一位大江朝臣敬親乃靈乃前尔

正三位行侍従藤原朝臣康隆乎使止為互、宣給波久止白

左久、往志日与利劳支悩牟状乎聞食互、思保志煩波世

給比志尔、遂尔永久此世乎避留聞食互、最傷美惜麻世

給布、故遙尔使差互靈乃前尔絹綿及纏乃三種乎備互、此

状乎告志米給布、天皇乃大命乎甘良尔聞食世止宣留

明治四年四月十七日

勅使堀川殿江御沙汰写

一従二位薨去ニ付、良今為御尋、堀川侍従御差之事、

一同上ニ付知事江御尋、御菓子被下候事、

一同上ニ付贈位御使堀川勤仕之事、

但弁官心得ニ而当日勤仕御沙汰之事、

一同上ニ付 宣命幣物堀川勤仕之事、

一山口藩知事故従二位薨日より三十日相立候ハ、出仕

参府之事、

但別ニ御沙汰書有之、

一臨終建言云々之事、

一木戸早々上京之事、

一詔書ハ於客館末家之内江相渡候事、

一宣命・幣物

幣物と 人より藩官員受取り、備了テ

勅使 宣命を讀、畢テ知事江相渡候事、

履歴 第一

文政三年庚辰十一月十五日髪置

同四年辛巳四月廿七日発江戸、六月朔日下長州阿武郡萩

八町邸、

同六年癸未二月十一日、初著上下、參詣于鶴江神明社、

同七年甲申正月八日麻疹

文政九年丙戌五月七日、稽古初ル、射術栗屋舎人 指南、劍術高木

勝平 馬術内藤喜右衛門 指南、 諷竹本佐太郎 指南

同十年丁亥二月十五日、居合・立合・抜方稽古初ル北川弁藏 指南

一五月三日初而明倫館聖廟拝礼、講釈聴聞、諸稽古廻見
諸生之音樂聴聞、

同十三年庚寅六月廿五日、手跡・学問山県慎平指南、自

是以前瀧茂兵衛・草場良藏追々指南ストいへとも、年月
不知、

一九月廿五日痘瘡、十月八日酒湯、

天保二年辛卯二月廿三日、入角袖留、甲冑著初、

一三月廿日、槍術稽古初ル、岡部半右衛門指南、

一五月廿八日、折分、中村九郎兵衛儒書講釈聴聞初る

一十月十九日、於大甲庵水上に鴨を射ル、初而矢先、

一十一月八日、能島流船軍之書稽古初ル、北川弁藏指南

一同月十五日、矢披之式有之、依射鴨也、

同四年癸巳七月六日齋元室為養、

一十一月三日、猷之進事、妾腹ニ而誕生砌より虚弱之処

丈夫成之儀、先手衆奥山主税介を以、老中松平周防守

江父齋元より届之、

天保六年乙未二月十五日執前髪、

同七年丙申六月十二日晝萩大川洪水、市街座上満水、八

町居邸逢于水難、乗船避于南園楼、夕方往于城、其夜移

居于瓦町客館八町邸大損、住居 難成ニ因テナリ、

一八月十三日、自瓦町客館移居于渡口邸、

天保八年丁酉二月三日、発秋渡口邸、三月二日、著江戸

桜田邸、

一三月五日、齊広依無嗣子養子之願差出、同八日如願可

為養子之旨有許命齊広因病、毛利甲斐守登城、於白書院老中列 座、松平和泉守申渡、御奏者、大目付列席、

一同月十七日養父齊広病死、

一四月廿七日家督因召老中松平和泉守宅江相越候処、大膳大夫遣 領可被下候旨、台命を伝ふ、同道毛利甲斐守也

忌中ニ候得と も目代仕候、

一五月十五日御礼登城、謁家慶公、以家格營中之無官ニ

而侍従之格如先例、家老宍戸孫四郎・毛利蔵主・毛利志摩・繁沢凶書・梨羽頼母、以上五人御目見、

献上物、如左、

上様江

一御太刀一腰・白銀百枚・縹紗二十卷・御馬二疋栗・

御刀一腰美濃国壽命代金拾五枚

大御所様江

一御太刀一腰・白銀百枚・御馬一疋青毛・御刀一腰肥前国忠

国代金拾五枚

大納言様江

一御太刀一腰・白銀百枚・御馬一疋栗毛・御刀一腰備後国正

家代金拾五枚

大御台様 御台様江

一白銀拾枚宛、縮緬十卷宛、

以上、

一家老五人より上様江御太刀・銀馬代宛、紗綾二卷ッ

、大納言様御太刀・銀馬代宛、銘々より献上仕候

一六月二日、実方之叔父毛利卿之助気分相為保養国元江差下候段、老中水野越前守江届之、

一同月十六日、為嘉祥御祝詞登城、無官ニ而著座、

一八月十二日、始賜御鷹之雲雀上使松平伊勢守

一九月二日、依將軍 宣下登城、謁幕府此時東帶栗嶺備内牽察馬

一十月廿六日、所帯從來難渋ニ付、家来中半知之出米申付候ニ付、墨印を以左之通申聞せ候、

從來不勝手之所帯、其上多年打統数廉之造佐入有之借財莫太ニ相成、御代々別而御苦勞に被思召、過ル辰年敵重仕組被仰付置候、此段改而申聞せるニあは寸難渋之次第に候処、不図去今年度々之吉凶用度剩去夏未曾有之洪水にて所々之大破、加之去秋作方不熟廉々、一事も不容易物入にて、借財弥増、危急之期に臨ミ、当惑至極之事々、依之家督抑別而心外之儀ニ候へとも、非常省略相用候段公边江相届、家格之備立・公儀役向江之贈物等相減し、内外共諸事令省略、国家取統之手段申付候、家来中も数年困窮

之段聞届、取続之程も無心元、我等代始旁出米輕目之詮議雖申付、繰卷方便ニ絶、尋常ニては仕組立之目途不相立、乍氣毒引統馳走受る之外無之、右ニ付当年之処ハ是迄之通重き出米申付候条、大切之時節能々令勘弁、身分をかへりミ、弥以質素を尽し風俗ニ心を用ひ、且々も取続奉公之覚語肝要たるへし、委細年寄共より可申聞者也、

天保八年

十月廿六日

当役中より添書付左之通、

從來御所帶御不勝手ニ付而は、御代々様重く被尺御儉約を、種々御仕組をも被仰付候へ共、其時ニ難被聞御物入出来、所詮御立直之期無之中、去ル辰年ニ至御借銀既に八万貫目ニ被為及、寔ニ御大事至極之儀、御上殿様深く被遊御辛勞、先御仕組立被仰付候畢竟御家来中并地下向より打続重目之御馳走被為請下困窮之程至て御心外ニ被思召上、是非とも御借財

可被相減御手段ニ而古来無之、江戸御地歩行之御備御省略、御表を始、上々様方御仕渡銀五割引に被仰付程之御事ニ候処、元来當之御借銀故、利殖計も不容易上、其後も難被聞御臨時用或ハ天災ニ付、御所務落等ニ而無拋、最前之御積通ニは参兼候中、不凶も去年已来被打続候御大變兩度、御家督を始吉凶廉有御物入、大段之上、年柄ニ連御入増も不少、剩去夏古来稀之天災ニ付御所務方も半減を越、兩条一同被相嵩候事故、前断之通節格被尺御深慮候、御建直之道被相崩候而已ならず、却而太莊之御借銀増ニ至り、其他一同見聞之前ニ付不能具事ニて、誠に御國家御安危之境、御氣遣至極之御事候所、先般御家督御首尾能被仰出、無程御元服も被為濟、御安悦之御事、下以難有次第ニ候、乍恐未御年若様と申御内外御繁雜之砌、恐多候へとも、前断之次第ハ猶予難相成儀故、不得止委細ニ参懸及御聞候所、至而御苦勞被思召上、往々之儀迄深く被遊御按思、是迄全無御

疎事ニ候へ共、先御仕組年限相満候上之儀、自然相弛候筋共出来候而は甚不相濟儀と、早速より夫々嚴重ニ沙汰被仰付、第一公刃向先御届之年限有之儀ニ付、去年已来之御差湊逐一御届相成、是迄之通御候約立且公儀御役人方江之御贈物も、年限中被為減度段御同相成候処、無御余儀筋ニ御見聞有之候哉、思召通御聞濟相成候、右は前々稀之御事、殊に御代初旁先は不被相好儀、於于下も御奉恐入候次第ニハ候へ共、御大事ニは難被替、乍御氣毒被仰立候御事ニ付、御内輪ニ於御儉約至り而ハ尚更一際立候程ニ無之而は、外向江之御義理合も難被相立事故、節格精々詮議被仰付事ニ候、併上々様方江は年久敷御不自由被遊御堪忍候御事故、一先成共御配当被増進度、次ニは御家来中多年重目之奉懸、御馳走も別て去年之天災旁取続之程深く御氣遣被思召上候故、是亦僅ニ而も御有免被仰付度旨、越中被召登重疊被仰出、御仁恵之御事難有次第候、然とも辰年御借銀高ニ而

も古来無之御難渋ニ候処、前断之通御新借被相増、当春夏御臨時用之儀も未夫々御払之仕向不行届事ニ付、前後繰合等迄種々及吟味候而も其手段無之、加之行形之外色々立出候而も未往年之目途難行付、又候来ル御仕組も年限満候上其詮無之而は、甚以不相濟事ニ候処、暮誥ニ差向難及巨細之詮議候故、無是非御越年之繰卷而已ニ而罷下候程之次第故、千万乍御心外、先当年之処は上々様方御拜当御行形ニ被仰付、右ニ準し御家来中半地之出来可被仰付旨候条、於于下も右御差聞之次第篤と令考弁可被懸御馳走候往年御仕組立之義は追て可被仰出候得共、前之次第故急ニ御甘可令出来儀とハ難相見候条、弥以儉素を第一とし、一分々々之覚悟を以此期を凌、御奉公之心懸可為肝要候事、

付、御馳走段分行形之通ニ候、將亦去夏之天災ニ付至暮向増白紙切手貸渡之分、勿論当務を以返納被仰付候、然共彼是之問可有之儀ニ付、先当暮は

去年之通尚亦可被懸御了簡候、此往常例ニハ不仰
付候事、

西十月 当役中 連名

一十月廿八日、蒙増上寺防火之命、

一十一月家来中江惠銀遣し候如左大機巻銀
之当リ也

従来御家来中困窮之処御所帶至而御難渋ニ付数年重
き出米被仰付、既ニ当年御仕組年限明ニ候処、去秋
已来兩度之御代替御一件、其外彼是ニ付不時之御造
佐入相嵩、御新借相増、弥以御難渋ニ付而は、乍御
心外引続き出米被仰付、御家来中も益可令難渋、何
とも御救惠之沙汰被仰付度厚僉議被仰付候処、尽手
段ニ全具出目無之事ニ候得とも、深き御仁惠難黙止
被思召、御不自由を被遊御堪忍、御手元御当用被引
闕御家来中御仁惠可被成段被仰出、誠以厚御憐愍難
有御事ニ候、於于下も能々令勘弁、弥尽儉約於遂御
奉公者可為御祝着と之御事、

一十二月九日、賜御鷹之雁

一同月廿八日 禁裡江歳暮御祝儀として御太刀一腰・白
銀百兩、勸修寺家執 奏を以献上仕候処 勅答女房之
御奉書を賜フ、

仰

なかとの侍従より御せいほの御札として御太刀・白
かね百兩しん上候、ひろう申て候へはおもしろく思
しめし候よし、よく心得候て候へく候、御心元ニつ
たへられ候へく候、かしく、

くわんしゆ寺とのへ

但当家、古来より年始・歳暮・御祝儀、勸修寺家執
奏ニ而献上仕来、毎年如此、

天保九年戊戌正月廿六日 禁裡江年始御祝儀として御太
刀一腰・白銀百兩献上仕候処、女房之御奉書を以 勅答
被仰出、毎年如此、

仰

なかとの侍従より、ことしの御札として、御太刀・

白かね百両しん上候、ひろう申て候へは、おもしろく思しめし候よし、よく心得候て候へく候、御心元ニつたへられ候へく候、かしく、

くわんしゆ寺とのへ

一二月六日、周防長門之内去夏水損等にて、損毛高十万八千六百四十九石九斗八升九合六勺、内老万九百八拾八石八斗三升三合永荒、但田島也、其外井手・土手其外損所数多有之、今日幕府江届之、

一同月晦日、手廻頭・記録所役・奥番頭并用所中江左之通直に申渡之、

去暮国方家来中迄も至て之難渋之段、連々聞届深く案しらるゝ事候付而は、所存筋も有之、当初入国に而も備其外飾り候事ニは不及、質素簡略第一之儀、常々辻も同様と得令勘弁、万端為能我等心事通し候様取扱肝要之事候、委細は頼母より可申承候、

頼母より申聞左之通、

御所帯御難渋御家来中も困窮之段、御氣之毒被思召

候得とも、從來之義ニ而唯今御手詰之御時節、不被任御所存御儉約御取締筋之儀は、追々其沙汰被仰付候処、去暮別而御手詰御家来中も寔ニ相迫り、八組頭中手詰之申込有之、差懸り大繰巻等被差出、越年且々相成候由ニ候得共、至当春ニ而も難渋之申込は追々有之候趣、連々被聞召上、深く御案し被遊、御代々様御仕来り通者御請遣被遊候御事ニハ候得共、御所帯之義是迄無之御逼迫之事ニ付、御平常之儀は是迄重き御仕組中よりも御引替可被遊、追々其御案思可被為在、差向御初入国ニ付而は御備立御代々様御仕来之通可被仰付之処、重き御仕組中ニ付御減少被成、凡過ル天保七申年御下向之御備振御見渡ニ而一応其御沙汰被仰付候処、前条之通御国方之様子被聞召上、誠御心勞被遊、其上も猶又減少可被仰付、御供中之儀も御初入国之節は張備被仰付、御平年にても過る申年ニハ少々増備等被仰付候へ共、此度は御平年之通被仰付、全張備其外飾り候事ニ不及、御

初入国は格別之儀、御外見も有之事ニ候得とも、於
于下は相願候段尤ニ被思召候得とも夫ニは不被為拘
御省略ハ兼而公辺江御届も相成居候儀ニ付不苦儀と
被思召、右之通被仰付候、何分御取締行届、一統儉約
質朴之風俗押移候而ハ御立直し之期ニも至り申間敷
大切之御時節ニ被思召、御手近き処より肝要取締不
申候ハ而は不押移との御事ニ而、御手廻頭・記録所
役・奥番頭被召出、思召筋通し候様取扱示方肝要之
旨、御直ニ被仰聞、御用所中江も別紙之通被仰聞候、
尤被仰聞方之儀は前々之趣も有之事候処、御取締筋
は追々沙汰被仰付候儀、此度之儀は御内思召之旨御
直ニ被仰聞候ハ、御深慮筋夫々江相通し、思召ニ
相叶候様御為能取扱候ハ、風俗取締可申との思召
ニ被為在候ニ付、此段能々申聞候様ニとの御事、
一三月九日、諸役人江頼母より左之通申聞、
質素儉約・風俗取締之儀は、委細先達而御沙汰被仰
付候通面々承知之事候、然処此内思召筋御直ニ被仰

聞候旨、誠ニ難有奉忍入候儀ニ候、就而は猶以取締
仮初茂耳立候儀有之候而は思召ニ不相叶、御威光も
不相立事候、何致御案思被遊候御様子ニ被相窺候、
何れも心得筋疎ハ有之間敷候得とも、思召筋猶又能
々通し候様可被致心配候、固屋々々ニ而寄相酒事等
有之候而は御旨意ニ不相叶、外出等之儀も大概之儀
は差くり有之、多分無之様夫々江相通し可被置候、
一四月朔日、可娶毛利内藏親安女都美子内約濟、実齊広女
親安美女
之唱
なり、

一 同月五日、可娶都美子之旨願差出ス、

一 同月十五日、以上使老中大田備中守 大御所様より松平伯
善守、右大将家より堀田備中守ナリ、始

賜帰国之暇、同月廿一日御礼登城、謁幕府賜御刀豊後
國美

行代金
拾五枚且御馬、同月廿三日発江戸、閏四月廿六日初入

萩城、御礼使者毛利大隅江申付即日発萩往于江戸
六月朔日御礼登城、

一 閏四月朔、有甲州川之御普請御手伝之命、同月廿三日

達于旅中三田尻金納

一 五月十四日、可娶都美子旨如願有許命名代毛利甲斐守登城
老中水野越前守伝命

同月廿六日巡見上使諏訪縫殿助・石川大膳自石州入国
出雲泊り、同廿八日著于萩城下、同廿九日発萩長防両
国巡見、六月十四日移于芸州、

一同月廿八日、流行病有之、國中江左之通及沙汰同日満願寺三代参
梨羽頼母江申付 流行病有之由被聞召上、御氣遣被思召候、依

之御国中下々に至迄為病難除於満願寺、過ル廿五日より
昨廿七日迄御祈禱被仰付、御札・守護符御家来中末
々より御国中下々迄無残所被下置候、誠以厚御思召之
旨難有御事候、依之支配々々江御札・守護符配分被仰
付候間頂戴致候様被仰付候事、

江戸・京・大坂江左之通被差進候事、

一御札・守護符并御付々江被下候護符・洗米共

蓮容院様・法鏡院様(鳥津齊興母)・六間堀若御前様・八重姫様

安喜姫様

一江戸詰居之御家来中末々迄被下候護符・洗米共、

右一箱入

一御三屋敷・葛飾鶴歩御屋敷共御門木札、

右一箱入

一京都御屋敷御門木札并詰居之面々下々迄被下候護符

洗米

右一箱入

一大坂御屋敷同斷

右一箱入

一六月廿四日、天守要害ニ登ル、

一八月三日、能島流軍法・片山流抜方神妙劍、北川弁藏

より伝授ス、

一九月廿八日、所帶難渋之趣ニ付諸役人江諸事不泥仕来

流弊改正之詮議申付左之通、

従来御所帶御難渋、年々不時御物入強、過ル辰年に至

り御借銀八万貫目余ニ及び候付、重き御仕組被仰付、

上々様方御配当半方減少被仰付候処、立直り之期ニ不

至内申年以來洪水・飢引続、御上殿様御凶変、兩度

之御家督彼是御大札之御用度ニ付、弥御逼迫之儀は去

年も被仰聞候通、殊更公儀御代替・御手伝・巡見使等

廉々大造之御物入相嵩、御新借莫太ニ相成、兼而之御借財引結候而は、当年ニ至り地他御借銀九万弍千貫目余ニ及び、古来無之御大借、当季之御取続も手段ニ尽国家御安危之期ニ相迫り候趣被聞召上、誠以御当惑至極之御事候、依之種々詮議被仰付候処、ケ程之御大借と成候而は最早尋常之御仕組建ニ而は御納細メ之目途不相立、猶又御家中末々百姓ニ至迄、多年困窮之段入ニ被聞召上、甚以御心外之至、御寢食も不被安被思召候、何卒追年御馳走御有免之沙汰をも被仰付度候処格外之御吟味ならてハ難被行届、深く被遊御案思、いか程之御艱難をも可被遊御堪忍ニ付、諸事不泥仕来流弊御改正之詮議を以迄之御定用三ヶ一若くハ四ヶ一減少、臨時御入用之廉は先例凡平方之当りを以出、役座々々に兼て遂詮議置候様被仰付候、尤差問之筋於有之ハ可被申出候、此度之御仕組筋立之不立とハ、手前々々にて之沙汰筋ハ勿論、付屬之役人以下之取扱ニ有之事候条、申合令一和上思召之旨を奉し、私を捨公を専

ニして心遣肝要之事候、然る上ハ所勤方堅固なるに於てハ御賞義之可被及御沙汰若又不心得之筋於有之、其沙汰可被仰付候、此旨能々相心得遂所勤候様可申聞旨候事、

一同日所帯必至難渋ニ付、往五ヶ年之間家中江是迄之通半知出米申付る、尤当年ハ種々繰巻を以、高百石ニ付現米弍石之返石申付ル、

累年所帯不勝手、上下令困窮之旨、清徳院様・邦憲院様・崇文院様深く御氣遣被成、過ル辰年重き御仕組被仰付候処、立直り之期ニ不至内、申年以来、洪水・飢、御三殿様御凶変、兩度之御家督彼是之大礼用度ニ付、弥増難渋之儀は去年も申聞する通、殊更公儀御代替・御手伝・巡見使等廉々大造之物入相嵩ミ、新借莫太ニ相成、兼而之借財引結候而は古来無之大借、当季之取続も絶手段申出、国家之大難此時ニ迫り、当惑至極之事ニ候、既於江戸所帯難渋之趣公辺江届置、供立其外事々令省略、尚又身通り之儀

ニ付而は、いか程之艱難をも可令堪忍候付、旧例ニ不泥詮議を以国家取統之手段申付候、家来中も多年重き馳走申付るによつて、必至と困窮之段入ニ聞届甚以気毒之至、寢食も不安、何と被及救患度精々詮議申付といへとも、前条之通所帯危急ニよつて其詮無之、乍心外当年より往五ヶ年之間是迄之通重き馳走申付候、併家中之難波難捨置、よつて手元之用向引欠、其外種々之手段を以、纔ながら当務をハ馳走有免之沙汰申付候条、此旨意能々可令勘弁候、此余か程差問之趣申出といへとも、全了簡之筋無之、一方々々之心得を以質素儉約を尽し、此期を凌ぎ、譜代之筋目不令忘却奉公之覚悟肝要たるへし、委細年寄共より可申聞候事添書付略之、

一十一月十四日、依御手伝濟賜時服、

一十二月廿三日月付ニ、周防・長門之内、当夏風雨水損

等ニ而高拾五万千三百八石卷合五勺損毛、内式千八百

三拾四石六斗八升永荒、但田島也、手土手、石垣、川

溝、其外損流失并崩家、半崩其外之儀、老中水野越前守江相届翌亥二月三日相届候、

天保十年己亥二月廿七日、以宿繼之奉書、始賜御鷹之鶴三月十三日於萩頂戴之、

一三月六日、於江城賜防長兩國御判物、依為在名代毛利甲斐守元義登城、頂戴之、四月九日於國元拜受之、

一六月、当七月中参府之御差図、先返而有之といへとも因病発駕延引之儀老中江達之、

一八月五日、発萩城、九月六日、江戸著、

一九月十三日上使老中松平和泉守来儀、

一同月十五日、初参勤御礼登城、家老毛利隠岐、御目見献上物略之、

一十月五日、因脚痛来春帰国湯療を願出、同日許命、

一同月十日、諸役人江左之通申聞す、

来年御帰国早御暇之儀、今度公辺江御願出相成候処来早春之内御暇可被仰出との御事ニ候、当年は御参勤三ヶ月之御有免も有之、猶又御機嫌相旁ニ而段々

と御遅登ニ相成候得は、此節早御暇之儀御願出は被
 為成苦敷、年来御所帯御難渋之上、去ル申年之洪水
 兩年之内御三代様御逝去、兩度之御家督引続有廉御
 吉凶、違作等も有之、御所帯之御差詰、御国中之困
 窮必至之御時節ニ付、一日も早く御帰国被為在、諸
 事御直ニ御駆引被遊、御仕組之目途被相立度との思
 召ニて、御心外を被差押、右御難渋之趣逐一被仰立
 候、然処御遅登之上、御早下り之儀は、諸家様御類
 例も無之候事ニ付、容易ニ御聞濟可相成儀ニ而は無
 之候得共、前断御難渋之次第入と被仰解候ニ付、公
 辺ニ而も篤と被聞召分尖ニ被懸御許容候、然は御家
 来中末々迄も御主意筋篤と勘弁仕、其身々々江立か
 へり、益々節儉を尽し、御國中潤沢ニ相成御仕組之
 目途相立候ハ、第一思召ニ相叶、公辺之御都合も
 宜、恐なから殿様御安心之期ニ可被為在候事ニ付、
 別而肝要之御時節諸事心を用ひ可被遂御奉公候事、
 一十二月廿八日、周防・長門之内、当秋早魃・虫付ニ而

損毛高八万千百九拾七石五斗壹升五勺有之段、老中脇
 坂中務大輔江届出ル、

冊子原寸 縦二四・三糎 横一七糎 六九枚

○十五 齊興公ヨリ家老へノ諭書及家老ノ副書布
 達 二通
 財政困難ニ付非常節儉ノ件

○十六 大慈院薨去ニ付近衛忠熙公郁姫君ノ悼歌

○十七 重豪公以来ノ財政整理ト調所笑左衛門ノ
 功績 五冊

十八 二宮金次郎ノ利根川分水路堀割工事見込
 書

(表紙) 天保十三壬寅年

利根川分水路堀割御普請見込之趣申上候書付

御普請役格
二宮金次郎
十一月

利根川分水路堀割御普請見込之趣

御尋ニ付申上候書付、

今般格別之以

御仁恵、関東第一之大流字利根川、其異名坂東太郎、大雨洪水之砌、田畑諸作致流亡、民家浮沈之危難為御救、分水路見分目論見 御用被 仰付、下総国印旛沼平水落し安食村地元より、水面横幅広狭不同長サ曲直凡七里余、夫より分水路堀割御普請所之儀は、沿岸島田村字平戸橋より逆流、沼川筋柏井村地先高台ニ至るハ、深六丈三尺余、夫より並島村沼田通検見川地先南海のみきわニ至迄、凡長四里半余之間、或は高台自然山、或ハ岩土真土、或ハ谷間水溜り、或ハ古川筋粘泥又は水田沼田、開闢以来相統之地、水脈土脈一時ニ堀切候段、不容易大業、御趣意ニ基き、頻ニ進ミ、勤勞ヲ尽し、御為筋ハ勿論、致出来安く手輕ニ見込申立候

共、信用難仕、猶又恐れ慎ミ、故障差支而已掛念仕、難致出来手重ニ見込申立候共、是又信用難仕、其虚実譬は鳥の玉子ニひとし、正ニ雌雄有といへとも、何分難相分、一化して後雌雄頭ハるゝか如く、其実用ハ日往き月来り、事成ニ及てあらわる、況此度之大望全成就、不成就之儀は見留無御座、恐懼歎息而已、実ニ奉恐入候、若又不得止事、此度流亡浮沈之憂御救被下置候儀ニ御座候ハ、金銀多少増減を不計、年月之長短を不限、忠士賢者ニ御任、永世之御為第一ニ被仰付候ハ、急度水配牧民之 御趣意成就仕、野常総奥羽ニ至迄、船道開ケ財用之融通宜敷、都鄙之繁栄本朝之大幸万代不朽莫太之

御仁恵与奉仰可申候、右は今般格別之以 御趣意、利根川筋水災為御救、分水路見分目論見 御用被 仰付見込之趣委敷御尋ニ付、及見聞候次第有体書取、不奉顧恐此段奉申上候、

御普請役格

天保十三壬寅年十一月 二宮金次郎

三才報徳金貸付雛形

一文政四辛巳年十二月

一金百三拾九兩永九百九拾九文九分六厘

御趣法御土台金

(付箋) 一此御趣法金之傍ニ書加候年号之義ハ、今年より先凡貳拾ヶ

年中勘組立候而は、余り空論ニ相成候ニ付、過去候文政四辛巳

年ニ立戻、為目印仮ニ書入置申候事」

内

金六兩永六百六拾六文六分六厘

是は来午正月より同十二月迄、荒地開墾入百姓夫

食種穀窮民撫育料引

(付箋) 一此無利足金貸付趣法を以、極難之貧苦を相余荷年々書廢り

ニ相成候利足之分、元金ニ振替遣候ハ、無借ニ罷成、為冥

加相納候報徳金を以、七ヶ年目来ル酉年より掘立可申積ニ候

得共、空敷六ヶ年相休居候も如何ニ付、元金三拾九兩余書廢

之積を以、中勘組立申候事」

(付箋) 一此壹ヶ年金六兩永六百六拾六文六分六厘ニ相定候義ハ、元

金百兩無利五ヶ年賦二年々繰返貸付、壹ヶ年金三拾三兩永三

百三拾三文三分宛ニ相成、此年賦返納金壹ヶ年分ニ当ル報徳

冥加金を以、中勘組立申候事」

殘金百三拾三兩永三百三拾三文三分

此貸付

已十二月 金百兩

伊右衛門

(付箋) 一此拜借人名前之義ハ、本人有之義ニハ無御座、年賦貸付取

立書入相分り兼候ニ付、いろは付を以為目印書加へ申候事」

此年賦濟方

午金貳拾兩

未金貳拾兩

申金貳拾兩

酉金貳拾兩

戌金貳拾兩

ノ

殘金三拾三兩永三百三拾三文三分

右は来午正月より同十二月迄荒地開墾用惣水普請入百姓
夫食種穀・農具代御知行所村々窮迫為、

御取直御趣法御入用ニ相成候分

報徳冥加金百貳兩永貳百四文六分三厘

是は文政十丁亥年より今天保十一庚子年迄拾四ヶ

年之間、右同断之事、

(付箋)

「如此年数ニ至は、多分成就可仕候得共、凡元金百三拾九兩

永九百九拾九文九分六厘高ニ相当り候ニ付、中勘組立之義ハ、

先貳拾ヶ年ニ相限り申候、万々一御普請成就不仕候ハ、右

趣法を以六兩永六百六拾六文六分六厘宛永代御掘立被下置候

ハ、今般被仰出候、水配牧民之御趣意急度成就可仕候事」

メ金百四拾貳兩永貳百四文五分九厘

残金百兩

此記

丑金六兩永六百七拾文九分四厘 為右衛門

金六兩永六百四拾貳文壹分 礼右衛門

金六兩永六百六拾六文六分七厘 曾右衛門

金六兩永六百七拾三文五分壹厘 常右衛門

金六兩永六百七拾文壹分八厘 根之右衛門

メ金三拾三兩永三百貳拾三文四分

寅金六兩永六百四拾貳文壹分 礼右衛門

金六兩永六百六拾六文六分七厘 曾右衛門

金六兩永六百七拾三文五分壹厘 常右衛門

金六兩永六百七拾文壹分八厘 根之右衛門

メ金貳拾六兩永六百五拾貳文四分六厘

右は今般格別之以

御仁恵、関東第一之大流字利根川、其異名坂東太郎、大

雨洪水之砌、田畑諸作致流亡、民家浮沈之難渋為御救、

分水路目論見 御用被 仰付、罷越見分仕候得共、不容

易儀ニ付、前条奉申上候通、何分旋と見留無御座奉恐入

候、夫共是非此度流亡危難之愁御救被下置候儀ニ御座候

ハ、乍恐天之時ニより地之利ニ就候儀は不及申上、人

之和を不得してハ成就難仕候、人之和を得るに道有、或は不慮之天災大雨洪水杯ニ而堤押切、俄ニ水たゝへ、諸民致流亡難渋仕居候節は、不顧前後一時ニ築立候共、其水下村々相助り候恩沢ニ復し、自他之民人一同奉承服候儀は申迄茂無御座候得共、今般目論見

御用被 仰付候堀割御普請所之儀ハ、水災村々とは何れ十有余里、又は二十有余里茂相隔居候処、右御場所之儀ハ畑勝御田地不足ニ而、漸少々持添罷在候処、新堀代土置場等ニ眼前罷成候而已を憂ひ、後世之大幸は今爰ニ難相願候間、先ツ財宝を以貧苦艱難を余荷ひ、人之和を得候外有御座間鋪、財宝を施し人之和を得るに損益多少あり、若シ爰ニ米種一粒有時、其俣施せは一粒文ケ之国用者ケ年延し其一粒を蒔、天地之恵をかうむらハ、大凡百粒余之実法を得、九拾九粒施して残る一粒を蒔けは、財用米種年々歳々尽る事なし、其米を施に道有、下賤の人情ニあたられハ難得、下賤の人情を得るに道あり、内ニ誠ならずんハ難得候間、願くハ水路ニ不相拘、極難之

貧苦前条雛形之通、御普請金之内無利五ヶ年賦ニ貸付、利足之分元金ニ振替、貧者ヲ御救被下置候ハ、貸たるものハ案外正金受取之益富栄国家融通宜敷罷成可申、又借たるものハ前々相高居り候借財致返納無借ニ罷成、暮方立直り窮迫之憂ひを免れ、安堵之地ヲ得、無難ニ相統仕居候、為冥加相納候報徳善種金を以、風雨寒暑之運動ニ随ひ、万端人足共之為ニ相成候様、厚ク取腦遣し、今般御試同様堀立申候ハ、湧水垂水、泥沼粘泥、或ハ赤土真土、或ハ岩土灰土、或ハ荒砂小砂等土性正ニ相願、堀割川筋形付差支無御座候時は、一同 御趣意を奉感服、弥相進ミ可申候間、任其勢力堀立申候ハ、早速御普請成就仕可申候、若又耽と見留無御座候節ハ、前条之通凡二十ヶ年茂取行候ハ、金百四拾貳兩余新堀御普請出来、其外前後左右大家小家ニ至迄暮方立直り、先納用金等之憂ひを免れ、郡村一同安堵仕、元金百兩之儀ハ日月之草木国土を照し、万物を生育し、国家ヲ潤沢し給ふ如く、永久万代窮民撫育并御修復之御手宛相備り、其上今般被

仰出候水配牧民之 御趣意急度成就仕、野常総奥羽ニ至
まで船道相開ケ、財用融通宜敷、都鄙之繁栄 本朝之大
幸、万代不朽莫太之 御仁恵と奉仰可申候、右は今般格
別之以 御趣意、利根川筋分水路目論見 御用被 仰付、
見込之趣委敷可奉申上旨御尋ニ付、不奉願恐中勘組立、
此段奉申上候、

天保十三壬寅年十一月 御普請役格
二宮金次郎

一私儀去七月九日御代官篠田藤四郎殿利根川筋水災為御
救、分水路堀割御普請之儀ニ付、御相談被成度御儀有
之、総州御陳屋許江罷出候様 水野越前守殿より御達
し有之趣、大久保加賀守殿(忠懸)より野州桜町迄御沙汰ニ付
相待居候処、猶又 水野越前守殿より早速可致出府旨
被 仰付、御当地江罷出相窺候処、御用向相濟候迄逗
留罷在候様被 仰付、同十月三日不奉存寄、御切米式
拾俵御扶持式人分被下置、御召抱被 仰付、重畳冥加

至極難有仕合奉存候、然ル処、同月十七日利根川分水
路見分目論見 御用被 仰付罷越候得共、不容易儀ニ
付何分見留無御座、恐懼歎息仕居候而已、無余儀前条
之通中勘組立見候得共、全正業執行候儀ニ茂無御座候
ニ付、空論同様、猶以奉恐入候、第一去ル天明度御普
請之節、大凶荒饑饉と罷成、人氣相衰へ、其上大雨洪
水ニ而、左右より欠崩、粘泥杭木共元の如く押寄、堀
筋、埋之平地同様罷成、幾千万之財宝空鋪相成候趣申伝
候由、天変とハ乍申、全人力不行届、 御仁徳を失ひ
候儀ニ相当り、奉恐入候間、此度之儀は、是非耽と御
見留相定候迄幾度茂相試、手違無御座様仕度奉存候ニ
付、何卒兩三年茂為御試御任被下置候へ、私儀凡二
拾有余年以前、文政度之始、故大久保加賀守殿在勤中
宇津帆之助殿知行所荒地開発入百姓人別増、窮民撫育
借財返済、暮方取直し、村柄旧復之趣法被申付、命令
ニ随ひ精々執行候処、時成哉、人氣相進ミ、田畑起返
り、亡所変して米麦生し、終ニ自然と内外致潤沢候段

及見聞、近村又は隣國諸家之領邑極難之荒地起返し方
旧復之趣法押而被及頼談候ニ付、再応相断申候得共、
一向依頼ニ付、無是非致御世話、種々工風勘考仕見候
へ共、別ニ手段茂無御座、右趣法御頼被 仰入候迎、
御他方之御借財引請、相断候儀茂難相成、其外他領他
村より猥ニ御收納取立候儀茂弥以難相成、猶又御領内
逆茂無訳荒地之中より收納取立候手段茂無御座、術計
尽果、無是非当方趣法金之内無利足ニ而用達候外無御
座候、其無利足金ニ一同致感服、或ハ利下ケ又は無利
足等多分出来、其外荒地起返し、数年廢地ニ罷成居候亡
所より湧出候、冥加米永不苦儀ニ御座候へ、今般不殘
取纏ひ、早川之節は印旛沼口より堀立、汐早之節ハ海
口より堀立、雨天洪水之節は高台辺より風雨寒暑ニ隨
ひ、人足共之万端差支無之様取計、詰り其身ノ爲
ニ相成候様、厚く取腦遣し堀立申候へ、自然と湧水
垂水、或は泥沼粘沼、或は堅岩真土、又は荒砂小砂等
土性相顯れ、差支無御座時は人氣弥相進ミ可申候ニ付

任其精力猶又前条申上候通、趣法以前平均土台外、諸
家口々凡合米四五千俵余も可有御座候、尤荒地掃発場
之儀ニ付、格別豊凶不同増減ハ可有御座候得共、全亡
所變して生し候米金之儀ニ付、弥成就不成就之御見留
聴と相定候迄、年々堀立手違無之様仕度奉存候、譬ハ
貴人高位之御方被為在、旅行候節、露払ひ又は飲食差
上候節茂御毒見仕候通、幾度茂試手違無之様仕度奉存
候、右は今般格別之以

御仁恵、万民為御救利根川筋分水路目論見見分 御用
被 仰付候冥加のため、不願恐中勘組立奉申上候間、
聴と御見留相定次第、今般御積立御入用金御下ケ被下
置候へ、一時ニ御普請成就仕可申候事、

一今般印旛沼分水路目論見 御用被 仰付、本文奉申上
候通、凡長四里半余、堀底横幅拾間、新堀御普請出来
仕候へ、昼夜時々刻々水吐宜鋪罷成、利根川筋水災
之憂ひを相免れ、一同重々冥加至極難有仕合奉存候筈
之儀は申迄茂無御座候得共、後世ニ至大雨洪水之節は

此度分水被成下置相助り候儀は、昔物語之様相成、目前之難渋艱難を申立候様相成申間敷哉茂難計、掛念仕候間、唯今分水計駈と相定置申度候ニ付、夫ニ付而は今般新堀幅拾間ニ出来上り候ハ、其堀幅通り安食村逆流、利根川落口様横幅拾間ニ相定置申度候得共、是迄在来之古川筋之儀は地窪ニ付、防方相保申間敷候間、同村山根通片川除之積、横幅拾間ニ堀替、水入口分水計相定置申度候、是迄ハ縦令水万石入候ヘハ、万石漂居候処、新堀御普請出来仕候上は、万石入万石吐出申候ニ付、此度分水計を定置、後世異論無之様仕候方両全之儀と奉存候事、

一印旛沼分水口字平戸橋より検見川南海落口迄、新堀御普請被成下置候、御入用金茂多分ニ相掛、堀割而已ニ而は矢張是迄之通、大雨洪水之節は利根川より大水押込、沼縁村々之人民水腐流亡之憂ひを難免候ニ付、願くハ其土地所々人民を悦ばしめ、次ニ大金為恩報、印旛沼縁新古之田畑凡高式万石余茂可有御座哉と見積、

水腐流亡之危難相免レ、永久安堵之地を得させ申度候、夫ニ付印旛沼逆水落口堤築立留切、通船荷物之儀は持越、為積替候而茂可然と奉存候、是迄前々安良村辺より関宿迄凡十有余里、利根川積登せ、夫より江戸川江入弁用致来り候廻船荷物之儀ニ付、差支有御座間敷候、乍然天明度御築立御普請之節、利根川東筋村々難渋申立候趣風評及承候ニ付、万一無謂故障坏申触候哉茂難計候間、願くハ東西南北之人民致安堵候様仕度專一ニ奉存候事、

一印旛沼逆水落口前文申上候通留切御普請難相成候ハ、右沼中程西縁山岸何村地先字離れ山と申小山御座候、此離れ山と自然山と之間、今般御堀立被下置候新堀幅丈ケニ堀割分水仕通船為致、猶又離れ山より水面東山岸迄差渡、凡二三百間茂有之哉ニ付、大堤を築立大丈夫ニ留切、右自然山と離れ山と之間、此度御堀立被下置候、新川筋為致通船候ハ、利根川筋水下村々一同相助り、水災御救御趣意は勿論、野常総奥羽辺迄諸

色融通宜敷罷成、其外凡沼地半分通高卷万石余位と見積、田畑民家共水害を免れ得安堵之地、後世新堀切川筋大破之憂ひ有御座間敷哉ニ奉存候事、

一今度分水新堀御普請被成下置候而已ニ而は、大雨洪水之節、印旛沼長凡曲直七里余、其外谷地秣秣新古之田畑江、是迄通卷丈式丈又は三丈茂水漂居、水勢を増、僅新堀幅拾間之所より洪水押出候へハ、水田・沼田或は真土岩土ニ候共、欠崩可申哉茂難計候処、殊ニ粘泥灰土杯ニ而、左右欠崩堀筋広かり、利根川洪水之節、多分落込可申哉、其子細ハ近国辺大洪水と申さハ、多く東南之大風ニ而汐吹上ケ、洪水仕候由申伝候、其節いつれ利根川落口銚子之儀は、東南之大海浪高く、鹿鳴香取辺霞ヶ浦一円ニ込上げ、筑波南方之麓土浦辺迄逆水漂候哉ニ及承申候、又新堀落口検見川之儀は、品川沖入海同様、殊ニ汐入口之儀は房相之自然山ニ取囲ミ居漸差渡、海面三崎浦賀辺狭き所ニ而、僅三里位茂有之哉ニ承、南風之節は兩國之大山ニ而覆ひ、浪低き

ゆへ水吐宜敷、新堀之方江多分ニ流れ落可申哉と掛念仕候事、

一前条之通大雨洪水之砌追々堀幅広かり、大水落込候而ハ詰り塩浜如何成行候もの哉、甚掛念仕候、唯今ニ而茂余国より塩之出来方少シ甘き趣商人共申、売買直段高下有之哉ニ風評仕候、其根元ハ入江同様之塩浜等御座候処、西之方江隅田川并関宿より利根川分水、江戸川落込真水多分ニ流れ込候故之儀と及承候処、猶又東之方江印旛沼より新堀落込候而は、左右より真水落入候而、詰り塩浜如何成行候もの哉、此段ハ海辺之ものに無御座候半而は、睨と難相分候事、

一今般利根川筋分水路目論見 御用被 仰付、難有 御趣意ニ基き、真先ニ相進ミ可申筈之儀は前文奉申上通故、大久保加賀守殿在勤中、宇津帆之助殿知行所人少致困窮、退転亡所同様罷成、無抛荒地開闢入百姓人別増、借財返済暮方取直し、村柄旧復之趣法被申付、数年取扱相試候処、追々立直り候段、近村又は隣国諸家

方より御頼茂有之候得共、私領之儀ニ付、諸国新田開
 発願人等之如く、表立兼居候処、今般利根川分水路印
 旛沼悪水落し堀割御普請被 仰出候ニ付而は、金銀得
 失は不及申上、勤功相願申度段、人々平生相願居候、
 折柄格別之以 御仁恵分水路目論見分 御用被 仰
 付、天成哉時至り候哉と相進ミ、勤功ハ勿論新田畑等
 多分に引請、子々孫々ニ至迄、永久富貴安樂自在之暮
 シを相願候儀は、古より世并之習ハシニ御座候得共、
 不容易御時節、殊ニ御召抱被 仰付候冥加を恐れ、速
 ニ勤功を願し、小利を願ひ求んより、往々手違無之方
 可然と一途ニ存込、不奉願恐愚慮之趣奉申上、乍不及
 御趣意を押し、利根川筋村々水災之憂ひを除き、得安
 堵之地永久百姓相統為仕申度候事、
 右之条々幾度茂繰返し進退吉凶申双候段、余り掛念至極
 奉恐入候得共、全く身分を立越ひ、不容易大業何ぞッ相
 試可申便りを失ひ、無余儀一身ニ立戻り、勘考仕見申候
 処、右之足を進む時ハ先ッ左之足を踏しめ、左之足を進

む時は右之足を踏しめ候へ、仮令千里之遠きニ往とい
 へとも、安穩無事ニ致往返差支無之、準繩天然自然ニ人
 々相備居候へ共、人情ハ進ミ過てあやまち、又退き過て
 片寄過事多し、兎角中道ならぬ身ニ病有、依而進退ハ勿
 論何分先後する所相分兼、無是非左右之あゆみに基き、
 彼を救ハんと欲して是を安し、譬は草をからんと欲して
 鎌をとき、又米を得んと欲する時は兼を作るか如し、一
 度は進て 御趣意ヲ貫き、次ニハ退て水辺山家郡里之無
 差別、水腐流亡より甚敷ハ金銀貸借之融通、今日之暮方ニ
 差詰、致難渋居候貧苦を御救被下置候へ、貧富一同相
 助、内外融通能罷成可申哉と、乍恐是迄正業執行候荒地
 再発、窮民撫育、借財返済暮方取直、旧復之趣法雛形ニ
 基き、無利足金貸付中勘組立、其次ハ眼前幸を見んと欲
 して、後難之愁を探り、幾度茂繰返し奉申上候儀は、今
 般格別之以 御仁恵、諸民為御救分水路目論見分 御
 用被 仰付候為冥加、不奉願恐及見聞候次第、有体書取
 此段奉申上候、

御普請役格
天保十三壬寅年十一月 二宮金次郎

冊子原寸 縦二三・七種 横一六・八種 二二枚

十九 御家流犬追物伝来由緒

(表紙)
「天保十四年卯九月

御家流犬追物御伝来之御由緒并

式法小笠原流とは差別有無当座調書扣

御記録所」

御家流犬追物御伝来之御由緒并式法小笠原流とは
差別可有之哉、委曲取調可申出旨被仰渡、左之通
御座候、

犬追物譜

一凡右大將家の御時ハ、弓箭をむねともてあそひ、もろくくの作物シなく、皆きハめられき、文治五年の冬の比より毎月に日をしてんし、酒をむすひて弓馬の談義を

稽古せらるゝ、江馬小四郎・下河辺庄司・小山左衛門
おなしく五郎・同七郎・武田五郎・小笠原之次郎三郎
三浦介・和田太郎・梶原平三・工藤庄司景光・同小次
郎・曾我太郎・波多野小四郎・諏訪祝子・栗飯原三郎
佐々木の三郎兵衛・藤沢次郎・同三郎・ふところ島平
権守千波之介、此人々必しも一度には候ハねとも、参
会たるにしたかふ人々を書しるす也、

犬追物繩際之次第

(先)「御家公御事」

一権少將殿御ちやうにいハく、工藤・大高・小笠原など
家々の犬の射様、をのくさしをかれましく候、但少
將のことハ方々存知のことく、さるいハれある間、面
々の射様ニハかハる所もあるへき歟、のそミに存候ハ
む者共ハ、大願を興し稽古をなさハ、先繩きハ子細あ
るましき歟、

一古法をハ四流の方々にも尋へし、此射様面白く思ハむ
者ハ、か様に稽古して繩際を射おほえハ、子細あるま
しき也、能々心にかけてふるまへと御ちやうにありけ

るを、おの／＼尤と申上てなげき申者も有、又此旨を
かなふまじきとてさしをきかたき事なれハ、稽古やす
きかたをまなぶ輩もあり、

一うちあくる様に持あけて、犬かしらを射るハ工藤りう
なり、

一矢さき高くかたあけにしてきうに打こみて射るハ大高
りうなり、

一目より少上てさしひきの様に急に引さかひにおちさか
り、見えぬ様に物あひはやく射るハ武田流なり、

一犬ふとくひ出るを、たかくもなくひきくもなく引分て
弓のもとをあらさず射をくハ小笠原りうなり、

其比稽古之人數

左衛門督頼家	千葉小太郎長教	天野兵衛まさい
佐々木四郎高綱	畠山次郎重忠	武田太郎
河越小太郎重房	岩瀬五郎信房	工藤小次郎祐氏
曾我太郎祐信	いたかきの三郎かねのふ	戸井弥太郎遠衡
中条藤次家数	中村小太郎	小笠原次郎長清

和田あさいなの
三郎能秀
梶原三郎兵衛景信
三浦平六兵衛

梶原源太左衛門景季
畠山重泰
藤沢次郎

かすやの藤太有季
さへらの十郎よしむら
北条式部

少輔時家
稻毛三郎
懷島平權守

稽古之人數族此人々にハかきらねとも、をよそしるす
所也、

建久七年丙辰五月五日

(朱)奥書ニ
右日記忠久教善之御犬追物日記之中也、

右大将頼朝之御時之犬追物次第

一建久八年巳丁三月十日御演出有、其日始而御犬可被遊旨
被仰定候処ニ、御手組にはつるゝ人々ハ、ないうより
申もあり、申状を捧而奉行ニ申もありて、いちうを仕
族も多かりき、さる間、人々を召て御内談有ける処ニ
和田左衛門之後ニ申けるハ、若者此手組ニはつれ參ら
せてなげき申候之条、不便之次第ニ候畢、先他仁ハ知
候ハす、相したしく候者之中ニも五六人もおほえ候け
りと申ける間、人々一同にかんじ申されけるハ、御手

組なをされ候ニ及はず、人々之なけきをもやすめられ
七日の御演出にて、射手ハ一日づゝめされ候ハ、能候
へき由申さるゝによりて、七日之御犬にさだまりぬ、

一 奉行人之事

和田左衛門尉

射手奉行

島山

らうぜき奉行

梶原

御さ敷并敷皮之次第

一 少将殿之御具足之事

一直垂うすきかう色

一大口はせいかう

一行騰は夏毛

一 引目かうの羽は切生

一 御たらしは長藤

一 御こ手はねりぬきニ鳩をぬい物

一 御手袋はあひしらい地ふせくミ、あひしら地ハあひ皮

ニ 白きもん也、

一 不地はくま柳ニ藤をまく

一 御沓ハ其比もゝぬきと申沓にて候けるを、其日初て犬
ハ沓に召ばしむ

一 御鞍はばしの木もく有

一 御尻かひはれんしやくれんしやくは
こねなし也

一 御馬は黒月毛、奉行に工藤三郎祐時

一 御矢取之事

一人ハ木原三郎

一人ハ三橋五郎

一人ハ岩瀬鶴王丸

各々袖を返してくゝりをゆう、

一 御かいしやくの人衆

小山左衛門

島津判官

武田太郎

懐島平権守

土井次郎

金窪兵衛尉

一 御はりがへ引目

和田真兵衛尉

一 御敷皮

堀藤次

一御手組之事

上手

権ノ少将殿

武田五郎

島山六郎

浅稻ノ三郎

千葉小太郎

工藤小次郎

川越小太郎

曾我太郎

次ノ手

北条式部少輔

小山五郎

梶原源太左衛門

藤沢次郎

土井弥太郎

稲毛三郎

三浦平六兵衛

左々木四郎

一検見

小笠原次郎

一喚次

梶原三郎兵衛

一引付之役人

天野兵衛

一ぬたふり役仁

諸岡兵衛

一犬奉行

土屋ノ三郎

忠時公御家譜

一承久四年壬午二月六日、於三南庭二有ニ犬追物一、若君頼

經御入興、此事讀岐羽林義時増也、殊庶幾、^{増也}被ニ申行ニ犬數

廿疋、駿河前司義村加ニ検見、島津三郎兵衛尉忠義二十歳

申ニ次之、射手小山新左衛門尉朝長・氏家太郎・駿河

二郎泰村・横溝六郎、

犬追物譜

一貞永元年三月上旬の比、前武藏守泰時御評定之次ニ被

仰けるハ、代をハ文武二道をもておさむへき処ニ、当

時の若き人々ハ一向犬追物はかりを業として、且文道

にハたつさわらす候、如此してハ末代のせいたうあや

まりあるへく候、とおほせらるゝ処ニ、信濃民部入道

行然申けるハ、愚意にて此事をこそ存候へ、其謂をい

かにと申候に、あやうさをおさむる事たもつミなもと

ハ、武芸にすぎたるハなし、仁義をしる事ハ文道にう

とくしてハかなふへからず、縦車の二のわのことく、

人の二のまなこににたり、一もかけてはあるへからず

と見えて候へは、いづれも浅深ハ候ハねとも、文を左にし、武をは右にすと申て候之間、先文道をさきとして、武芸を次ニこそしたく候へ、然は相構々まなひえぬまでも、文道ともにたつすへきにて候、中略あなからニ犬追物ハかりをこのミ給ハん事、上古ニもそむき、礼拜にもちかひやし候ハんと申ければ、天野左衛門尉倫重申ける様、此せつしかるへしと存候、中略神の代より征伐を事とし、国家をしつめ給ふに、弓箭の伎芸にたつせすしては怨敵を防是たよりなし、弓箭にたつすハかりことをめくらし候ニ、犬追物ニすぎたるみち惣而あるへからす候、中略尤是治理世業の権機也鎮護国家の秘術也、しかのミならず礼楽書数射御の六芸をもて、国朝の概要とするに、犬追物一事ニおいて六芸をかねたり、故いかにとなれハ、御と云は馬乗也弓をとりなをして敬屈するハ礼也、せうふの検見は書也、矢かすを思ふハ数なり、引目のこゑ、つるのひゝきは宮商角徵羽の五音にあたる、然る間先武芸の稽古

たる犬追物をむねとして、文をもかくすへしと存候と申ニつけて、各一同にして五十一条の式目を定畢、

信濃民部入道行然

天野左衛門尉倫重

隠岐守康俊

隠岐守入道行西

出羽守家長

駿河守義村

前武蔵守泰時

(朱)奥書
右件之日記奥蔵之秘事、聊他見不可有候、家々之重宝譜也、

寛正四年小春二日

永正十二年正月十一日 島津十郎左衛門入道道安判

右鎌倉流犬追物之一巻雖為秘本、依御懇望書写之進畢

向後不可有他見者也、

元和七年辛丑八月時正日

川上十郎左衛門久慶

(朱)島津
下野守殿

参

川上十郎左衛門家文書

一曩祖島津判官忠久下_ニ向于当国以来、我家弓馬之芸於_ニ日域_一無其隱者也、繇_レ茲_ニ代々損讓之相伝綿々連々、而無不賞、然者彼流或号_ニ鎌倉流_一、或号_ニ島津流_一云給以_ニ無二之名_一也、併代々之府君專_ニ彼犬追物奥淵_一給_レ、就_レ中_ニ三之秘事_一、三之言事并逃犬之沙汰、踏越之矢、三組之矢也、次妻妾從之矢、三身相應之矢、父攘羊子以顯之矢、犬之哺矢、込深鼎矢、芝込之矢、彼十五ヶ条当家相伝之秘密也、相構々不可_レ疎放有一事第一也、併此外之矢沙汰不_レ違_レ枚_ニ拳_一スルニ、若真実志之仁者可_レ守_ニ重々之起請文_一而可_レ相伝_ス者也、仍状意如件、

寛正六年三月五日

忠国御判

島津十郎左衛門殿

御支族系図川上氏譜

一義久初久勝、犬満丸、又十郎、十郎左衛門尉入道道安俗_ニ謂_ニ島津小僧_一、五代上野守兼久五男也、文明年中小笠原備前守執_ニ行三日犬追物於京都_一、久勝上洛見_ニ物

之_一、備前守灰間_ヲ久勝_カ在洛_一、上_ニ達_ス島津小僧_カ上洛_一、

於將軍義尚公_ニ、則匪_ニ畜微_ニ公座之右_一、有_ニ檢見之命_一、而忽出_ニ公殿之馬_一、欲_レ使_ニ予騎_レ之_一、故不_レ得_レ已_一、而改_ニ裝束_一加_ニ頭巾_一、以_ニ赤皮_ニ縫_ニ四角_一、遂_ニ檢見_一、義尚公至感之余辱賜_ニ諱字_一、因改_ニ久勝_一稱_ニ義久_一、且復画_ニ前日裝束模樣於檢見扇子_一、書_ニ其贊_一以賜焉曰、

金地扇面

檢見頭巾面白

存小男収犬着

繩奔

当家既有一流手

不及京都小笠原_カ

御印

義尚贊御印

貴久公御家譜

一御当家一流之犬追物之秘説不相殘申上候、自然失念之

義は不可為訛謬候、若令違犯此旨は

神文略

島津河上武蔵守

天文十年辛酉二月廿五日

惟久判

進上

貴久様

貴久様へ上申候、

二月九日

島津武藏入道
昌孫

御伝書之内

(朱)頼家公御事

一督殿の鎌倉流之いんか取たるトハ難云、島津流と云事

ハ忠久様より以來にて候間、鎌倉流と申が本にて候由

昔より申也、此流之犬之射やうハ督殿御自記に有ナリ

可秘之、

一鎌倉流馬上弓とう之つかい様之事、他流にかくへつな

り、きりの上のとうをしかみとうと云、此とうを他流

ハ六寸二分ニ相定メ候へ共、馬上の時五六寸ヲ持候す

るニ、とうに取添候へハ、きわなき間とうの上一寸計

上ヲ持候へハ、きわく敷間、督殿御代かくのこと

く相定候由、承及候よし相伝申置候、然間指上とうハ

四寸二分にて候、

(朱)奥書

彼本日記加世田へひ野の御狩之時、

当家弓馬一流相伝之系図

右大将頼朝三男忠久之後五世

・貞久 上総守法名道鑑

大夫判官

頼久法名道覚

陸奥守
氏久

上野守

親久 法名道永

元久 陸奥守
頼翁

上野守

家久 法名道徹

修理亮

久豊 越後守
義天

陸奥守

忠国 大岳

左京亮

兼久 勝幢

薩摩守 持久樵夫	陸奥守 立久 節山	十郎左衛門尉 義久 法名道安	薩摩守 国久為圃	陸奥守 忠昌 円室	信濃守 忠周	薩摩守 重久西賢	近江守 忠武	十郎左衛門 惟久	武藏守 法名昌孫	四郎 忠家	加治木筑前守 員平	加治木又一郎 隆平
-------------	--------------	----------------------	-------------	--------------	-----------	-------------	-----------	-------------	-------------	----------	--------------	--------------

長谷場弥四郎 慶純	貴久 法名良等号大中 武藏守 経久 法名芳麟	兵庫頭後任侍從 義弘 左衛門督 年久	武藏守 倍久	久徳 喜入摂津守 季久	伊集院右衛門大夫 忠棟	十郎左衛門尉 久慶	貴久於伊集院興行之後、國家騷屑不レ已、是故殆乎三十年無レ人之興ニ此道ニ云云已断絶ス矣、義久與ニ武藏前司経久ニ相談シテ、興ニ此道之已ニ墜於麿島ニ矣、爾来相統シテ延テ及ニ我孫子ニ云々、若シ不レレハ墜ニ一門之家ニ者、雖ニ千万
--------------	------------------------------	-----------------------------	-----------	-------------------	----------------	--------------	---

世之後^二而無^三絶期^一矣祝々、

修理大夫 龍伯法印

義久 法名号貫明

任少將 陸奥守

家久

伊勢平藏貞丈著述家流問答

一 小笠原家も京都將軍の御代より有之家也、いかゞして伊勢流と替候事御座候哉、答云、小笠原家鎌倉將軍頼朝卿の御代より、弓馬の故実を家に伝へられたり、さるによりて京都將軍家も弓馬の故実は皆小笠原流を用ひ給ひし故、其頃小笠原流を弓馬の御当流と云ひし也、又京都將軍の御代にハ、伊勢家を内向といひ、小笠原を外向といひしなり、其謂れハ、伊勢家ハ殿中諸士の立居ふるまひ、御元服・御婚禮、其外都而御殿の内の礼法を司とりし故、内向と云、小笠原家ハ大的小的・草鹿躡流馬・笠掛・犬追物、其外弓馬の故実御殿より外之礼法を司とりし故、外向といふなり、されハ座敷の上の立ふるまひ、元服・婚禮等之法ハ皆当家の持前

なり、弓馬の礼法ハ皆小笠原家の持前也、是ハ京都將軍時代の定也、当時ハ小笠原家内向をもつとめらるゝ也、

一 伊勢家ハ弓馬の故実ハ無之候哉、答云、当家にも弓馬の故実なきにあらず、其書籍伝れり、然れとも皆小笠原家より伝へられし書多し、又私ニ覚書にしたる趣の書もあり、当家の持前の事にあらざる故、全くハ備らす、大的・笠掛・犬追物等ハ委敷伝へたり、され共我家の流義といふハあらず、本ハ小笠原家より伝りて、先祖日記の様に覚書杯委敷書置れし故、委敷伝たるなり、

伊勢貞丈著述草章

一 扶桑見聞私記并近年板行したる犬追物秘記ニ、養和二年頼朝の時の犬追物の式也とて載るを見るに、正保四年武藏国豊島郡王子村にて、島津薩摩守光久が官命に依て張行せし犬追物の式を、林春斎が書たりし犬追物御覽記を本にして、島津氏の家臣射手・検見・喚次

を勤めし者共の名を悉く頼朝の時の士の名に書替たり
 始終の式は御覽記の趣き用ひたり、馬場の砂、その外
 の事は、御覽記にも見ざる新作の忘説も交はりたり、
 世の人をまとハす事其罪軽からぬ事也、島津家の犬追
 物は鎌倉の御所の犬追物とて、彼家に相伝せられたり、
 かの正保四年の御覽記に載たる趣を見るに、室町殿の
 比行ハれし犬追物とは違ひたる事有、一家の風義有、
 右ニ云扶桑見聞私記、初は大江広元日記と号す、頼朝時代の日記也と
 て、享保年中加藤仙庵元の名は須「不音」と云、浪人者の偽作したる書
 也、又藤九郎盛長記も
 右同人の偽作也

右之通御座候、 御家流犬追物御由緒之次第は、

右大将頼朝公天下御一統之後、文治五年冬之比より於

鎌倉毎々弓馬之道專ニ御吟味有之、犬追物御興行之思

召被為在、 若君頼家公を奉始、諸大臣衆一同稽古調

練為有御座内、

御元祖忠久公御事茂其列御加り、御稽古被遊候御成行

前条建久七年御日記之趣歴然ニ相見得申候、然ルに其

内工藤・大商・武田・小笠原等之人々、抑弓馬之道其

家伝来有之、各会得之方ニ而、犬之射様一家之流儀相
 立、銘々四家ニ相分れ、猶又

頼家公御事は、兼而下河辺庄司行平より弓法御伝授被
 為成置候故、御工夫を以自己之御流儀被召立、其通懇
 望之方江は御指南被為成たる姿ニ相見得、

忠久公御事右之御流儀御執行御相伝被遊候御儀、前条
 武蔵入道昌孫より

貴久公江進上仕候御伝書之趣ニ而詳ニ相分り申候、夫
 故故建久八年三月 頼朝公御演出始而犬追物御覽之節

も、

忠久公ニは 頼家公御介借之役御勤被遊候、左候而東
 鑑之内、

忠久公 忠時公 久経公御事は、多年引統鎌倉江 御
 在勤為被成御座筋相見得候儀共有之、 忠時公御事も

於彼地犬追物御修行、承久四年二月、 若君頼経公犬
 追物御覽之節、申次之役 御勤被遊、貞永元年北条泰
 時以下七人之古老出会、評議之上犬追物五十一條之式

目被相定、右日記之儀鎌倉流奥蔵之秘事有之候旨、分而奥書被記置、右は 忠時公御時代ニ相当、夫より此道弥精密罷成爲申筋御座候、其後

久経公 忠宗公御事は右式之御記録相伝り不申候得共前条寛正六年

忠国公御状之内

忠久公御以來弓馬之芸 御代々御相伝被遊候御旨趣相見得申候付、決而 御兩代共御闕如は不被爲 在御儀と奉存候、其以後

貞久公御以來之御事は、前件弓馬御相伝御系図明白ニ有之、于此別段不申上候、然は右 御流儀古來鎌倉流又は 島津流共相唱、御家中ニ而は御家流と奉称候、尤右様一流兩名有之候、子細は是亦前条武蔵入道昌孫明白記置、右を以は武家弓馬之枢機、凡天下ニ無他事御流儀ニ而、乍忍

頼朝公御一筋之御血脈御連続、薩隅日三州御伝領相俱ニ、鎌倉以來千万世御永続被爲 在候、御明証ニも罷

成、程々重き御事御座候付、永年一入御愛惜被爲 在右之御式法矢所之批判、矢落之善惡等之沙汰、万一他邦人稽古懇望御座候而も、一円御取用被爲 在間敷御事ニ奉存候、子細は

頼朝公御嫡統茂僅三代之内御不幸到來遷遁、御興起被爲成置候弓馬之道も、於世上都而無跡罷成候処ニ、忠久公御事於 御天倫は、

頼朝公第一之 御子様ニ而、御家統被召立、武家肝要と仕候、弓馬之道御受継、至今無残所 御連続被爲成來候御儀、自然之御天運とは乍申、畢竟 御先代様方此道ニ

御心志を被爲勞候 御功業之故ニ御座候、尤前条寛正六年

忠国公川上道安江 御流儀被召預候節、十五ヶ条之秘密、其外段々数多之矢沙汰、其志を見届、重々之起請文を以相伝可仕旨被爲定置、其以來

上様方御伝授之節迎も、御互ニ起請文御取替シ相成候

重御取扱筋、他邦江相洩候而は連々之思召ニ相戻り、至而太切成御詔合御座候付、右式重立候儀はおのつから御差扣可罷成、左候而は初心未熟之者相授り候手数迄ニ而、邂逅習受候詮も無之、尤其内逆も馳駆奔趨急迫之際、多端之業合俄ニ稽古習熟不相調、荒増相心得候浅間敷手数を以、

島津家御流儀と相唱、余人江対シ自負仕候様之儀も難計、左候而は 御家伝之次第も為差深奥之訳無之、不連続成小笠原流相混、指而異儀も無之なと、様々誹謗可罷成儀差見得、実以格別成御流儀、凡天下之嘲譏を被為招候事端罷成、

御先代様ニ被為対不容易御詔合奉存候故ニ御座候、且又小笠原流之儀は、始祖新羅三郎義光以来、代々弓馬之道受継、就中

頼朝公御時、次郎長清後信濃守と称シ、分而其道之器量有之、若年之砌より

頼朝公弓法之御師範被相勸候旨、系譜被記置、長清代

迄は 御家流ニ大分之相違も有御座間敷哉、右七代之孫信濃守貞宗事家道格別練達、奉始

後醍醐帝、足利尊氏等之御指南被相勸、其後代々足利家御師範被仰付置候処、源遠ク相隔り、末益相分れ候儀は、每事自然之行形ニ而、既ニ文明年鑑、足利義尚公御時代、小笠原備前守犬追物張行之節、前条之通川上道安 御家流之式法を以検見之役相勸候始末、小笠原流之作法ニ相替居、殊更小笠原流は右より相劣候故、義尚公御賞美之余、其旨御書賛、且御諱之字被下置、将又御旗本伊勢平藏貞丈家之儀も累世之礼家ニ而、小笠原流弓馬之故実、犬追物之次第は彼家江も委敷伝来就中貞丈儀は家道拔群、器量為有之由候処、是亦 御家流犬追物之御式は、鎌倉御所之伝来ニ而、 御一家之風儀有之、小笠原流ニ相替居候趣、前条之通被記置右彼是之次第証拠明白成事御座候付、 御家流犬追物之御式法、小笠原一流とは別段御差別有之候儀と奉存候、此段申上候、以上、

卯九月廿四日

御使番御記録奉行動

得能彦左衛門

平川宗之進

御記録方添役

上村休兵衛

冊子原寸 縦二八・七糎 横二〇・六糎 二三枚

二〇 浜田林右衛門等処刑ノ件

鎌田藤馬組
御小姓与

浜田林右衛門

右は、去ル未秋代肝付組柏原下代相勘勘定相遂候処、元利銀六拾六貫弐百目不足相立、上納申渡候処、内実は御小姓与石神伊左衛門任頼下代相勘、何篇伊左衛門差引いたし候間、同人江上納被仰付度申出、伊左衛門及糺方候処、申分致匠候付猶又及糺方候処、買入米代又は免本銀四百兩余伊左衛門江差遣、勤濟勘定相進候処、右通及不足候段申出、評定所御用申渡候処、致切腹相果、其身不及問付者候得共、御蔵金錢致聊尔差統候儀無別条、身分

不成合、別而不届之仕形付、存命候得は土被召放、被行斬罪者候得共、相果候付土被召放、右科相当ニ而於境瀬戸死体取捨申付候、

右同人組
御小姓与

石神伊左衛門

右は、前条同断ニ付及糺方候処、柏原下代浜田林右衛門致付属候儀承候迄ニ而、右蔵方致差引金子等請取候儀一切無之旨申出候得共、付属一件付而も何篇取繫いたし候証拠有之、林右衛門より差統候金子相請取候儀無相違、其上去ル申秋代蒲生組納屋町下代致付属、御小姓与亡益満助左衛門江名前迄相頼、俱ニ御蔵元江差越、何篇致差引、助左衛門儀は病氣ニ而御断申出、勤役中入払勘定相遂候処、元利銀拾壱兩余・真米百八石余・赤米壱石四升余不足相立、上納申渡候処、不相調段申出、乍蔭御蔵元江差越、過分之致買入、代錢相請取、其外買入米いたし候儀無相違候付、右趣を以及糺方候処、無体之致申分候付、評定所御用申渡候処、致切腹相果、其身不及問付者

候得共、前条林右衛門致聊尔差統候金錢自用ニ取扱、又は買入代錢聊尔いたし候儀無別条、身分不成合別而不届之仕形付、存命候得は士被召放、被行斬罪者候得共、相果候付、士被召放、右科相当ニ而、於境瀬戸死体取捨申付候、

右可申渡候、

天保十四卯

八月十四日

徳之島江

遠島

(朱) 弘化二巳正月

大信院様拾三回御忌御法事
之節御恩赦被仰付候事

本御小姓与
石神名字之
伊左衛門嫡子
石神伊兵衛

右、依親科士被召放、右之通遠島申付候、

同十五辰

三月五日

本人
本御小姓与
石神名字之
伊左衛門

右依科、士被召放、死体取捨、

本人伊左衛門
嫡子本石神
名字之
伊兵衛

右、士被召放、遠島申付候旨、別段申渡候、

(朱) 弘化二巳正月伊之助事

右御法事之節御恩赦
被仰付候事

本人同人実二男
野元伊之助

右遠島

本人同人
娘

本人同人
娘

右式人、士被召放、親類預申付者共候得共、縁付故無御構、

本人同人実弟
宮本惣之進

本人同人
姉

右式人、親類預申付者共候得共、他家養子又は縁付故無御構、

右外御咎目相掛親族無之故、不及沙汰、

天保十五辰三月

文書原寸 縦二八・八種 横一六六・五種

〇二二 忠教公御写本「後撰百人一首」

二二二 二宮金次郎ノ日光御領荒地開墾方法

(表紙)
一 從允恭天皇四乙卯年

日光御領村々荒地起返方仕法賃金尅兩積歟下拾ヶ年季離形

(朱)
「戊一」

至雄略天皇十八甲寅年

御普請役格

二宮金次郎

荒地起返仕法付目録

一 荒地尅反歩ニ付起返賃金平均尅兩積之事、

一起返田尅反歩ニ付取米平均尅石積之事、

一 取米尅石之内作徳米平均五斗積之事、

一 取米尅石之内報徳冥加米平均五斗積之事、

一 米相場金尅兩ニ付平均尅石替積り之事、

一 開発仕法年限凡拾ヶ年季積之事、

一 開発仕法年限中凶作之年柄者可相除積之事、

今般格別之以 御仁恵、日光

御神領村々荒地起返方仕法付見込之趣、委鋪可奉申上旨被仰付候ニ付、荒地之広狭、賃金之多少、取米之増減、

年月之長短、目当無御座候半而ハ難積立候間、先ツ一は万物之始又大極といへり、依而荒地反別尅反歩と見積り、

起返し賃金凡尅兩と見積り、起返田上中下尅反歩ニ付豊凶平均取米尅石と見積り、米相場金尅兩ニ付高下平均尅石替と見積り、仕法年限之儀は凡拾ヶ年と見積り、忽而

一ニ基き為目録、年数之儀は天地東西南北之六合ニ基き其傍ニ書加候、年号之儀は余り巻数多く、前後順逆相分

兼候間、年代記ニ基き十千之儀は五行之内、毎年木の芽

立、草之芽立始甲乙ニ基き、十二支之儀は毎朝日の出、

毎年万物生育之始東方を祝して卯之方ニ基き、乙卯年中勘之為始、甲寅年迄六拾ヶ年一周度を以て一巻、開発田作人之儀は、伊呂波四拾五字外ニ一十百千万億兆之十五字ニ基き、仮ニ名前を設て目印、作徳冥加米之儀は、過不及多少増減ニ不相拘、其中ニ基き取米尅石之内五斗作徳と見積り、残米五斗冥加之ため相納候見込を以年々繰返し、尅反歩賃金尅兩より六兩迄尅兩増、六段之内尅兩積り起返し仕法付左ニ中勘組立申候、

荒地起返方先後得失目録

一荒地起返方先後得失有之儀は、大村小村大家小家ニ限らず、惣反別之内極土地柄地味能き土地より起返し申度候、土地柄地味能き土地ハ、耕し耘り蒔仕付万端手狭ニ而取穀多く暮方之助ニ相成可申候間、真先ニ起返し、作立米穀取増暮方力付次第、其潤沢を以藩地籾田ニ至迄終ニ自然と起返り可申候、

一右同断之内、畑方之儀は蒔仕付耕し耘り等、人夫多分

ニ相掛り兩毛作とは乍申、雜穀之儀は下直之品多有之候間、先ツ田方より起返し申度候、田方之儀は水を掛ケ、牛馬を以搔ならし蒔仕付いたし候ニ付、農事之助ケ多く、殊ニ米方ハ佃高直、夫共土地所之都合ニ随ひ天地之恵ミ人力助ニ少も多く相成候土地より起し返し作り立、暮方立直り次第終ニ自然と起返り可申候、

一右同断居村人家遠きハ耕し耘り蒔仕付刈取扱纏ひ、其外猪鹿鳥追等迄手間隙多分ニ相掛候間、先ツ居村又ハ人家近き土地より起返し作り立、米穀取増暮方力付次第、遠方ニ至迄終ニ自然と起返り可申候、

一右同断牛馬通路悪敷土地ハ、肥灰持運ひ人夫多分ニ相掛り可申候間、先ツ通路能き土地を見立起返し作立、米穀取増其余徳を以道を築き、橋を掛、通路相整ひ次第終ニ自然と起返り可申候、

一右同断水掛悪敷土地ハ何分地成兼候間、先ツ水路能き土地を見立起返し作立、米穀取増暮方立直り、其余徳を以用悪水溜井普請等も相整ひ順水致し、終ニ自然と

起返り可申候、

一右同断、数年退転亡所同様罷成居候間、地味之善悪は勿論、熟不熟相分り兼候ハ、先ッ其村又は隣村土地柄地味能き田畑質地請戻し、又ハ買請、其作徳浮米を以荒地起返し遣候ハ、何程土性悪、鋪実法兼幾度手違候共、御土台金取失不申候間、終ニ自然と起返り可申候、

一右同断、極難村之儀は、家数人別多分ニ相減し居候間、始ハ荒地起返し遣候共、何分作り立兼可申候間、先ッ土地柄地味能き田畑質地請戻、又は買受置、其作徳浮米を以、生田畑能く養ひ、米穀取増土徳之尊さを相願し申候得は、終ニ自然と見馴聞馴荒地起返り、田引請人願出可申候、

右は其村方前々人少致困窮居候ニ付、取直方被 仰付候間、始ニ能く終を尽し往々手違無之様いたし申度、去ル乙卯より今甲寅迄六拾ヶ年ッ、明細積り立、御入用米金は不及申、猥ニ人力を費し不申様致度候、如是人少困窮

致し居候節は、何方ニ而も己か田畑抔は漸仕付候迄ニ而手間隙を費し、諸雜費を遣ひ金銀貸借、其外種々之幸ひを願ひ求めるもの間々有之候得共、譬は門を不出して千里の遠に至らんと欲するか如く、実ニ浅間敷事ならずや、弥荒地起返し暮方取直度志願ニ候ハ、朝より夕迄相成易き人力を約して田畑を耕、米金を約して暮方を補ひ、夫食種穀農具其外肥灰整ひ、人別相増内暮方整ひ次第外ニ顯れ田畑不足ニ罷成、畑方ハ不及申、土地之遠近又ハ水掛り之善シ悪シ等ニ相拘不申、薄地龜田山地谷合野付原付寄刈等ニ至迄、急度起返り可申候、

荒地起返方仕法付雛形

允恭天皇四乙卯年

一開発田耆反歩

伊右衛門

此取米耆石

但金耆兩積

米五斗

作徳引

残米五斗

允恭天皇五丙辰年

一開発田五畝步

六右衛門

此取米五斗

米貳斗五升

作徳引

残米貳斗五升

二口合米七斗五升

允恭天皇六丁巳年

一開発田七畝拾五步

半兵衛

此取米七斗五升

米三斗七升五合

作徳引

残米三斗七升五合

二口合米壹石壹斗貳升五合

允恭天皇七戊午年

一開発田壹反壹畝八步

仁右衛門

此取米壹石壹斗貳升七合

米五斗六升三合

作徳引

残米五斗六升四合

二口合米壹石六斗八升九合

允恭天皇八己未年

一開発田壹反六畝廿七步

保之助

此取米壹石六斗九升

米八斗四升五合

作徳引

残米八斗四升五合

二口合貳石五斗三升四合

允恭天皇九庚申年

一開発田貳反五畝拾步

平右衛門

此取米貳石五斗三升三合

米壹石貳斗六升六合

作徳引

残米壹石貳斗六升七合

二口合米三石八斗壹合

允恭天皇十辛酉年

一開発田三反八畝步

藤右衛門

此取米三石八斗

米壹石九斗

作徳引

殘米壹石九斗

二口合米五石七斗壹合

允恭天皇十一壬戌年

一開発田五反七畝步

此取米五石七斗

米貳石八斗五升

殘米貳石八斗五升

二口合米八石五斗五升壹合

允恭天皇十二癸亥年

一開発田八反五畝拾五步

此取米八石五斗五升

米四石貳斗七升五合

殘米四石貳斗七升五合

二口合米拾貳石八斗貳升五合

允恭天皇十三甲子年

一開発田壹町貳反八畝八步

此取米拾貳石八斗貳升七合

米六石四斗壹升三合

殘米六石四斗壹升四合

二口合米拾九石貳斗四升

〔^米反別三町八反四畝廿三歩〕

允恭天皇十四乙丑年

一開発田壹町九反貳畝拾貳步

此取米拾九石貳斗四升

米九石六斗貳升

殘米九石六斗貳升

二口合米貳拾八石三斗六升

米五斗

殘米貳拾八石三斗六升

允恭天皇十五丙寅年

一開発田貳町八反三畝拾八步

此取米貳拾八石三斗六升

米拾四石壹斗八升

殘米拾四石壹斗八升

作徳引

類右衛門

作徳引

去ル卯開発立掃引

作徳引

斧右衛門

作徳引

作徳引

二口合米四拾貳石五斗四升

米貳斗五升

去ル辰開發立掃引

米五斗六升四合

殘米九拾四石貳斗六合

去ル午開發立掃引

殘米四拾貳石貳斗九升

允恭天皇十八己巳年

允恭天皇十六丁卯年

一開發田九町四反八步

与右衛門

一開發田四町貳反貳畝廿七步

和兵衛

此取米九拾四石貳升七合

此取米四拾貳石貳斗九升

米四拾七石壹升三合

作徳引

米貳拾壹石壹斗四升五合

作徳引

殘米四拾七石壹升四合

殘米貳拾壹石壹斗四升五合

二口合米百四拾壹石四升

二口合米六拾三石四斗三升五合

米八斗四升五合

去ル未開發立掃引

米三斗七升五合

去ル巳開發立掃引

殘米百四拾石壹斗九升五合

殘米六拾三石六升

允恭天皇十九庚午年

允恭天皇十七戊辰年

一開發田拾四町壹畝廿九步

為右衛門

一開發田六町三反拾八步

嘉右衛門

此取米百四拾石壹斗九升七合

此取米六拾三石六升

作徳引

米七拾石九升八合

作徳引

米三拾壹石五斗三升

作徳引

殘米七拾石九升九合

殘米三拾壹石五斗三升

二口合米貳百拾七石貳斗九升四合

二口合米九拾四石五斗四升

米壹石貳斗六升七合

去ル申開發立掃引

残米貳百九石貳升七合

允恭天皇廿辛未年

一開発田貳拾町九反八步

連之助

此取米貳百九石貳升七合

米百四石五斗壹升三合

作徳引

残米百四石五斗壹升四合

二口合米三百拾三石五斗四升壹合

米壹石九斗

去ル酉開発立帰引

残米三百拾壹石六斗四升壹合

允恭天皇二十一壬申年

一開発田三拾壹町壹反六畝拾貳步

曾右衛門

此取米三百拾壹石六斗四升

米百五拾五石八斗貳升

作徳引

残米百五拾五石八斗貳升

二口合米四百六拾七石四斗六升壹合

米貳石八斗五升

去ル戌開発立帰引

残米四百六拾四石六斗壹升壹合

允恭天皇二十二癸酉年

一開発田四拾六町四反六畝三歩

常右衛門

此取米四百六拾四石六斗壹升

米貳百三拾貳石三斗五合

作徳引

残米貳百三拾貳石三斗五合

二口合米六百九拾六石九斗壹升六合

米四石貳斗七升五合

去ル亥開発立帰引

残米六百九拾貳石六斗四升壹合

允恭天皇二十三甲戌年

一開発田六拾九町貳反六畝拾貳步

根之助

此取米六百九拾貳石六斗四升

米三百四拾六石三斗貳升

作徳引

残米三百四拾六石三斗貳升

二口合米千三拾八石九斗六升壹合

米六石四斗壹升四合

去子開発立帰引

残米千三拾貳石五斗四升七合

(米) 一ノ反別貳百六町五反廿七歩

允恭天皇二十四乙亥年

一開発田百三町貳反五畝拾四步 仲右衛門

此取米千三拾貳石五斗四升七合

米五百拾六石貳斗七升三合 作徳引

残米五百拾六石貳斗七升四合

二口合米千五百四拾八石八斗貳升壹合

米九石六斗貳升 去ル丑開発立帰引

残米千五百三拾九石貳斗壹合

允恭天皇二十五丙子年

一開発田百五拾三町九反貳畝步 来三郎

此取米千五百三拾九石貳斗

米七百六拾九石六斗 作徳引

残米七百六拾九石六斗

二口合貳千三百八石八斗壹合

米拾四石壹斗八升 去ル寅開発立帰引

残米貳千貳百九拾四石六斗貳升壹合

允恭天皇二十六丁丑年

一開発田貳百貳拾九町四反六畝六步 村右衛門

此取米貳千貳百九拾四石六斗貳升

米千四百拾七石三斗壹升 作徳引

残米千四百拾七石三斗壹升

二口合米三千四百四拾壹石九斗三升壹合

米貳拾壹石壹斗四升五合 去ル卯開発立帰引

残米三千四百貳拾石七斗八升六合

允恭天皇二十七戊寅年

一開発田三百四拾貳町七畝六步 宇之助

此取米三千四百貳拾石七斗八升七合

米千七百拾石三斗九升三合 作徳引

残米千七百拾石三斗九升四合

二口合米五千三百三拾壹石壹斗八升

米三拾壹石五斗三升 去ル辰開発立帰引

残米五千九拾九石六斗五升

允恭天皇二十八己卯年

一開発田五百九町九反六畝拾五步 野之松

此取米五千九拾九石六斗五升

米貳千五百四拾九石八斗貳升五合 作徳引

殘米貳千五百四拾九石八斗貳升五合

二口合米七千六百四拾九石四斗七升五合

米四拾七石壹升四合 去ル已開発立帰引

殘米七千六百貳石四斗六升壹合

允恭天皇二十九庚辰年

一開発田七百六拾町貳反四畝拾八步 国右衛門

此取米七千六百貳石四斗六升

米三千八百壹石貳斗三升 作徳引

殘米三千八百壹石貳斗三升

二口合米壹万四千四百三石六斗九升壹合

米七拾石九升九合 去ル午開発立帰引

殘米壹万三千三百三拾三石五斗九升貳合

允恭天皇三十辛巳年

一開発田千百三拾三町三反五畝廿八步 弥兵衛

此取米壹万千三百三拾三石五斗九升三合

米五千六百六拾六石七斗九升六合 作徳引

殘米五千六百六拾六石七斗九升七合

二口合米壹万七千石三斗八升九合

米百四石五斗壹升四合 去ル未開発田立帰引

殘米壹万六千八百九拾五石八斗七升五合

允恭天皇三十一壬午年

一開発田千六百八拾九町五反八畝廿三歩 政右衛門

此取米壹万六千八百九拾五石八斗七升五合

米八千四百四拾七石九斗三升八合 作徳引

殘米八千四百四拾七石九斗三升九合

二口合米貳万五千三百四拾三石八斗壹升四合

米百五拾五石八斗貳升 去ル申開発立帰引

殘米貳万五千八百八拾七石九斗九升四合

允恭天皇三十二癸未年

一開発田貳千五百拾八町七反九畝廿八步 啓三郎

此取米貳万五千八百八拾七石九斗九升三合

米壹万貳千五百九拾三石九斗九升三合 作徳引

残米壹万貳千五百九拾三石九斗九升七合

二口合米三万七千七百八拾壹石九斗九升壹合

米貳百三拾貳石三斗五合 去ル酉開発立帰引

残米三万七千五百四拾九石六斗八升六合

允恭天皇三十三年甲申年

一開発田三千七百五拾四町九反六畝廿六步 福太郎

此取米三万七千五百四拾九石六斗八升七合

米壹万八千七百七拾四石八斗四升三合 作徳引

残米壹万八千七百七拾四石八斗四升四合

二口合米五万六千三百廿四石五斗三升

米三百四拾六石三斗貳升 去戌開発立帰引

残米五万五千九百七拾三石貳斗壹升

(朱) 一反別壹万千九百九拾五町六反四畝四步

允恭天皇二十四乙酉年

一開発田五千五百九拾七町八反貳畝三步 駒右衛門

此取米五万五千九百七拾八石貳斗壹升

米貳万七千九百八拾九石壹斗五合 作徳引

残米貳万七千九百八拾九石壹斗五合

二口合米八万三千九百六拾七石三斗壹升五合

米五百拾六石貳斗四升四合 去ル亥開発立帰引

残米八万三千四百五拾壹石四升壹合

允恭天皇二十五丙戌年

一開発田八千三百四拾五町壹反拾貳步 米次郎

此取米八万三千四百五拾壹石四升

米四万七千七百貳拾五石五斗貳升 作徳引

残米四万七千七百貳拾五石五斗貳升

二口合米拾貳万五千七百七拾六石五斗六升壹合

米七百六拾九石六斗 去子開発立帰引

残米拾貳万四千四百六石九斗六升壹合

允恭天皇二十六丁亥年

一開発田壹万貳千四百四拾町六反九畝拾八步 鉄之助

此取米拾貳万四千四百六石九斗六升

米六万貳千貳百三石四斗八升 作徳引

残米六万貳千貳百三石四斗八升

二口合米拾八万六千六百拾石四斗四升合

米千四百拾七石三斗壹升 去る丑開発立婦引

残米拾八万五千四百六拾三石壹斗三升壹合

允恭天皇三十七戊子年

一開発田壹万八千五百四拾六町三反壹畝九步 浅右衛門

此取米八万五千四百六拾三石壹斗三升

米九万貳千七百三拾壹石五斗六升五合 作徳引

残米九万貳千七百三拾壹石五斗六升五合

二口合米貳拾七万八千九百九拾四石六斗九升六合

米千七百拾石三斗九升四合 去ル寅開発立婦引

残米貳拾七万六千四百八拾四石三斗貳合

允恭天皇三十八己丑年

一開発田貳万七千六百四拾八町四反三畝壹步 佐兵衛

此取米貳拾七万六千四百八拾四石三斗三合

米拾三万八千貳百四拾貳石壹斗五升壹合 作徳引

残米拾三万八千貳百四拾貳石壹斗五升壹合

二口合米四拾壹万四千七百貳拾六石四斗五升四合

米貳千五百四拾九石八斗貳升五合 去ル卯開発立

婦引

残米四拾壹万貳千七百七拾六石六斗貳升九合

允恭天皇三十九庚寅年

一開発田四万千貳百拾七町六反六畝九步 喜右衛門

此取米四拾壹万貳千七百七拾六石六斗三升

米貳拾万六千八拾八石三斗壹升五合 作徳引

残米貳拾万六千八拾八石三斗壹升五合

二口合米六拾壹万八千貳百六拾四石九斗四升四合

米三千八百壹石貳斗三升 去ル辰開発立婦引

残米六拾壹万四千四百六拾三石七斗壹升四合

允恭天皇四十辛卯年

一開発田六万四千四百四拾六町三反七畝四步 勇右衛門

此取米六拾壹万四千四百六拾三石七斗壹升三合

米三拾万七千貳百三拾壹石八斗五升六合 作徳引

残米三拾万七千貳百三拾壹石八斗五升六合

二口合米九拾貳万六千九百九拾五石五斗七升壹合

米五千六百六拾六石七斗九升七合

去ル巳開竈

立帰引

残米九拾壹万六千貳拾八石七斗七升四合

残米六拾八万貳千七百九拾七石六斗壹升貳合

二口合米貳百四万八千五百九拾貳石八斗三升四合

米壹万貳千五百九拾三石九斗九升七合 去ル未

允蒸天皇四十一年壬辰年

一開竈田九万千六百貳町八反七畝貳貳步

食之助

此取米九拾壹万六千貳拾八石七斗七升三合

米四拾五万八千拾四石三斗八升六合

作徳引

残米四拾五万八千拾四石三斗八升七合

安康天皇元甲午年

残米貳百三万五千七百九拾八石八斗三升七合

一開竈田貳拾万三千五百七拾九町八反八畝拾壹步

篠右衛門

二口合米百三拾七万四千四拾三石壹斗六升壹合

米八千四百四拾七石九斗三升九合

去ル午開竈

立帰引

残米百三拾六万五千五百九拾五石貳斗貳升貳合

此取米貳百三万五千七百九拾八石八斗七合

米百壹万七千八百九拾九石四斗壹升八合 作徳引

残米百壹万七千八百九拾九石四斗壹升九合

二口合米三百五万三千六百九拾八石貳斗五升六合

允蒸天皇四十二年癸巳年

一開竈田拾三万六千五百五拾九町五反貳畝七步

皆右衛門

此取米百三拾六万五千五百九拾五石貳斗貳升三合

米六拾八万貳千七百九拾七石六斗壹升壹合作徳引

残米三百三万四千九百貳拾三石四斗壹升貳合

〔(未) 反别六拾万六千九百八拾四町六反八畝六步〕

安康天皇二乙未年

安康天皇二乙未年

一開発田三拾万三千四百九拾貳町三反四畝四步 秀之助

此取米三百三万四千九百貳拾三石四斗壹升三合

米百五拾壹万七千四百六拾壹石七斗六合 作徳引

残米百五拾壹万七千四百六拾壹石七斗七合

二口合米四百五拾五万貳千三百八拾五石壹斗壹升九合

米貳万七千九百八拾九石壹斗五合 去ル酉開発

立帰引

残米四百五拾貳万四千三百九拾六石壹升四合

安康天皇三丙申年

一開発田四拾五万貳千四百三拾九町六反四步 茂右衛門

此取米四百五拾貳万四千三百九拾六石壹升三合

米貳百貳拾六万貳千九百九拾八石六合 作徳引

残米貳百貳拾六万貳千九百九拾八石七合

二口合米六百七拾八万六千五百九拾四石貳升壹合

米四万七千七百貳拾五石五斗貳升去ル戌開発立帰引

残米六百七拾四万四千八百六拾八石五斗壹合

雄略天皇元丁酉年

一開発田六拾七万四千四百八拾六町八反五畝步 清兵衛

此取米六百七拾四万四千八百六拾八石五斗

米三百三拾七万貳千四百三拾四石貳斗五升

作徳引

残米三百三拾七万貳千四百三拾四石貳斗五升

二口合米千拾壹万七千三百貳石七斗五升壹合

米六万貳千貳百三石四斗八升 去亥開発立帰引

残米千五万五千九拾九石貳斗七升壹合

雄略天皇二戊戌年

一開発田百万五千五百九町九反貳畝廿壹步 須磨右衛門

此取米千五万五千九拾九石貳斗七升

米五百貳万七千五百四拾九石六斗三升五合

作徳引

残米五百貳万七千五百四拾九石六斗三升五合

二口合米千五百八万貳千六百四拾八石九斗六合

米九万貳千七百三拾壹石五斗六升五合 去ル子

開発立帰引

残米千四百九拾八万九千九百拾七石三斗四升壹合

雄略天皇三己亥年

一開発田百四拾九万八千九百九拾壹町七反三畝拾貳步

京右衛門

此取米千四百九拾八万九千九百拾七石三斗四升

米七百四拾九万四千九百五拾八石六斗七升

作徳引

残米七百四拾九万四千九百五拾八石六斗七升

二口合米貳千貳百四拾八万四千八百七拾六石壹升壹合

米拾三万八千貳百四拾貳石壹斗五升九合

去丑開発立帰引

残米貳千貳百三拾四万六千六百三拾三石八斗五升九

合

雄略天皇四庚子年

一開発田貳百貳拾三万四千六百六拾三町三反八畝拾八步

市太郎

此取米貳千貳百三拾四万六千六百三拾三石八斗六升

米千百拾七万三千三百拾六石九斗三升 作徳引

残米千百拾七万三千三百拾六石九斗三升

二口合米三千三百五拾壹万九千九百五拾石七斗八升九

合

米貳拾万六千八拾八石三斗壹升五合

去ル寅開発立帰引

残米三千三百三拾壹万三千八百六拾貳石四斗七升四合

雄略天皇五辛丑年

一開発田三百三拾三万三千三百八拾六町貳反四畝廿貳步

仁三郎

此取米三千三百三拾壹万三千八百六拾貳石四斗七升

三合

米千六百六拾五万六千九百三拾壹石貳斗三升六合

作徳引

残米千六百六拾五万六千九百三拾壹石貳斗三升七合

二口合米四千九百九拾七万七千九百九拾三石七斗壹升壹合

米三拾万七千貳百三拾壹石八斗五升七合

去ル卯開発立帰引

残米四千九百六拾六万三千五百六拾壹石八斗五升四合

雄略天皇六壬寅年

一開発田四百九拾六万六千三百五拾六町壹反八畝拾六步

三右衛門

此取米四千九百六拾六万三千五百六拾壹石八斗五升

三合

米貳千四百八拾三万七千七百八拾石九斗貳升六合

作徳引

残米貳千四百八拾三万七千七百八拾石九斗貳升七合

二口合米七千四百四拾九万五千三百四拾貳石七斗八升

壹合

米四拾五万八千拾四石三斗八升七合

去ル辰開発立帰引

残米七千四百三万七千三百貳拾八石三斗九升四合

雄略七癸卯年

一開発田七百四十万三千七百三拾貳町八反三畝廿八步

四郎兵衛

此取米七千四百三万七千三百貳拾八石三斗九升三合

米三千七百壹万八千六百六拾四石壹斗九升六合

作徳引

残米三千七百壹万八千六百六拾四石壹斗九升七合

二口合米壹億千五百五千九百九拾貳石五斗九升壹合

米六拾八万貳千七百九拾七石六斗壹升貳合

去巳開発立帰引

残米壹億千三百七万三千九百九拾四石九斗七升九合

雄略天皇八甲辰年

一開発田千三百七千三百拾九町四反九畝廿四步

五右衛門

此取米壹億千三拾七万三千九百九拾四石九斗八升

米五千五百拾八万六千五百九拾七石四斗九升

作徳引

残米五千五百拾八万六千五百九拾七石四斗九升

二口合米壹億六千五百五拾五万九千七百九拾貳石四斗

六升九合

米百壹万七千八百九拾九石四斗壹升九合

去ル午開発立帰引

残米壹億六千四百五拾四万八千八百九拾三石五升

(米) 一ノ反別三千貳百九拾万八千三百七拾八町六反廿九步

雄略天皇九乙巳年

一開発田千六百四拾五万四千八百八拾九町三反拾五步

六兵衛

此取米壹億六千四百五拾四万八千八百九拾三石五升

米八千貳百貳拾七万九百四拾六石五斗貳升五合

作徳引

残米八千貳百貳拾七万九百四拾六石五斗貳升五合

二口合米貳億四千六百八拾壹万貳千八百三拾九石五斗

七升五合

米百五拾壹万七千四百六拾壹石七斗七合

去ル未開発立帰引

残米貳億四千五百貳拾九万五千三百七拾七石八斗六升

八合

雄略天皇十丙午年

一開発田貳千四百五拾貳万九千五百三拾七町七反八畝廿

步

此取米貳億四千五百貳拾九万五千三百七拾七石八斗

六升七合

米壹億貳千貳百六拾四万七千六百八拾八石九斗三

升三合

残米壹億貳千貳百六拾四万七千六百八拾八石九斗三

升四合

二口合米三億六千七百九拾四万三千六拾六石八斗貳合

米貳百貳拾六万貳千九拾八石七合

去ル申開発立帰引

残米三億六千五百六拾八万八千六百六拾八石七斗九升五合

雄略天皇十一丁未年

一開発田三千六百五拾六万八千八拾六町八反七畝廿九步

八右衛門

此取米三億六千五百六拾八万八千六百六拾八石七斗九升

七合

米壹億八千貳百八拾四万四千三百三拾四石三斗九升八

合

作徳引

残米壹億八千貳百八拾四万四千三百三拾四石三斗九升九

合

二口合米五億四千八百五拾貳万三千三百三石壹斗九升四

合

米三百三拾七万貳千四百三拾四石貳斗五升

去ル酉開発立帰引

残米五億四千五百拾四万八千八百六拾八石九斗四升四

合

雄略天皇十二戊申年

一開発田五千四百五拾壹万四千八百八拾六町八反九畝十

三步

九右衛門

此取米五億四千五百拾四万八千八百六拾八石九斗四

升三合

米貳億七千貳百五拾七万四千四百三拾四石四斗七

升貳合

残米貳億七千貳百五拾七万四千四百三拾四石四斗七

升貳合

二口合米八億千七百七拾貳万三千三百三石四斗壹升六

合

米五百貳万七千五百四拾九石六斗三升五合

合

去ル戌開発立帰引

残米八億千貳百六拾九万五千七百五拾三石七斗八升壹

合

雄略天皇十三己酉年

一開発田八千百貳拾六万九千五百七拾五町三反七畝廿四

步

十兵衛

此取米八億千貳百六拾九万五千七百五拾三石七斗八

升

米四億六百三拾四万七千八百七拾六石八斗九升

作徳引

残米四億六百三拾四万七千八百七拾六石八斗九升
二口合米拾貳億千九百四万三千六百三拾石六斗七升
合

一開発田壹億八千六拾壹万四千九百六拾九町壹反廿壹步

千右衛門

米七百四拾九万四千九百五拾八石六斗七升

此取米拾八億六百拾四万九千六百九拾壹石七升

米九億三百七万四千八百四拾五石五斗三升五合

去ル亥開発立帰引

作徳引

残米拾貳億千百五拾四万八千六百七拾貳石壹合

残米九億三百七万四千八百四拾五石五斗三升五合

雄略天皇十四庚戌年

一開発田壹億貳千百拾五万四千八百六拾七町貳反步

六合

百右衛門

米千六百六拾五万六千九百三拾壹石貳斗三升七合

此取米拾貳億千百五拾四万八千六百七拾貳石

去ル丑開発立帰引

米六億五百七拾七万四千三百三拾六石 作徳引

残米貳拾六億九千貳百五拾六万七千六百五石三斗六升

残米六億五百七拾七万四千三百三拾六石

九合

二口合米拾八億千七百三拾貳万三千八百壹合

雄略天皇十六壬子年

米千百拾七万三千三百拾六石九斗三升

一開発田貳億六千九百貳拾五万六千七百六拾町五反三畝

去ル子開発立帰引

廿壹步

万兵衛

残米拾八億六百拾四万九千六百九拾壹石七升壹合

此取米貳拾六億九千貳百五拾六万七千六百五石三斗

雄略天皇十五辛亥年

七升

米拾三億四千六百貳拾八万三千八百貳石六斗八升

五合

作徳引

殘米拾三億四千六百貳拾八万三千八百貳石六斗八升

五合

二口合米四拾億三千八百八拾五万四千四百八石五升四合

米貳千四百八拾三万七千七百八拾石九斗貳升七合

去ル寅開発立帰引

殘米四拾億千四百壹万九千六百貳拾七石壹斗貳升七合

雄略天皇十七癸丑年

一開発田四億百四拾万九千九百六拾貳町七反壹畝八歩

億右衛門

此取米四拾億千四百壹万九千六百貳拾七石壹斗貳升

七合

米貳拾億七百万九千八百拾三石五斗六升三合

作徳引

殘米貳拾億七百万九千八百拾三石五斗六升四合

二口合米六拾億貳千貳万九千四百石六斗九升壹合

米三千七百壹万八千六百四石壹斗九升七合

去ル卯開発立帰引

殘米五拾九億八千四百壹万七千七百七拾六石四斗九升四

合

雄略天皇十八甲寅年

一開発田五億九千八百四拾万七千七拾七町六反四畝廿八歩

兆之助

此取米五拾九億八千四百壹万七千七百七拾六石四斗九升

三合

米貳拾九億九千貳百万五千三百八拾八石貳斗四升

六合

作徳引

殘米貳拾九億九千貳百万五千三百八拾八石貳斗四升

七合

二口合米八拾九億七千六百壹万六千六百六拾四石七斗四

升壹合

米五千五百拾八万六千五百九拾七石四斗九升

去ル辰開発立帰引

残米八拾九億貳千八拾貳万九千五百六拾七石貳斗五升

壹合

(米) 反別拾七億八千四百拾六万五千九百拾三町四反四畝廿

九歩

〔六十ヶ年〕

惣開発田反別合拾八億千七百六拾九万貳千六百八拾貳町

七反三畝廿八歩

此開発料金百八拾壹億七千六百九拾貳万六千八百廿七

兩老分永百四拾三文 但老反三付
金老兩積り

一米八拾九億貳千八拾貳万九千五百六拾七石貳斗五升壹

合

米八千貳百貳拾七万九百四拾六石五斗貳升五合

去ル已開発立帰引

残米八拾八億三千八百五拾五万八千六百貳拾石七斗貳

升六合

米壹億貳千貳百六拾四万七千六百八拾八石九斗三

升四合

去ル午開発立帰引

残米八拾七億千五百九拾壹万九百三拾壹石七斗九升貳

合

米壹億八千貳百八拾四万四百三拾四石三斗九升九

合

去ル未開発立帰引

残米八拾五億三千三百三拾七万四百九拾七石三斗九升

三合

米貳億七千貳百五十七万四千四百三拾四石四斗七

升貳合

去ル申開発立帰引

残米八拾貳億六千四拾九万六千六拾貳石九斗貳升壹合

米四億六百三拾四万七千八百七拾六石八斗九升

去ル酉開発立帰引

残米七拾八億五千四百拾四万八千八百八拾六石三升壹合

米六億五百七拾七万四千三百三拾六石

去ル戌開発立帰引

残米七拾貳億四千八百三拾七万三千八百五拾石三升壹

合

米九億三百七万四千八百四拾五石五斗三升五合

去ル亥開発立帰引

合

但老石三付三升ツ、

残米六拾三億四千五百貳拾九万九千四石四斗四升六合

米拾三億四千六百廿八万三千八百貳石六斗八升五

二口合米七百四拾五億千四百四拾九万三千八百三拾七石
三斗七升

合 去ル子開発立帰引

残米四拾九億九千九百壹万五千貳百壹石八斗壹升壹合

米貳拾億七百万九千八百拾三石五斗六升四合

此儀貳千拾三億九千五拾貳万三千八百八拾四儀貳斗九
升 但老儀三斗七升入

去ル丑開発立帰引

此代金七百四拾五億千四百四拾九万三千八百三拾七
兩老分承百貳拾文 但金老兩三付老石替

残米貳拾九億九千貳百万五千三百八拾八石貳斗四升七

合

(米)
「十ヶ年」

惣合米七百貳拾七億七百七拾万七千三百拾石六斗九升九

合

内米三億六千三百五拾三万八千五百三拾六石五斗五

升三合

但名主給五厘引
老石三付五合宛

残米七百貳拾三億四千四百拾六万八千七百七拾四石老斗

四升六合

口米貳拾老億七千三拾貳万五千六拾三石貳斗貳升四

開発勤行談

一今爰ニ独りの農夫ありて、老反歩の荒地を開発せん
欲する時、一鍬ツ、切起すより先なるハなく、又順な
るハなし、若し強者ありて急ぐといへとも、二鍬ツ、
重て切起す事あたわす、止む事を不得して二鍬ツ、重
て切起さんとする時ハ、其鍬果して破れ損し、其身を
過ッ事、農具製作し荒地開発の始より今日只今に至迄
人皆銘々疑ひなし、縦令荒地の難易開発の遅速ハあり
といへとも、一鍬ツ、進ミ切起すより速なるハなく、

順なるハなし、如斯能尽す時ハ、柔者といへとも其極に至得ざる事なし、是則天理自然なり、能々此理りを明弁いたし、其外を不願一途に相励一鎌ツ、致精勤申度事ニ候、

一 鎌耕耘談

一 今爰に独りの農夫ありて、耆反歩の田地を耕し、蒔仕付んと欲する時ハ、一鎌ツ、耕すより先なるハなく、又順なるハなし、若し強者ありて何程急くといへとも、二鎌ツ、重て耕す事あたハす、不得止事して二鎌ツ、かさね耕んと欲する時ハ、其鎌果して破れ損し其身を過ツ事、農具製作蒔仕付始めてより今日只今に至まで人皆銘々疑ひなし、仮令耕し蒔仕付の進退遅速ハありといへとも、一鎌ツ、進ミ耕すより速なるハなく、順なるハなし、如斯能尽す時ハ柔者といへとも其極に至り得ざる事なし、是則天理自然なり、能々此理りを明弁いたし、其外を不願一途に相励ミ一鎌ツ、耕し申度事ニ候、

一 株植付談

一 今爰にひとりの農夫ありて、耆反歩の田地に苗を植付んと欲する時ハ、一株ツ、植付より先なるハなく、又順なるハなし、若し強者ありて何程急くといへとも、二株ツ、かさねて植付る事あたわす、止む事を得ずして二株ツ、重ね植付る時ハ、其苗果して纏れ株わかちなく、終に植付成就セざる事、田地開け苗植付始めてより今日只今に至迄、人皆銘々疑ひなし、仮令苗植付の遅速ハありといへとも、一株ツ、植付より速なるハなく、順なるハなし、斯の如く能く尽す時ハ、柔者といへとも其極にいたり得ざる事なし、是則天理自然なり、能々此理りを明弁いたし、其外を不願一途に相励一株ツ、植付申度事ニ候、

一 株刈取談

一 今爰に独りの農夫ありて、田耆反歩の稲を刈取んと欲する時、一鎌ツ、刈取より先なるハなく、又順なるハなし、若し強者ありて何程急くといへとも、二鎌ツ、

刈取事あたはず、止むことを得ずして二鎌ツ、重ね刈取んと欲する時ハ、其鎌果して破れ損し、其稲も纏れ刈とれざる事、田地開け稲刈始めてより今日只今に至まて、人皆銘々疑ひなし、仮令稲刈の遅速ハありといへとも、一鎌ツ、刈取より速なるハなく、順なるハなし、斯の如く能尽す時ハ、柔者といへとも其極ニ至り不得事なし、是則天理自然なり、能々此理りを明弁いたし其外を願ハす一途に相励ミ一鎌ツ、刈取申度事ニ候、

米穀産業談

一今爰に人あり、身命を養んか為に米を得て食んと欲する時、先ツ米を作るにしかし、米を作るに道あり、時節に従ひ時仕付耕し耘り、肥灰を養ひ能く手入を尽し実法熟セしを刈取扱纏ひ、年分に配当いたし食するより近きハなし、此大道を能く尽す時ハ、生々世々貧苦艱難ハ不及申、飢渴の憂ある事なし、情其根元を案するに、米を得るに道あり、藁を作るより順なるハなし、藁を作るに道あり、米の種を蒔より順なるハなし、然

といへとも藁より藁の生する事なく、又米より米の生する事なし、一度は藁となり一度は米となり、いつの昔米生してより今日只今に至まて、仮令一粒たりとも此外に得る処なし、能々此大道を明弁いたし、一途に相励ミ勤農いたし申度事ニ候、扱又其村方一同前二度々歎願申立候荒地起返し、米・麦・雜穀取増、家数人別村栖取直仕法之儀、全不容易大業ニ付、其広太に及んでハ算勘數量にも尽し難く候間、始一畝に天理を尽して百畝の功德を探り、百畝の天理を尽して一畝ツ、起返し申候ハ、仮令百千万町の広きに至といへとも速に起返り、耕土に罷成、銘々志願之通米穀産出し、人命を養ひ可申候得共、荒地起返しハ一旦之儀、一度起返セハ年々歳々一畝ツ、耕し、一株ツ、植付、一株ツ、刈取候、此三業ハ永久万代止事なし、若し一年怠る時ハ、眼前元のことく荒地と罷成候事疑ひなし、能々此理りを奉承服、弥相励ミ勤農いたし申度事ニ候、

田地売買一村無増減之談

一今爰に田反別耆町歩ある時、内耆反歩売れ耆反歩の買人あり、残九反歩となる、又耆反歩売れハ耆反歩の買人あり、残八反歩となる、又耆反歩売れハ耆反歩の買人あり、残七反歩となる、又耆反歩売れハ耆反歩の買人あり、残六反歩となる、又耆反歩売れハ耆反歩の買人あり、残り五反歩となる、又耆反歩売れハ耆反歩の買人あり、残り四反歩となる、又耆反歩売れハ耆反歩の買人あり、唯人々勤農惰農の賞罰顯ハれ、一家退転致候而已、一村ニおゐてハ毛頭増減なし、是則天道自然なり、雖然日月星辰四時の運動に依て、春生し秋実法るもあり、秋生し春実法るもあるか如く、家毎銘々勤農惰農又暮方驕奢節儉平常之取行内外に貫き、或ハ富となり又貧となり、余義なく田畑売捌一家退転いたし候儀、先祖之丹誠致忘却、子々孫々之憂ひ是より大

なるハなし、能々此理りを奉承服、猥に売払減亡不致候様常々相心掛申度事ニ候、

米穀売買一村無増減之談

一今爰に米拾俵ある時、内耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り九俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残八俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り七俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り六俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り五俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り四俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り三俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、残り二俵となる、又耆俵売れハ耆俵の買人あり、唯売人ハ減し買人ハ増のミ、一村ニ於てハ毛頭増減なし、是則天道自然也、然といへとも日月星辰四時の運動によつて、春生し秋実法るもあり、又秋生して春実法るも有るか如く、家毎銘々積善積徳、其外居住家業之次第あつて、塩噌薪衣類余りて米穀不足し、米穀余りて塩噌薪

衣類不足し、内外融通用弁之ため、いつの昔より今日に至まで売買の利潤暫も止事なきの大道、能々此理りを明弁いたし、相互に実意を尽し売買いたし申度事ニ候、

米穀貸借一村無増減之談

一今爰に米拾俵ある時、内壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残九俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残八俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残七俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残六俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残四俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残三俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、残貳俵となる、又壹俵貸セハ壹俵の借人あり、唯其身々々の過不及用弁するのミ、一村におゐてハ毛頭増減なし、是則天道自然なり、然といへとも日月星辰四時の運動によつて、春生し秋実法るもあり、秋生して春実法る

もあるか如く、家毎銘々積善積徳、又ハ暮方驕奢節儉に依て、或は富となり、又貧となり、余儀なく遠近外用弁のためいつの昔より今日に至迄、貸借融通暫も止事なし、能々此理りを明弁いたし、相互に実意を尽し貸借いたし申度事ニ候、

惰農荒田失食亡命之談

一今爰に田壹町歩ある時、内壹反歩荒セハ米壹石減して凡一日貳百人の民食を失ひ、残九反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残八反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残七反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残六反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残五反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残四反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残三反歩となる、又壹反歩荒セハ、米壹石減して貳百人の民食を失ひ、残貳反

歩となる、又忝反歩荒セハ、米忝石減して忝百人の民食を失ひ、残忝反歩となる、又忝反歩荒セハ、米忝石減して忝百人の民食を失ひ、困窮難渋とは乍申、田忝町歩荒セハ一家退転いたし候而已にあらず、年々米拾石減す、扱又田売買之儀は、忝反歩売人あれハ忝反歩の買人あり、只出精奇特のしるし顯れ、其取穀却て相増、一村に於てハ反別増減ある事なし、猶米穀売買之儀は、忝俵売人あれハ忝俵の買人ありて、代金取遣り過不及融通能罷成、一村に於てハ増減ある事なし、其外米穀貸借之儀は、米忝俵貸人あれハ忝俵之借人あり、貧富之融通宜鋪、一村に於てハ毛弗の増減なし、耕田之儀は、反別忝町歩荒セハ其減米拾石、仮令十年を積といへとも、百石土中にある事なく、猶又百歳を経といへとも、其利益合勺も得るものなし、全年ニ拾石ツ、相減し、凡忝千人の民食を失ひ、内外の憂ひ少からず、生とし生るもの人皆銘々食なくして生命を保ツ事あたはず、是人を害せずして暗に人をそこなふに至る、詰

り一村の衰弊廢亡是より甚敷ハなし、能々此理りを明弁いたし、天災病難等之節ハ早々馳集り、相互ニ実意を尽し助合、荒地亡所に不相成候様常々相心掛申度事ニ候、

報徳富国談

一今爰に匏田上中下平均忝反歩、米忝石取と見積り、其内忝俵忝斗御年貢・諸役高掛り物等相除き、残米忝俵忝斗、種穀農具肥代引、何分暮し方致不足、日雇出稼余業杯ニ力を尽し、其時節に差掛り耕し植付、実法少き時は匏田惡地杯と唱ひ、相歎き困窮難渋いたし居、全く土徳之尊きを失ひ、実に無勿体事ニ候、其根元ハ家毎銘々親先祖代々いつの昔より今日に至迄、露命を繋ぎ相続いたし来候為報恩沢所持之内忝反歩作り立、取米忝石之内忝俵忝斗御年貢・諸役高掛りもの相除き残米忝俵忝斗兩ニ忝石替代金之内、山草・野草・落葉・下草之代金忝分、粕干鱒之代金忝分と見積り、右忝反歩養ひ肥す時は、肥代忝俵忝斗丈取増候とも三俵三斗

ニ相成、内巻俵斗御年貢・諸役高掛り相除、残米式俵式斗、此代金之内山草・野草・落葉・下草之代金壹分、粕干鰯之代金壹分、用水道・橋普請人足賃金壹分水掛り悪き乾地之場地下ケ、湿地水腐場水拔土持人足等之賃金壹分、右普請人足肥代式俵式斗取増候段、僅式ケ年無給ニ作立候ハ、取米五俵ニ相成、内巻俵斗御年貢、巻俵斗肥代、巻俵斗作徳、巻俵斗普請人足賃、如斯永久取行候時は、何程之湿地乾地薄地匱田なりといへとも上田に準し、巻反歩之実法式反歩之利益を生ずる事疑ひなし、能々此理りを致明弁、報田徳貧窮之憂ひを免れ、弥相励安穩無事ニ致相統申度事ニ候、

右は其村方之儀、天災・凶荒・饑饉其外、水火病難等度々之不仕合臨時物人打統、借財相嵩返済方々差詰り、田畑手入不行届、匱作罷成、取穀相減、暮方ニ差詰り、無余儀他所奉公・日雇・出稼・魚鳥殺生余業而已ニ力を尽し、田畑手余り余荷地多く、諸役高掛り弁納物ニ差支、

或は俱潰れ又ハ逃去り追々人少困窮ニ罷成、此仮差置候ハ、終ニ自然と退転可仕哉も難計、一同十方ニ暮、無是非趣を以荒地起返し、入百姓人別増、窮民撫育、借財返済暮方取直、旧復永統之仕法、名主・組頭・惣百姓一同歎願申出候得共、其村方而已ニ限らず銘々承知之通、前後左右より相慕ひ頼談有之候得共、仮令其村高千石之処凡半荒は見積り、高五百石起返済金荒地巻反歩ニ付壹兩と見積り候処、金五百兩、猶又古しヘ家數百軒之所凡半潰、家數五拾軒、巻軒ニ付金拾兩と見積り五百兩、其外用悪水道、橋普請入用夫食糧穀・農具・肥代・借財返済等彼是凡千兩、又ハ式千兩ニ而ハ中々以一村立直り不申、不容易御出方、殊ニ新百姓之儀は夫食を遣候得は、塩噌を願ひ、塩噌を遣候得は、鍋・釜・家財を願ひ、鍋・釜・家財を遣候得は、農具を願ひ、農具を遣候得は、釜・家財を遣候得は、農具を願ひ、農具を遣候得は、家・小屋・田畑を願ひ、家・小屋・田畑を遣候得は牛馬を願ふ、大体暮し方可也取付候者は、數年致屈身居候野心を發し、驕奢ニ流れ致借財、如元困窮ニ陥り、又或ハ

穀物取纏ひ逃去候も有之、凡拾軒取立、漸老式軒も相残り可申哉、種々様々手違ひ、何分見込通りニハ押立不申候、大業全く村柄取直し致相続度志願ニ候哉、実ハ困窮難渋ニ差詰り、当座凌迄ニ候哉、何分虚実稔と相分り不申候間、詰り成就不成就之誠意を相試置申度候、弥荒地起返し村柄取直し無難ニ致相続度志願ニ候ハ、先ツは村高何百何拾石、田畑反別何拾何町歩、家数何拾何軒、人別何百何拾人、牛馬何疋、猶又古しへ繁栄仕罷在候節、収納米永小物成共何程、其外神事・祭礼・仏事・追善・吉凶・暮方村柄之模様委鋪承り糺し、当節荒田畑反別何町何反歩潰、百姓何拾何軒相除、生田畑反別何町何反歩潰、残百姓何拾軒、人別何百何拾人、牛馬何疋、當時収納米永小物成共、都合何程其外、老軒ニ付田畑何町何反歩作り立、凡取穀何程位と取調、古今ニ引合盛衰を相試申度候、扱又其村方連も前々致困窮居候儀ニ付、定而極難貧者安逸無頼之者暮方ニ差詰り、相互ニ利欲を争ひ終ニ左迄も無之、年柄夫々次第を設ケ、検見用捨を願

立、徒ニ手間隙を費し耕し耘りハ不及申、肥灰手入不行届、取穀相減致困窮艱難ニ陥り候儀ニ付、願くハ過去り候年数凡拾ケ年も米永小物成共、微細ニ取調、致平均村柄取直し、仕法年限中は、天命自然之分度を探り為定則残荒地之儀は神代之昔を思ひ、今般被 仰出候荒地起返し御仕法金老両、当卯孝行奇特人入札老番札伊右衛門江相渡、荒地老反歩切起、作立米老石取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加米五斗相納、辰年耕作出精人入札老番札六右衛門江相渡、荒地五畝歩切起、作立米五斗取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加式斗五升相納猶去卯起返田冥加米共都合七斗五升、巳年出精人老番札半兵衛江相渡、荒地七畝拾五歩切起、作立米七斗五升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三斗七升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合老石老斗式升五合、午年出精人老番札仁右衛門江相渡、荒地老反老畝八歩切起作立米老石老斗式升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加五斗六升四合相納、猶前々起返田冥加米共都

合石六斗八升九合、未年出精人粍番札保之助江相渡、荒地粍反六畝廿七步切起、作立米粍石六斗九升取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加八斗四升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合式石五斗三升四合、申年出精人粍番札平右衛門江相渡、荒地式反五畝拾步切起、作立米式石五斗三升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加石式斗六升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合三石八斗粍合、酉年出精人粍番札差右衛門江相渡、荒地三反八畝步切起、作立米三石八斗取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加石九斗相納、猶前々起返田冥加米共都合五石七斗粍合、戌年出精人粍番札千代松江相渡、荒地五反七畝步切起、作立米五石七斗取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加式石八斗五升相納、猶前々起返田冥加米共都合八石五斗五升粍合、亥年出精人粍番札利右衛門江相渡、荒地八反五畝拾五步切起、作立米八石五斗五升取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加四石式斗七升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合拾

式石八斗式升六合、子年出精人粍番札縫右衛門江相渡、荒地粍町式反八畝八步切起、作立米拾式石八斗式升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加六石四斗粍升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合拾九石式斗四升、丑年出精人粍番札類右衛門江相渡、荒地粍町九反式畝拾式步切起、作立米拾九石式斗四升取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加九石六斗式升相納、猶前々起返田冥加米共都合式拾八石八斗六升之内、去卯起返田年明立辰米五斗引、殘米式拾八石三斗六升、寅年出精人粍番札斧右衛門江相渡、荒地式町八反三畝拾八步切起、作立米式拾八石三斗六升取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加拾四石粍斗八升相納、猶前々起返田冥加米共都合四拾式石五斗四升之内、去辰起返田年明立辰米式斗五升引、殘米四拾式石式斗九升、卯年出精人粍番札和兵衛江相渡、荒地四町式反式畝廿七步切起、米四拾式石九升取増、其半を以一家暮方相整候、為報德冥加式拾粍石粍斗四升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合六拾三石四

斗三升五合之内、去ル已起返田年明立戻米三斗七升五合引、残米六拾三石六升、辰年出精人耆番札嘉右衛門江相渡、荒地六町三反拾八步切起、作立米六拾三石六升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三拾壹石五斗三升相納、猶前々起返田冥加米共都合九拾四石五斗九升之内、去ル午起返田年明立戻米五斗六升四合引、残米九拾四石貳斗六合、巳年出精人耆番札与右衛門江相渡、荒地九町四反八步切起、作立米九拾四石貳升七合取増、其半を以一家暮方相整、為報徳冥加四拾七石壹升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合百四拾壹石四升之内、去ル未起返田年明立戻り米八斗八升五合引、残米百四拾石壹斗九升五合、午年出精人耆番札為右衛門江相渡、荒地拾四町壹畝廿九步切起、作立米百四拾石壹斗九升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加七拾石九升九合相納、猶前々起返田冥加米共都合貳百拾石貳斗九升四合之内、去ル申起返田年明立戻石貳斗六升七合引、残米貳百九石貳升七合、未年出精人耆番札連之助江相渡、荒地

貳拾町九反八步切起、作立米貳百九石貳升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加百四石五斗壹升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合三百拾三石五斗四升壹合之内、去ル酉起返田年明立戻米壹石九斗引、残米三百拾壹石六斗四升壹合、申年出精人耆番札曾右衛門江相渡荒地三拾壹町壹反六畝拾貳步切起、作立米三百拾壹石六斗取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加百五拾五石八斗貳升相納、猶前々起返田冥加米共都合四百六拾四石四斗六升壹合之内、去ル戌起返田年明立戻米貳石八斗五升引、残米四百六拾四石六斗壹升壹合、酉年出精人耆番札常右衛門江相渡、荒地四拾六町四反六畝三步切起、作立米四百六拾四石六斗壹升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加米貳百三拾貳石三斗五合相納、猶前々起返田冥加米共都合六百九拾六石九斗壹升六合之内、去ル亥起返田年明立戻米四石貳斗七升五合引、残米六百九拾貳石六斗四升壹合、戌年出精人耆番札根之助江相渡、荒地六拾九町貳反六畝拾貳步切起、作立米六百九拾貳石六

斗四升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三百四拾六石三斗式升相納、猶前々起返田冥加米共都合千三拾八石九斗六升壹合之内、去ル子起返田年明立戻り米六石四斗壹升四合引、残米千三拾式石五斗四升七合、亥年出精人老番仲右衛門江相渡、荒地百三町式反五畝拾四步切起、作立米千三拾式石五斗四升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加五百拾六石式斗七升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合千五百四拾八石八斗式升壹合之内、去ル丑起返田年明立戻米九石六斗式升引、残米千五百三拾九石式斗壹合、子年出精人老番札来三郎江相渡荒地百五拾三町九反式畝步切起、作立米千五百三拾九石式斗取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加七百六拾九石六斗相納、猶前々起返田冥加米共都合式千三百八石八斗壹合之内、去ル寅起返田年明立戻米拾四石壹斗八升引、残米式千式百九拾四石六斗式升壹合、丑年出精人老番札村右衛門江相渡、荒地式百式拾九町四反六畝六步切起、作立米式千式百九拾四石六斗式升取増、其半を以

一家暮方相整候、為報徳冥加千百四拾七石三斗壹升相納、猶前々起返田冥加米共都合三千四百四拾壹石九斗三升壹合之内、去ル卯起返田年明立戻米式拾壹石壹斗四升五合引、残米三千四百式拾石七斗八升六合、寅年出精人老番札字之助江相渡、荒地三百四拾式町七畝廿六步切起、作立米三千四百式拾石七斗八升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加千七百拾石三斗九升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合五千百三拾壹石壹斗八升之内、去ル辰起返田年明立戻米三拾壹石五斗三升引、残米五千九拾九石六斗五升、卯年出精人老番札野之松江相渡、荒地五百九町九反六畝拾五步切起、作立米五千九拾九石六斗五升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加式千五百四拾九石八斗式升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合七千六百四拾九石四斗七升五合之内、去ル巳起返田年明立戻米四拾七石壹斗四合引、残米七千六百式石四斗六升壹合、辰年出精人老番札国右衛門江相渡、荒地七百六拾町式反四畝拾八步切起、作立米七千六百式石四斗六

升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三千八百
石式斗三升相納、猶前々起返田冥加米共都合壹万四千
百三石六斗九升壹合之内、去ル午起返田年明立戻米七拾
石九升九合引、殘米壹万三千三百三拾三石五斗九升式合、
巳年出精人壹番札弥兵衛江相渡、荒地千百三拾三町三反
五畝廿八步切起、作立米壹万三千三百三拾三石五斗九升三
合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加五千六百
六拾六石七斗九升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合
壹万七千石三斗八升九合之内、去ル未起返田年明立戻米
百四石五斗壹升四合引、殘米壹万六千八百九拾五石八斗
七升五合、午年出精人壹番札政右衛門江相渡、荒地千六
百八拾九町五反八畝廿三步切起、作立米壹万六千八百九
拾五石八斗七升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為
報徳冥加八千四百四拾七石九斗三升九合相納、猶前々起
返田冥加米共都合式万五千三百四拾三石八斗壹升四合之
内、去ル申起返田年明立戻米百五拾五石八斗式升引、殘
米式万五千百八拾七石九斗九升四合、未年出精人壹番札

啓三郎江相渡、荒地式千五百拾八町七反八畝廿八步切起、
作立米式万五千百八拾七石九斗九升三合取増、其半を以
一家暮方相整候、為報徳冥加壹万式千五百九拾三石九斗
九升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合三万七千七百
八拾壹石九斗九升壹合之内、去ル酉起返田年明立戻米式
百三拾式石三斗五合引、殘米三万七千五百四拾九石六斗
八升六合、申年出精人壹番札福太郎江相渡、荒地三千七
百五拾四町九反六畝廿六步切起、作立米三万七千五百四
拾九石六斗八升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為
報徳冥加壹万八千七百七拾四石八斗四升四合相納、猶前
々起返田冥加米共都合五万六千三百式拾四石五斗三升之
内、去ル戌起返田年明立戻米三百四拾六石三斗式升引、
殘米五万五千九百七拾八石式斗壹升、酉年出精人壹番札
駒右衛門江相渡、荒地五千五百九拾七町八反式畝三步切
起、作立米五万五千九百七拾八石式斗壹升取増、其半を
以一家暮方相整候、為報徳冥加式万七千九百八拾九石壹
斗五合相納、猶前々起返田冥加米共都合八万三千九百六

拾七石三斗壹升五合之内、去ル亥起返田年明立戻米五百
拾六石貳斗七升四合引、殘米八万三千四百五拾壹石四升
壹合、戌年出精人壹番札榮次郎江相渡、荒地八千三百四拾
五町壹反拾貳步切起、作立米八万三千四百五拾壹石四升
取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加四万七千七百
貳拾五石五斗貳升相納、猶前々起返田冥加米共都合拾貳
万五千七百七拾六石五斗六升壹合之内、去ル子起返田年明
立戻米七百六拾九石六斗引、殘米拾貳万四千四百六石九
斗六升壹合、亥年出精人壹番札鉄之助江相渡、荒地壹万
二千四百四拾町六反九畝拾八步切起、作立米拾貳万四千
四百六石九斗六升取増、其半を以一家暮方相整候、為報
徳冥加六万貳千貳百三十三石四斗八升相納、猶前々起返田冥
加米共都合拾八万六千六百拾石四斗四升壹合之内、去ル
巳起返田年明立戻米千四百四拾七石三斗壹升引、殘米拾八
万五千四百六拾三石壹斗三升壹合、子年出精人壹番札淺
右衛門江相渡、荒地壹万八千五百四拾六町三反壹畝九步
切起、作立米拾八万五千四百六拾三石壹斗三升取増、其

半を以一家暮方相整候、為報徳冥加九万貳千七百三拾壹
石五斗六升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合拾七
万八千九拾四石六斗九升六合之内、去ル寅年起返田年
明立戻米千七百拾石三斗九升四合引、殘米貳拾七万六千
四百八拾四石三斗貳合、丑年出精人壹番札佐兵衛江相渡、
荒地貳万七千六百四拾八町四反三畝壹步切起、作立米貳
拾七万六千四百八拾四石三斗三合取増、其半を以一家暮
方相整候、為報徳冥加拾三万八千貳百四拾貳石壹斗五升
貳合相納、猶前々起返田冥加米共都合四拾壹万四千七百
貳拾六石四斗五升四合之内、去ル卯起返田年明立戻米貳
千五百四拾石八斗貳升五合引、殘米四拾壹万貳千七百七拾
六石六斗貳升九合、寅年出精人壹番札喜右衛門江相渡、
荒地四万千貳百拾七町六反六畝九步切起、作立米四拾壹
万貳千七百七拾六石六斗三升取増、其半を以一家暮方相整
候、為報徳冥加貳拾万六千八拾八石三斗壹升五合相納、
猶前々起返田冥加米共都合六拾壹万八千貳百六拾四石九
斗四升四合之内、去ル辰起返田年明立戻米三千八百壹石

式斗三升引、残米六拾壹万四千四百六拾三石七斗壹升四合、卯年出精人老番札勇右衛門江相渡、荒地六万四千四百六拾六町三反七畝四步切起、作立米六拾壹万四千四百六拾三石七斗壹升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三拾万七千式百三拾壹石八斗五升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合九拾貳万千六百九拾五石五斗七升壹合之内、去ル已起返田年明立戻米五千六百六拾六石七斗九升七合引、残米九拾壹万六千式拾八石七斗七升四合、辰年出精人老番札食之助江相渡、荒地九万千六百貳町八反七畝廿式步切起、作立米九拾壹万六千式拾八石七斗七升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加四拾五万八千拾四石三斗八升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合百三拾七万四千四拾三石壹斗六升壹合之内、去ル午起返田年明立戻米八千四百四拾七石九斗三升九合引、残米百三拾六万五千五百九拾五石貳斗貳升貳合、巳年出精人老番札皆右衛門江相渡、荒地拾三万六千五百五拾九町五反貳畝七步切起、作立米百三拾六万五千五百九拾五

石式斗貳升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加六拾八万貳千七百九拾七石六斗壹升貳合相納、猶前々起返田冥加米共都合貳百四万八千三百九拾貳石八斗三升四合之内、去ル未起返田年明立戻米壹万貳千九百九拾三石九斗九升七合引、残米貳百三万五千七百九拾八石八斗三升七合、午年出精人老番札篠右衛門江相渡、荒地貳拾万三千五百七拾九町八反八畝拾壹步切起、作立米貳百三万五千七百九拾八石八斗三升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加百壹万七千八百九拾九石四斗壹升九合相納、猶前々起返田冥加米共都合三百五万三千六百九石貳斗五升六合之内、去ル申起返田年明立戻米壹万八千七百七拾四石八斗四升四合引、残米三百三万四千九百貳拾三石四斗壹升貳合、未年出精人老番札秀之助江相渡、荒地三拾万三千四百九拾貳町三反四畝四步切起、作立米三百三万四千九百貳拾三石四斗壹升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加百五拾壹万七千四百六拾壹石七斗七合相納、猶前々起返田冥加米共都合四百五

拾五万貳千三百八拾五石一斗一升九合之内、去ル酉起返
田年明立戻米貳万七千九百八拾九石壹斗五合引、殘米四
百五拾貳万四千三百九拾六石壹升四合、申年出精人壹番
札茂右衛門江相渡、荒地四拾五万貳千四百三拾九町六反
四步切起、作立米四百五拾貳万四千三百九拾六石壹升三
合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加貳百貳拾
六万貳千九百九拾八石七合相納、前々起返田冥加米共都合
六百七拾八万六千五百九拾四石貳升壹合之内、去ル戌起
返田年明立戻米四万七千七百貳拾五石五斗貳升引、殘米六
百七拾四万四千八百六拾八石五斗壹合、酉年出精人壹番
札清兵衛江相渡、荒地六拾七万四千四百八拾六町八反五
畝步切起、作立米六百七拾四万四千八百六拾八石五斗取
増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三百三拾七万
貳千四百三拾四石貳斗五升相納、猶前々起返田冥加米共
都合千拾壹万七千三百貳石七斗五升壹合之内、去ル亥起
返田年明立戻米六万貳千貳百三十三石四斗八升引、殘米千五
万五千九拾九石貳斗七升壹合、戌年出精人壹番札須磨石

衛門江相渡、荒地百万五千五百九拾九反貳畝廿壹步切起、
作立米千五百五十九拾九石貳斗七升取増、其半を以一家
暮方相整候、為報徳冥加五百貳万七千五百四拾九石六斗
三升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合千五百八万貳
千六百四拾八石九斗六合之内、去ル子起返田年明立戻米
九万貳千七百三拾壹石五斗六升五合引、殘米千四百九拾
八万九千九百九拾七石三斗四升壹合、亥年出精人壹番札京
右衛門江相渡、荒地百四拾九万八千九百九拾壹町七反三
畝拾貳步切起、作立米千四百九拾八万九千九百九拾七石三
斗四升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加七百
四拾九万四千九百五拾八石六斗七升相納、猶前々起返田
冥加米共都合貳千貳百四拾八万四千八百七拾六石壹升壹
合之内、去ル丑起返田年明立戻米拾三万八千貳百四拾貳
石壹斗五升貳合引、殘米貳千貳百三拾四万六千六百三拾
三石八斗五升九合、子年出精人壹番札市太郎江相渡、荒
地貳百廿三万四千六百六拾三町八反八畝拾八步切起、作
立米貳千貳百三拾四万六千六百三拾三石八斗六升取増、

其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加千百拾七万三千三百拾六石九斗三升相納、猶前々起返田冥加米共都合三千三百五拾壹万九千九百五拾石七斗八升九合之内、去ル寅年起返田年明立戻米式拾六千八百八拾八石三斗壹升五合引、(万貳九)残米三千三百三拾壹万三千八百六拾式石四斗七升四合、丑年出精人壹番札仁三郎江相渡、荒地三百三拾三万三千三百八拾六町式反四畝式拾式步切起、作立米三千三百三拾壹万三千八百六拾式石四斗七升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加千六百六拾五万六千九百三拾壹石式斗三升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合四千九百九拾七万七千九拾三石七斗壹升壹合之内、去ル卯起返田年明立戻米三拾万七千式百三拾壹石八斗五升七合引、残米四千九百六拾六万三千五百六拾壹石八斗五升四合、寅年出精人壹番札三右衛門江相渡、荒地四百九拾六万六千三百五拾六町壹反八畝拾六步切起、作立米四千九百六拾六万三千五百六拾壹石八斗五升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加式千四百八拾三万七千七百八拾

石九斗式升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合七千四百四拾九万五千三百四拾式石七斗八升壹合之内、去ル辰年起返田年明立戻米四拾五万八千拾四石三斗八升引、残米七千四百三万七千三百式拾八石三斗九升四合、卯年出精人壹番札四郎兵衛江相渡、荒地七百四拾万三千七百三拾式町八反三畝廿八步切起、作立米七千四百三万七千三百式拾八石三斗九升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加三千七百壹万八千六百六拾四石壹斗九升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合壹億千五百五千九百九拾式石五斗九升壹合之内、去ル巳起返田年明立戻米六拾八万式千七百九拾七石六斗壹升式合引、残米壹億千三百拾七万三千九百九拾四石九斗七升九合、辰年出精人壹番札五右衛門江相渡、荒地千百三万七千三百拾九町四反九畝廿四步切起、作立米壹億千三拾七万三千九百九拾四石九斗八升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加五千五百拾八万六千五百九拾七石四斗九升相納、猶前々起返田冥加米共都合壹億六千五百五拾五万九千七百九拾式石四

斗六升九合之内、去ル午起返田年明立戻米百壹万七千八百九拾九石四斗壹升九合引、残米壹億六千四百五拾四万千八百九拾三石五升、巳年出精人壹番札六兵衛江相渡、荒地千六百四拾五万四千八百九拾九町三反拾五步切起、作立米壹億六千四百五拾四万千八百九拾三石五升取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加八千貳百貳拾七万九百四拾六石五斗貳升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合貳億貳千六百八拾壹万貳千八百三拾九石五斗七升五合之内、去ル未起返田年明立戻米五拾壹万七千四百六拾壹石七斗七合引、残米貳億四千五百貳拾九万五千三百七拾七石八斗六升八合、午年出精人壹番札七右衛門江相渡、荒地貳千四百五拾貳万九千五百三拾七町八反八畝廿步切起、作立米貳億四千五百貳拾九万五千三百七拾七石八斗六升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加壹億貳千貳百六拾四万七千六百八拾八石九斗壹升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合三億六千七百九拾四万三千六百六拾六石八斗貳合之内、去ル申起返田年明立戻米貳百貳拾

六万貳千九百九拾八石七合引、残米三億六千五百六拾八万八百六拾八石七斗九升五合、未年出精人壹番札八右衛門江相渡、荒地三千六百五拾六万八千八拾六町八反七畝廿九步切起、作立米三億六千五百六拾八万八百六拾八石七斗九升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加壹億八千貳百八拾四万四百三拾四石三斗九升九合相納、猶前々起返田冥加米共都合五億四千八百五拾貳万三千三百三石壹斗九升四合之内、去ル酉起返田年明立戻米三百三拾七万貳千四百三拾四石貳斗五升引、残米五億四千五百拾四万八千八百六拾八石九斗四升四合、申年出精人壹番札九右衛門江相渡、荒地五千四百五拾壹万四千八百八拾六町八反九畝拾三步切起、作立米五億四千五百拾四万八千八百六拾八石九斗四升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加貳億七千貳百五拾七万四千四百三拾四石四斗七升貳合相納、猶前々起返田冥加米共都合八億千七百七拾貳万三千三百三石四斗壹升六合之内、去ル戌起返田年明立戻五百貳万七千五百四拾九石六斗三升五合引、

(采納也)

殘米八億千貳百六拾九万五千七百五拾三石七斗八升壹合
 酉年出精人粍番札十兵衛江相渡、荒地八千百貳拾六万九
 千五百七拾五町三反七畝廿四步切起、作立米八億千貳百
 六拾九万五千七百五拾三石七斗八升取増、其半を以一家
 暮方相整候、為報徳冥加四億六百三拾四万七千八百七拾
 六石八斗九升相納、猶前々起返田冥加米共都合拾貳億千
 九百四万三千六百三拾石六斗七升壹合之内、去ル亥起返
 田年明立戻米七百四拾九万四千九百五拾八石六斗七升引
 殘米拾貳億千五百五拾四万八千六百七拾貳石壹合、戌年出
 精人粍番札百右衛門江相渡、荒地粍億貳千百拾五万四千
 八百六拾七町貳反步切起、作立米拾貳億千五百五拾四万八
 千六百七拾貳石取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳
 冥加六億五百七拾七万四千三百三拾六石相納、猶前々起
 返田冥加米共都合拾八億千七百三拾貳万三千八百石壹合之
 内、去ル子起返田年明立戻米千拾七万三千三百拾六石九
 斗三升引、殘米拾八億六百拾四万九千六百九拾壹石七升
 壹合、亥年出精人粍番札千右衛門江相渡、荒地粍億八千

六拾壹万四千九百六拾九町壹反廿壹步切起、作立米拾八
 億六百拾四万九千六百九拾壹石七升取増、其半を以一家
 暮方相整候、為報徳冥加九億三百七石四^{方カ}千八百四拾五石
 五斗三升五合相納、猶前々起返田冥加米共都合拾七億
 九百貳拾貳万四千五百三拾六石六斗六合之内、去ル丑起
 返田年明立戻米千六百六拾五万六千九百三拾壹石貳斗三
 升七合引、殘米拾六億九千貳百五拾六万七千六百五石
 三斗六升九合、子年出精人粍番札万兵衛江相渡、荒地貳億
 六千九百貳拾五万六千七百六拾町五反三畝廿壹步切起、
 作立米拾六億九千貳百五拾六万七千六百五石三斗七升
 取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加拾三億四千
 六百貳拾八万三千八百貳石六斗九升五合相納、猶前々起
 返田冥加米共都合四拾億三千八百八拾五万四千四百八石五
 升四合之内、去ル寅起返田年明立戻米貳千四百八拾三万
 千七百八拾石九斗貳升七合引、殘米四拾億千四百壹万九
 千六百貳拾七石壹斗貳升七合、丑年出精人粍番札億右衛
 門江相渡、荒地四億百四拾万九千九百六拾貳町七反壹畝八

歩切起、作立米四拾億千四百壹万九千六百貳拾七石壹斗貳升七合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加貳拾億七百万九千八百拾三石五斗六升四合相納、猶前々起返田冥加米共都合六拾億貳千貳万九千四百四拾石六斗九升壹合之内、去ル卯起返田年明立戻米三千七百壹万八千六百六拾四石壹斗九升七合引、残米五拾九億八千四百壹万七百七拾六石四斗四升四合、寅年出精人壹番札兆之助江相渡、荒地五億九千八百四拾万七千七拾七町六反四畝廿八歩切起、作立米五拾九億八千四百壹万七百七拾六石四斗九升三合取増、其半を以一家暮方相整候、為報徳冥加貳拾九億九千貳万五千三百八拾八石貳斗四升七合相納、猶前々起返田冥加米共都合八拾九億七千六百壹万六千六百六拾四石七斗四升壹合之内、去ル辰起返田年明立戻米五千五百拾八万六千五百九拾七石四斗九升引、残米八拾九億貳千八拾貳万九千五百六拾七石貳斗五升壹合取増候、荒地之儀は、其村方前々度々天災・凶荒・水・火・病難不仕合之砌、荒地に罷成り、葭葦・真菰・萱・茅其外棘茨葛藤

等年々生立枯果、野火付致焼失居候、荒地御仕法金壹兩を種として、去ル乙卯年より今甲寅年迄六十ヶ年之間、前条之通徳を以徳に報ひ相互ニ助合申候ハ、荒地起返田惣反別合拾八億千七百六拾九万貳千六百八拾貳町七反三畝廿八歩、六十一ヶ年目より仕法引受世話方浮徳米七百貳拾七億七百七拾万七千三百拾石六斗九升九合、案外之利益を生し、内外致潤沢一同相助り可申候、然といへとも眼前賃金少く身勝手悪しきハ発田広く永久村為多し、又眼前賃金多く身勝手善きハ発田狭く永久村為少し、一村之盛衰ハ財用得失之先後ニあり、斯の如く荒地一度起返セハ耕地となり、耕地一度変すれハ米麦雜穀生して民命を養ひ、其徳に報ひハ前条之通り荒地耕地となり、或ハ遠山之神社近隣之鎮守氏神等江献納いたセハ、社人天下泰平、国土安穩、五穀成就之致祈念、又或ハ堂寺江致献納、僧侶三世之菩提を吊ひ、又或ハ父母妻子眷屬を養ひ、其外乞食・非人・牛馬・鶏犬ニ至迄、凡其村方ニ生育するもの、飢て食ひ渴して飲、寒て衣、生々世々身命

を養ひ相助り居候、大徳小前末々ニ至てハ、譬ハ魚の水ニ住て水を知らざるか如く、朝より夕迄田に出畑に出、其外山川迄も馳集り、寸暇なく相営罷在候間、其身々々之勤農ニ勞れ、又或は今日の暮方ニ差迫居候間、寝ても覚ても利用を貪り其身を安する事のミに心を尽し居候間終自然と田畑手入不行届籠作に罷成、取穀相減し致困窮家数人別次第ニ相減し、荒地と罷成申候哉ニ付、今般格別之以 御仁恵人民御救之為、荒地起返米麦取増方仕法付見込之趣委鋪可奉申上旨被 仰付候、難有 御趣意之届と不届とは荒地起返仕法付雛形組立方之先後順逆に依て、詰り一村一家之興廃ニも相拘り可申哉と不輕大業、突以奉恐入候、夫迎も別ニ相企候手段も無之、止て止め難く延て延難く、いつの昔より今日ニ至迄、家毎銘々作り立相営居候田畑之大徳を明細積り立速ニ相頭し、地主家主之儀は勿論、老若男女、大小人其外、無田地借店借日雇出稼惣而村方ニ立入候者一同 御趣意を吞込易く、荒地尅反歩起返賃金尅両、取穀上中下平均取米尅石と見積り

極難貧者暮方立直り候迄、畝下作取右同断、取米尅石之内作徳米九斗相除、残米尅斗一家暮方相統相整候、報徳冥加米を以、去ル乙卯より甲寅迄六拾ヶ年之間年々繰返中勘組立、猶又右同断、取米尅石之内作徳米八斗相除、残米式斗報徳冥加米を以右同断、猶又取米尅石之内、作徳米七斗相除、残米三斗報徳冥加米を以右同断、猶又取米尅石之内作徳米六斗相除、残米四斗報徳冥加米を以右同断、猶又取米尅石之内作徳米五斗相除、残米五斗報徳冥加米を以右同断、大村・小村、大家・小家ニ限らず一村一家一分之荒地起返方仕法付六段ニ組立、其外自力ニ及兼候起返方歎談之輩有之時、荒地引受起返賃金尅両より六両迄、重きハ畝下三拾ヶ年季、軽きハ式拾ヶ年季、当荒之儀は拾ヶ年季、都合拾八段ニ前条之通明細取調、尅畝尅歩ツ、も多く起返方為致精勤申度、幾度も繰返し雛形組立申候間、荒地起返方致難渋居候面々、一村一家何れも長頭立候者支配は勿論、親先祖より伝受たる家株田畑委數相改、生地を相除残荒高反別微細ニ取調、天命

自然之分度を探り定則を立置候へ、其余は土地と民力之積徳ニ依て、荒地之広狭又ハ浅深に不拘、今般被仰出候荒地起返仕法付雛形ニ基、御仕法金致拝借、多少ニ限相企置申候へ、荒地ハ荒地之徳沢ニ而いつの昔より今日ニ至迄、自然と相開ケ来候、同様其村方而已ニ限、何方迄も起返り候雛形之儀ニ付、見るもの不執行事なく、聞もの不執行事なく、況恩沢を蒙候もの猶以不執行事なく、且自力に難執行者迄、早魃ニ雨を降すか如く、又暗夜に燈を得たる如く、弥相励致精勤可申候間、其精力ニ任せ荒地起返米穀取増、暮方取直遣申度候、扱又今般格別之以 御仁恵、荒地起返方仕法付見込之趣委敷可奉申上旨、被 仰付、難有と申も恐多く、難有儀は是迄凡四拾有余年之間、日夜心魂を尽し居候米穀取増方之儀ニ付、不奉願恐正業取扱来候通、有体取調雛形組立奉候、其発端之儀は我等五歳之時、寛政三亥年大洪水之砌、所持之田畑不残致流失土砂を押込、米穀不実法、兄弟為養育父母之丹精心魂ニ徹し居候処、拾貳歳之時より父大

病相煩致全快兼、終ニ拾四歳之時致死去、如何して口腹を養ひ露命を繋ぎ、如何して相続可致哉と十方ニ暮致歎息居候所、猶又拾六歳之時、母大病相煩致死去、同年六月洪水之砌、帰発田畑不残致流失荒地と相成、渡世ニ差詰り親類縁者之助成ニ預り居候所、居屋敷廻り用水堀流失之砌、土地致変化不用ニ相成候間、休日搔ならし、捨苗を集め植付候処、米考俵余産出候、其実法を種として猶又荒地起返し植付、甚潤沢を以年々繰返し起返し、質地田畑受戻し又ハ買請、追々其潤沢を以一家相続相整申度、自己之身勝手而已一途ニ相励居候処、去ル文政元寅年大久保故加賀守殿在城之砌、兼々農業精出し心掛宜鋪趣相聞、尤人々次第は有之候得共、能キ儀ニ而普置と直段被申渡、猶以致励勤居候所、同四巳年分家宇津家知行所連々人少致困窮、田畑手余り、或ハ逃去り、又ハ死潰退転亡所同様罷成、起返方術計尽果、無余儀趣を以、荒地起返方見分被申付候ニ付、致廻村及見聞候次第有体申達候処、翌午年より荒地起返入百姓人別増、窮民撫育

借財返済、暮方取直、旧復永安之仕法存分可取計旨被相
 任候得共、不容易大業ニ付達而致辭退候所、猶又別段理
 解を以押而被申付候ニ付、自己一家一分之妻子を養ひ、
 安楽自在を願ひ求るより、其命ニ従ひ、数年退転亡所同
 様罷成居り候荒地起返し、米麦取増貧窮を救ひ、潰百姓
 老軒ツ、も取遣候方、若哉孝道ニも相当り可申哉と致憤
 発、乍聊身代限り売捌致持參彼地江引移候処、何一ツ目
 当無之候ニ付、前々相営來候米・麦・雜穀・野菜等作出
 ず耕作之仕方、又或は親之子を養ひ育る両道ニ基き、凡
 忒拾有余之間、年々繰返し取立遣候所、天なる哉案外人
 氣相進、荒地荒増起返り、戸数人別次第ニ相増、冥加米
 永発年ニ倍し候段及見聞、近郷近村より夫々伝手を以荒
 地起返し、窮民撫育、借財返済、暮方取直仕法無余儀趣
 を以歎願有之、殊ニ大久保故加賀守殿極難村々取直之為
 無利足金貸付之仕法引移、存分可取扱旨被申付、其砌手
 元金千両被相下、其外口々被相任、且又一昨卯年迄御伺
 も相済居候諸家方同様被相頼候得共、仕法向繁多ニ付何

分世話難行届段、其時々堅く相断申候処、不得止事一向
 歎談ニ付、数年自己之難決を思ひ出し、夫々雛形組立、
 米金有合次第無利足ニ而貸付、任歎願荒地起返し、米穀
 取増方仕法取行候処、是又追々暮方立直り候者も有之、
 報徳冥加之為相納候米金其假繰返し貸付、年々荒地起返
 し人命を養ひ候、其発端僅老悽より起り、雛形之通最早
 幾千万倍ニ及び、殊ニ無利足之儀ニ付早々不残取纏、其
 村方ニも不限、御料所之内手ニ足候仕業を奉窺、不苦儀
 ニ候ハ、亡所変して産出候米金之儀ニ付不残遣払候共
 何致一廉奉勤仕候ハ、数年一同之丹精も相願れ可申候得
 共、何分小田原以來之振合ニ難取計儀は兼而銘々承知之
 通、何れも荒地起返米麦取増方術計尽果、無余儀趣を以
 相慕被及歎願、其誠意難黙止、仕掛取乱置仕法最中之儀
 ニ付、如何様共御用透を見合取直遣申度候得共、彼是取
 紛居候而は御奉公ニ相障り可申哉も難計、懸念至極奉恐
 入候ニ付、夫共寅年已來御伺も相済居候、不容易難村取
 直之儀ニ付、発願之通仕法向差支無之様致度、追々繰入

置候米金共其假不残相任置、是迄取扱来候仕方向迄雛形
組立奉伺候間、不苦儀ニ候ハ、其村方儀は不及申、仕
掛取乱置候村々一同、我等幼年之昔ニ立戻候心得ニ罷成、
御趣意ニ基キ荒地屯敵屯歩ツ、も切起為作立、其作徳米
金無利足ニ而貸付、一家一村ツ、茂年々繰返し暮し方取
直遣候ハ、其村方而已ニあらず、追々雛形之通荒地起
返り、米穀産出し、暮方立直り 御趣意も押立、詰り是
迄之振合共違ハ

御神領村々より産出候米穀、仮令一粒たり共祈祷洗米之
如く難有奉拜借、何方迄も起返り可申候、

右は今般格別之以 御仁恵、日光

御神領村々荒地起返方仕法付見込之趣、委鋪可奉申上旨
被 仰付、不奉願恐、是迄取扱来候仕方有体取調、雛形
組立奉伺候間、不苦儀ニ御座候ハ、御神領而已ニ不限
雛形之通追々何方迄も荒地起返り、米穀産出、其余徳を
以内外致潤沢、暮方立直り、貧窮之憂を免れ、万代不朽
莫太之 御仁恵と重々冥加至極難有仕合奉存候、此段書

取奉申上候、以上、

弘化乙巳年五月

御普請役格

二宮金次郎

冊子原寸 縦二七・五糎 横一九・九糎 五三枚

二三 外舶来航ニ付海防ニ関スル幕府ヘノ朝命
付京、伏見、大坂、堺警備ニ付幕府ノ手当

二二通

(包紙ウツ書)
一勅命

御奉書写」

弘化三年八月武伝両卿より所司代役亭迄御行向如

左御達、

近年異国船時々相見候趣風説内々被

聞召候、雖然文道能修武事全整候御時節、殊ニ海辺防禦

等堅固之旨被

聞召、

御安慮ニ候得共、近頃其風聞屢彼是被為懸

観念候、乍此上武門之面々洋蛮之事不侮小虜、不畏大賊

宜籌策有之、神州之瑕瑾無之様、精々御指揮ニ而弥可

被安

宸襟候、此段宜有御沙汰候事、

弘化丁未五月廿三日(真本和泉)

草莽臣平保臣謹写

文書原寸 縦一七・九糎

包紙原寸 縦三六・五糎

横三七・六糎

横三八・六糎

二四 鹿兒島ニ於ケル大砲取調数

(米)「三挺出来」
一百五十目野戰砲耆挺

御入目料式拾耆兩位

(米)「三拾挺出来」
一式百目右同耆挺

同式拾九兩三步式朱位

(米)「式拾丁」
一右同輕砲耆挺

同式拾八兩三步位

(米)「八挺」
一三百目野戰砲耆挺

同三拾九兩位

(米)「八拾五丁」
一五百目右同耆挺

同五拾八兩三步位

(米)「四拾五丁」
一七百目右同耆挺

同七拾八兩式步式朱位

(米)「式拾耆挺」
一六封度加農耆挺

同百式拾耆兩位

(米)「式拾丁」
一十式封度右同耆挺

同式百九兩位

(米)「式拾丁」
一十八封度右同耆挺

同式百九拾七兩位

(米)「式丁」
一十三撥忽砲耆挺

同六拾九兩位

(朱)「拾八丁」
一十五搦右同尅挺

同百貳拾七兩位

(朱)「拾壹丁」
一五拾封度旧砲尅挺

同貳百六拾五兩位

(朱)「三拾壹丁」
一六封度一耳砲尅挺

同五拾四兩貳步位

(朱)「四拾壹丁」
一二十搦旧砲尅挺

同六拾七兩位

(朱)「貳拾丁」
一十貳封度一耳砲尅挺

同八拾八兩三步位

(朱)「拾貳丁」
一二十四封度長加農尅挺

同五百貳拾五兩位

(朱)「貳拾丁」
一右同短加農尅挺

同三百貳拾壹兩位

(朱)「六丁」
一八十封度盆籠加農尅挺

同五百兩位

(朱)「拾五丁」
一三十六封度右同尅挺

同貳百三拾六兩位

(朱)「六丁」
一百五十封度右同尅挺

同八百拾六兩位

(朱)「貳丁」
一二十搦忽砲尅挺

同百八拾貳兩位

(朱)「拾九丁」
一十二搦長忽砲尅挺

同七拾兩位

(朱)「貳拾七丁」
一自在砲尅挺

同貳拾三兩位

(朱)「六丁」
一携旧砲尅挺

同八兩位

(朱)「三拾六挺」
一六百日山戰砲耆挺

同六拾九兩位

(朱)「拾耆丁」
一六封度船砲耆挺

同百八兩位

(朱)「八丁」
一十二封度右同耆挺

同式百拾五兩位

(朱)「八丁」
一十八封度右同耆挺

同式百八拾九兩位

(朱)「拾式挺」
一右同一耳砲耆挺

同百六兩位

(朱)「四丁」
一八封度船砲耆挺

同百七拾四兩位

(朱)「拾五挺」
一小船忽砲耆挺

同六拾三兩位

(朱)「四挺」
一三十封度一耳砲耆挺

同百六拾式兩位

合テ五百八拾挺

此賦書は鹿兒島大砲鑄造所ニおゐて取調相成候もの也
弘化三年より嘉永六年迄右通出来、其後之所は分明な
らず、凡式百丁余も出来なるべし、

文書原寸 縦一四・五糎 横一六一・五糎

〇二五 文武精励風俗矯正ノ子弟教育ニ付齊興公
ノ諭書及家老ノ副書令達 二二通

二六 外舶来航ニ付石清水八幡へノ勅使祈願文

天皇我 詔止掛畏岐石清水尔御座留世 八幡大菩薩乃広前

尔恐美恐美 申賜止申久去天禄元年与始天奉出給布宇都乃

御幣乎吉日良辰乎 択定兵官位姓名乎 差使兵令捧持兵東遊

走馬調備兵奉出賜布掛畏岐 大菩薩平久安久聞食兵

天皇朝廷乎 宝位無動常磐堅磐尔夜守尔日守尔護幸倍給

比天下国家乎平久安久守幸賜_{止倍}恐美恐美_{毛美}申賜_{者久}申辭別

氏申久近者相模国御浦郡浦賀乃冲尔夷乃船乃着_{波礼}其来

由乎尋留交易乎乞_{止奈}申須夫交易波昔与_{信乎}不通国尔濫

尔許_{多万布}国体尔拘_{礼婆}輒久許_{倍事尔}非止許_{多万}衣糧乎

支濟給比船舶者飛帆天却還奴又肥前国_{毛尔}来着_{奈奴止}聞食須

利乎貪留商旅加隙乎伺乃姦賊加情突乃知利難_{岐乎}如何_{波尔也}

為_{止牟}瘡_毛寐_毛忘_{多万}時奈掛畏_岐

大菩薩此状乎平久安久聞食氏再来_{留止}飛廉風乎起志陽候

浪乎揚天速尔吹放知追退計攘給比除給比四海無異久天下

静謐尔

宝祚長久久黎民快樂尔護幸給比恤助給_{止倍}恐美恐美_{毛美}申給_波

止申

弘化四年四月二十五日

文書原寸 縱二七・七種 橫四四・九種

〇二七 仏英船琉球来着届書

二冊

〇二八 齊興公御心願一卷書拔

一冊

二九 嘉永改元ノ詔書及字義

二通

嘉永改元之詔書

詔唐堯之臨民也敬雖授時而未号漢武之御宇也、初以建元而紀年、是以經天緯地之君臣正承基之主、或堯時令而施化、或率旧章而改元、

朕以劣質泰嗣鴻業、或遵列聖之訓、偏賴良弼之力以施德義之政、弥致治理之風、宜改旧号以施新化、其改弘化五年為嘉永元年、主者施行、

嘉永元年二月廿八日

文書原寸 縱二四・四種 橫一七種

嘉永切環

宋書曰思皇孝多祐嘉業永無失

正三位行式部大輔兼大学頭菅原朝臣以長勘進

文書原寸 縱一六・一種 橫九・五種

三〇 齊興公從三位ニ御昇進ニ付近衛家其他

へノ御礼進物

近衛大納言様江

太守様より

宰相様從三位御昇進ニ付、近衛様江之御礼、御内使

右御内々御礼之廉

者を以被進向左之通

一縮緬二端

太守様より御内使者

料金三兩貳步

豎山武兵衛(利色)

一御着代五百疋

雅君様江

一羽二重三拾疋

料金九拾兩

一縮緬三反

料金五兩

小判
一金 貳百兩

一御着代貳千疋

一御着代千疋

信君様江

近衛左府様江

右御礼御使者勤ニ付、御内々被進候廉

太守様より

一銀貳枚ツ、

右は前以御願筋も有之候訳も相込、御内々御礼之廉

諸大夫衆

拾三人

一縮緬三端

料金五兩

一同拾五兩ツ、

一御着代貳千疋

御用人衆

壹人

六位衆
四人

一同老枚ツ、

御近習衆
三拾九人

中小性衆
四人

一同五兩ツ、

青侍衆
七人

御茶道衆
拾三人

一同老枚ツ、

御老女衆
八人

若年寄衆
四人

一同五兩ツ、

御中臈衆
拾五人

一同三兩ツ、

御取次衆
貳人

一青銅五拾疋ツ、

仕丁頭
貳拾五人

一同拾貫文

下部
四拾三人
相中へ

右

太守様より被成御祝被遣、又ハ被下候

一塩鶴一羽

一御小篋一

琉球製朱塗

一御文庫之内

紅白糖紗綾三端

左府様江

右御内使者被差登候付御内々進上

一御文庫之内

紅白糖紗綾二端

一御着代五百疋

大納言様江

右同断

一御文庫之内

八丈縞二反

一御着代三百疋

信君様江

右同断

一御太刀馬代銀一枚ツ、

御物調を以堅山武兵衛より

左府様

大納言様江進上

一千鯛一箱

一御反物料金百両

三条内府様江

右前以御懇配有之候付、御礼として御内々進上

一金子千疋

近衛様老女
村岡殿

右極御内々より被遣候

宰相様より御内使者

有馬舍人

一羽二重三拾疋

料金九拾両

一黄金百両

一御着代三千疋

左府様江

右は前以より御願筋も有之候訳相込、御内々御礼之廉

一縮緬三反

料金五両

一御着代弐千疋

大納言様江

右御内々御礼之廉

一縮緬二反

料金三両貳歩

一御着代五百疋

雅君様江

右御礼御使者勤候付、御内々被進候廉

一縮緬三反

料金五両

一御着代千疋

信君様江

右同断

一銀二枚ツ、

諸大夫衆

拾三人

右以下

太守様より被下候、前条同断

一御能装束一箱

一御着代五百疋

左府様江

右御内使者被差登候付、御内々進上

一氷砂糖一箱

御答礼ニ付消す

御同所様江（以上三行ニカカル〇アリ）

一御着代金百兩

太閤様江

一金子三千疋

諸大夫

牧式部少輔殿

一同千疋

右同

小林民部権少輔殿

右前以より厚御懇配候付、為御礼被進又ハ被遣候

一御太刀馬代銀壹枚ツ、

御物調を以

左府様

大納言様江有馬舎人より進上

一千鯛一箱

一御反物料金百両

三条内府様江

一金子五千疋

森寺因幡守殿

一同三千疋

丹羽豊前守殿

一同千疋ッ、

入江駿河守殿

森寺若狭守殿

一同千疋

村上左兵衛大尉殿

柳田加賀介殿

柳田李之允殿

村上大和介殿

岡田織部殿

相中へ

一同千疋

御近習衆
五人

青侍衆

三人

相中へ

右前以より御懇配被下候付、御礼として御内々より被

進又ハ被遣候

一千鯛一箱

一御反物料七千疋

東坊城前大納言様

一御着代三千疋

万里小路大納言様

一羽二重三反

内一反紅

一御着代五百疋

右之奥方様

右前条同断

一金子五拾兩

村岡殿

右極御内々より

一同五拾兩

大沢雅五郎殿

右同断前以より彼是御世話申上候付、極御内々より

一銀子拾枚

松室能登殿

右同断ニ付同断

一金子五千疋

森寺因幡守殿

右同断、分而御世話申上候付、極御内々より

以上、

文書原寸 縦一四・三糎 横四七六・八糎

三一 碓山将曹書翰 宛名不明

唐物其他ノ件

廿九日付之御懇書、去ル廿七日相届、是又細々拜見いたし候、貴所様弥御安泰被成御精勤、珍重奉存候、於当方御宿許御惣容様御揃無御別条、御賢息様方弥御安全御精勤ニ御座候、旁御懸念無御座、御休意可被下候、拟私話中公私ニ付、彼是御懇意被仰候、殊ニ出立前は品々御餞別等被成下、御懇情之程厚忝仕合奉存候、帰着則右御礼等深重申上筈御座候処、着涯よりいろ／＼繁雜ニ打過、何も不行届之至矢敬申上候、其段は御仁免奉希候、

一少将様御召仕女之儀ニ付、出立前御示談申上、
(寄物)

高輪様 思召付之筋にて、今一人被召仕候御一条ニ付細々被仰下趣承知いたし候、且此節山口五郎右衛門殿帰着ニ付、猶又御伝詞之趣、且其御許御形行等之儀も細々承知仕、品々御骨折御精勤之由、とふそ仙波など被仰談、近々御備相成候様、呉々も御働被下候様、爰

許よりも掛而奉願候、尤

(赤色)
中将様より猪飼氏へ

御直書之内ニも右之御一条御認有之、南部様ニ付御見分も被為在候得共、格別御氣ニ付候程之者も無之、段々御配慮も被遊候付、右之趣央殿より私へ申聞置候様之御文言拝見仕、奉恐入仕合難有奉存候、江戸広シといへとも、さてハ在少キものニ候、くれ／＼も御心配之程奉遠察候、且花印事も、御氣ニハ入候得共、いまた年若者故、彼是と御案しも被為在候由、乍憚御尤ニ奉存上候、今一兩年も相立申候ハ、御番も相勤申候ハ、猶更御意ニ相叶可申儀も可有御座哉、此一巻ハ乍憚上も下も脇々の付薬ニ而ハ参兼申ものニ御座候、いつれニも思召次第不被為在候而、強而御進メも仕兼候、此節ハとふそ二十才位より式三迄の人柄宜キものを、精々御探索被下候様、相願居申候、一林様・水野様・美濃部殿御役御免等之大変之一条形行且風評等之儀細々被仰越、且

少将様 御内沙汰等之儀、委曲承知仕候、達

御内聴候儀は、則申上置候、誠ニ大变到来ニ而

(前將軍徳川家齊)
大御所様薨御後、いまた御日数不相立候処、いろ／＼

と世上騒敷、実いつまらぬ事ニ御座候、当方ニ而取々様々風説、区々御座候、いつれを正説とも相分り不申候、一御内用一条ニ付、品々被仰聞趣承知仕候、保太郎ニも此節之御退役、又ハ転役等ニ付而ハ、力落之訳も有之候半、いろ／＼と爰許とも御案シ申上居候、

一山口氏・名越氏江御内々御取替等之儀も細々被仰下、委曲承知いたし候、且又幡印より御付届等之儀共品々申出、段々大粧成御品等御取入相成候段も承知いたし候、就而ハ御金も過分入嵩、御心配之程察上候、調所家へ御続金之儀も承知いたし候、

一唐物也荷行違如何、又ハ評価物等之一条ニ、追々御願立も有之候処、段々と御模様宜相聞得申候処、此節之公边退役等ニ付、決而暫ハ御沙汰止ニ相成申候半等之儀共、承知仕候、時節到来トハ申なから、困り入たる

仕合ニ御座候、唐物屯荷等は、至而大金之御品、長々片付方不被仰渡候而ハ、過分之御損失相成事ニ而、調所氏は勿論、其掛御役々実以心配ニ御座候、

一山口氏便より被仰下候平田仁左衛門品能被仰付度、且又伊集院源之丞一条も、委曲承知仕候、いつれ御都合を以奉伺、兩人共ニ下着之上、被仰付筋ニ取扱可仕候、平田儀ハ年功も有之、其上正道ニ何欤相守り、精勤之段ハ私にも兼而見聞仕居候付、委曲御内沙汰之趣承知仕候、追而何分可申上候、若其内

少将様御内沙汰も被為在候ハ、右之趣宜様御取成奉願候、山口氏別而元氣帰着ニ而、翌日引続連勤ニ御座候、至而壮健ニ御座候、且当方ニ而其外同席中無異毎勤御座候、乍憚御休意可被下候、

一其御許ニ而御門出入ニ付而ハ、其御許御発駕前ニ被仰出置候付、一統相慎候由ニ相聞得、爰許よりも仕合ニ相考居候処、間ニは不勘弁之儀も有之候哉ニ相聞得山口氏より細々直話承申候、就而は彼是と御配慮も被

為在候由、稀々馬鹿な事を仕出、こまりたるものニ御座候、とふそ此末御取締行届候様有御座度、奥向ニ而も吉井・二階堂毎々検通ニ相見得候哉ニ相聞得申候付則山口氏へ細々承候処、何も左様成事ニ而ハ無之由、

一度欤相付候哉ニ承申候、掛而之事ニ而、右通り虚実分り兼申候付、奥向へ一統静謐ニ有之候様、呉々もいたし度、乍御苦勞時々御声を御掛被下度、方々へも奥向御手許より事を破り候様成立候而不相濟事ニ候、併当時ハ御留守中御座候間、何も小水ニ而御取締行届申候半、来冬琉人被召列候節ハ、奥表とも大勢、其上やたらのものも多人數暫時は相詰候付、其節御取締向如何可有御座哉と、唯今より案し居申候、当方ニハ何も相変候儀無御座候、世上一統静謐ニ而仕合ニ御座候、

右公私用取交御答旁申上度、如斯御座候、猶期后雁可申上候、恐惶謹言、

六月三日

碓山将曹

「種子島六郎殿

追而、炎氣折角御厭御精勤專要奉存候、随而私

事無異毎勤仕候間、乍憚御放意可被下候、

(本文書ハ宛所、追而書ラ欠クタメ「島津齊彬文書」上巻補

遺参考ニヨリ補ウ。但、年代ハ天保十二年カ。)

文書原寸 縦一五・五糎 横三二・五糎

三三 江戸川上筑後ヨリ鎌田凶書へ

高輪邸竣成及斉彬公参観ノ件等

(端裏書)
「鎌田君」

二白申上候、寒冷之時季、折角御自愛被成度、專要

奉存候、扱其御許江御帰家之上は御役場を申、誠ニ

御究屈之程、奉遙察候、籠手さし原辺御遊行之折と

ハ、天地之違と折々御噂申上候、当時爰許外方も大

静謐ニ而、仕合ニ御座候、乍然出火追々相始り、毎

日毎夜兩三度位ツ、板木打ならし申候、しかし遠

方ニ而、先ハ安氣ニ御座候、

一爰許当冬ハ早く寒氣甚敷、もはや大寒同前之肌持ニ

而、綿入も三ツ位着用之事ニ御座候、夫故毎日毎晩
程ニ出火有之候得共、遠方ニ而仕合ニ御座候、

一簡致啓達候、寒氣之砌御座候処、弥以御安康、長途無

御障御通行、十月廿日御安着被成候由致承知、目出度御

儀奉存候、久々振り之御帰館ニ而、御家内様方御怡之程

奉遠察候、然は於其御許

太守様益御機嫌克被遊御座、恐悦之至奉存候、且御式事

并御覽事ニ付、首尾能被為濟、奉恐悦候、左候而下瀉

御巡見去月廿一日より 御発途被遊、指宿二月田江

御入湯茂被為在筈之由、いまた格別之寒氣も有御座間鋪

候ニ付、能御都合之御事と奉存候、就而は豊後殿御供之

由、心配之事ニ奉存候、於爰許

宰相様益御機嫌克被為 入、其外様方御同断ニ而、恐悦

御同慶奉存候、高輪御作事も折角之御急きにて、最早追

々相片付候ニ付、十二月十八日御引移可被為 在旨も被

仰出、公辺江も御届被仰上申候、友野始御作事奉行別而

大心配ニ御座候、且 日光御宮御修甫ニ付、御上納金も

去ル廿六日迄ニ而、御皆納茂相濟、私共ニも別而致安心候、右ニ付 御參勤之御時節御伺御座候処、右御上納ニ付御用捨ニ而、来子七月中御參府被為 在候様被蒙 仰重疊恐悅之至奉存候、此節は近江殿江御供被仰付出府之上、直ニ相詰候様ニ被仰付、私江交代も被仰付候段被仰渡、難有仕合奉存候、八月中旬方ニは交代ニも可被成哉と相考申候付、只今より指を折奉待上事ニ御座候、爰許御屋敷何方も静謐ニ而、別而仕合之至御座候、別紙無抛御願申上越度儀御座候故、乍序右御祝儀旁為可申上如此御座候、以上、

十一月廿九日

川上筑後

久封



鎌田図書様

文書原寸 縦一七糎 横一二・五糎

〇三三 齊興公隱退御決意一件

朱衣肩衝茶入下賜

三四 島津齊彬公御書翰別啓 宛名不明

齊興公官位御昇進願ノ件?

(封紙ウツ書)

一別啓

御直披

ノ

┌

別啓、一昨日は細事被仰下忝、(同部正弘)辰之義五日夕ニ留守居呼候而、何日比ニ本願差出候や、内々承り度との事ニ御座候由、一昨六日夕返答申候は、また国元往返無之廿日比は往返可有之、其うへ日限治定可申上、且事ニ寄候ハ、来月ニも可相成との返事申遣候由之処、委細承知之段、且差出候四五日前に、申聞候様ニとの返事御座候趣、昨七日朝跡以承り申候事、
一実ニ往返は廿日比ニ可相成候へとも、内実は例之無量寿院之様子まち候訳ニ御座候、国元一門着おそくも来二月十日比迄に無相違着可相成、十五日御礼ニ間ニ合可申と奉存候間、当月廿四五日比本願差出候様差図有之、来二月朔日後ニ願濟ニ相成候へは都合よろしく奉

存候、

一 中山も是迄通差図可致、且政事向も定例之外は万事心添可致との事ニ而、小子より願候様申候而、願候而聞濟ニ相成申候事、

一 右之通故、(齊興隱居願)本願濟之上か、御礼濟之時分ニ而も、中山之義、且政事向共差構不申様、万事美の(黒田齊傳)・南部可申談

旨急度出不申候而は中々六ヶ數と奉存候、其節役人等も是迄之もの共不宜聞得も候間、人撰致候様ニと書付にて出不申候而はむつかしく、又美・南江も万事相談

いたし候様ニ被仰付度奉存候、美・南之義は是非ノ奉願度候事、

一 高輪之義も、(齊興)差して高輪と申事無之候而はむつかしくと奉存候、

一 将等之事人撰ニ出候後、南より承候処にて、辰之口氣(島津久徳)

ニ而早く差下シ候様ニ可仕、又其節南と申談候様可仕候、

一 右之条々御勘考可被下候、誠ニ申上兼候へ共、左様無

之候而は中山并ニ政事等とても所置むつかしく、四五

年も治定ニ相成候上は、其節之様子ニ而宜敷候へ共、

此度之処は前文通ニ不相成候而は、滞留人其外むつかしく奉存候、余り申上過恐入候へとも、打明奉申上候、

一 右様申出ニ相成候は、御礼迄濟候方万事別而都合も宜敷御座候事、

一 小子御いとまも二月廿八日比ニ願候様ニと、(御礼と)此義もさそい無之候而は出来不申候事、是は本願濟直ニ出不申候而は手当不都合ニ御座候事、

一 懐紙差上ヶ序宜敷御座候間、直ニ奉差上候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一卷第四三二号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七糎 横九四・五糎

〇三五 齊興公ヨリ久光公へノ密書

齊興公隠退ニ付

〇三六 齊彬公襲封ニ付家老以下ヘノ諭書

拜敬獻書

〇三七 家老ヨリ一門方ヘノ通達

齊彬公仰出ニ付

薩摩少將閣下執事は香聞觀天地而狹江河、登鍾山而卑丘陵、聽於承雲・六瑩而後知東野巴人之鄙俚也、觀於我

〇三八 齊彬公ノ諭書ニ付家老ヨリ大身分其他ヘノ伝達

日出処天子大統綿連齊穹壤、無有窮極而後知四夷八蛮之為臣妾圍隸也、故邦國之美莫美於吾

中国焉、君王之之尊莫尊於我

〇三九 久光公ヨリ齊興公ヘノ願書

齊興公ヨリ久光公ヘノ返書

二通

久光公ノ第二子右近養子ノ件

日出処天子焉、道德之大莫大於吾古道焉 嗟夫

皇室中微雖道之不絶若線、然文獻有微可概而言也、是

香恭稽 神典、惟昔天地剖判 中国、肇立我

皇祖、天神寔經緯綱紀之而、使授我

皇孫、以惟神之道、以媻掄黎庶照臨六合之内、是以自

皇孫恭奉

天神之明命、降自高天而正 天極于高千穗宮之後、至延

喜天曆歷世数千歳

聖子神孫允武允文繼纂鴻業、德沢匹天地、光明比日月、

凡百臣連伴造等、世皆以 神明之胃財成輔翼、以贊寶

四〇 六人部美濃守是香ヨリ島津齊彬公ヘノ上書

齊彬公ノ徳ヲ頌ス

(表紙)
言 上 書

美濃守行從五位下六人部宿禰是香誠恐誠惶頓首、百

宇之政、祭之与政一致、神之与皇无别、如穆在天
上之礼、是以不吉之教、無為之化、弥漫中国而、四夷
八荒舟楫所通、雨露所零、天地之所疇載、雖跂行蠃蜚
蠕動之物、无弗陸攝水慄來賓嚮服矣、蓋上世未有外国
之教也、其有之自

明宮御寓天皇之時而、始三韓入貢獻論語及博士王仁、於
是乎有周礼之教焉、爾來三百祀、至

金刺宮馭宇天皇之朝、百濟王聖明献佛像・經論、於是乎
有釋雲之教焉、夫惟先聖含弘光大之德不忍、以外国
之教遺棄之、欲挾其可而用之、是以有遣隋唐之使焉、
自此而後二教沈溶淫霽氾濫于豊葦原、迺易我古学以漢
字、而後天下之文始變矣、暨至

淡海朝廷而始有大学之設、

寧樂朝廷以還延天之際、于是為盛、聖主賢臣世作矣、
宗室則有若 尽敬王・万多王・葛原王及諸源公子、前
後中書王等、股肱良佐則有大織冠淡海公・和氣公・菅
公・貞信公・九条右府等、良史之才則有若淡海三船・

多安麻呂・齊部広成・三善清行等、凡斯数公、皆玄鑑
洞達、妙執古道、峻德文明 敬服膺天、職実配食、諸
輔相

皇孫護天蹕、排闥闔蹈倒景、驅煙霧降乎・霄霓上者而无
愧宜乎、其銘勲績于金石而極千万世、頌其靈德之不衰
也、是時也、朝有大学図書之諸寮、有觀学田百度飯以
供生徒、又有淳和塾学分彰觀学々館、弘文諸院実維源
・橘・菅江・藤原・和氣等子弟之所講習而、至夫鎮西
征東之府及五畿七道之藩屏无不有学焉、下毛足利夷野
相公所創造遺蹟纔存、可以比餽羊也、已若然者皆所以
張皇古道茂育人變換風俗、雲行雨施、贊乎 聖皇之化
功也、慎權量疎法令薄賦稅微役不屢發、民俗敦厯万物
蕃殖而、天下帰仁、蓋雖不及于太古、無為之治蕩々乎
郁々乎、可謂至德而已矣、保平以降干戈数動喪乱无正、
乾綱解維 皇室板蕩、既而暴賊窃命群雄哮闕、諸官咸
失其守而、大学等数寮鞠為郊藪麋鹿之場、若夫 神明之
冑八十伴連氏多離散分处于荒陬僻遠幽閑殊俗之郷而、

皇政殆乎熄矣、

建武天子以聰明英武之性、慨然有志於復古、震怒電激義
勇雲聚耄戎衣而、大慈授誠海內殆致平定、無幾中興業
墜南巡之駕不返、可不謂大衰哉、雖南北講和 天統歸
于一、然狡奸猶尚當 朝弄、窃大權暴戾貫盈、黎民不
聊生者二百又余歲、古道庶幾于顛墜矣、於是 天神降
靈篤生、泰巖・豊国二公襲用皇師、恭行天誅戡定禍亂、
威稜震蕩于夷蛮之外、蜻洲始致少康而、未暇攷礼典序
度制修文德也、

慶長天子以夫梵漢之教闡塞海內、举世沈溺於詭幻僞怪跋
躍之術而、不知覺悟於吾惟神之本教々々、亦靡濫錯紕
无有条貫統紀而深憂之、欲放僞怪闢邪術、正古道以大
承

先聖之德、爰 詔鑄神代紀・職原鈔等諸書、以公寓內古
道之興実胚胎于此矣、当是時東照公蔚興吾孀、对揚
聖天子之昭明大德、撥乱反正主崇 皇室、興廢繼絶講論
文芸遍募朝野、名山之闕藏広索玉牒石紀之、遺逸孳々惟

恐不及、於是 朝廷文物制度爛然多復旧、觀偉哉、而
尾張敬公・常陸義公克纂述先公之志憲章、 先聖編修
朝廷大典而古道復興、元録(録)中有荷田東麻呂者、嘗主京
南稻荷神社、篤信好古啜嚙、自振請創国学校于洛南之
東山、 官命許之事未果而没、有加茂真淵・本居宣長
・平田篤胤相踵而出、皆振布衣綱覽 皇典、以祖述
神皇恢復古道、為己任著書数千卷、蕩滌儒仏之末弊、
猶決江河而放之東海也、濯濯 神典之玄妙、猶除雲霧
而瞰皦日也、然後天下々々、始知嚮本教矣、斯四子也、

雖曰真以躬殉道而有勲勞于蜻洲者可也、是非是香之私
言也、是香愾而無他才能幼受業、篤胤氏奉頭幽無敵之
道、朝多焦思苦心、惟探古紀弘本教之務、猶饑而隱食
寒而求裘懦懦焉、常不能紹前修之志、是恐是香伏惟方
今

天子聖明俊傑滿 朝、德教沛然洋溢於八荒、蠢彼夷蛮重
詆貢獻、府無虛月万物百族各無弗得其所、実万世一時
難遭逢之嘉運也、而 堂々

天朝蓋天下所取楷式也、而猶有古字之贗古道之不明、天

聞、

下職此之由、愚竊惑之愚甚憾之、蓋不通神典則、先聖之道不明、先聖之道不則、身不可得而脩、身不能脩而為教、於家國者未之前聞、而沉於天下乎、是古字之贗所以萬々不可已也、或曰異哉子之言、吾聞古有漢字而未聞有國字也、而子獨齟齬求之、非狂則妄矣、曰嗟是何言、夫古之學者本其本矣、今之學者二其本矣、古之學者雖學絃、彼我識貫梵漢、然先聖必使之講神典編國史撰法令·格式·神典·國史則神皇之事也、法令·格式則皇祖之政也、無非神聖之道者是非一本而何不知、今之學者能如此乎否、曰不能、曰然則國字之不可止亦明矣、是香側聞

閣下抱曠世奇才賢而好學、尤留心我古道、昧且不顯厲精求治、闔域之士庶如挾纊焉、是香西望欣然私慶曰、何其德教之至於斯也、夫惟如此、其復本教興字非閣下、則不能、以故欲敢陳一言於執事之前、而未由也、會大藩學生本田恒誠來問道于不肖、是香於是倍

閣下之盛德躍然不自禁、迺因恒誠拜稽首謹寫、丹衷以布諸下執事、伏願執事留心照察之聞、大藩邸宅在洛東、聖護院邸乞賜、諸吾党友生小子使是香等与二三立志議上、襲先聖之制、下攷之列藩特設贗舍、置皇典子史以下数万卷而建學政嚴制令、公選善才任博士輯錄史策、立詞文之科第以黜陟生徒、永世無顛覆之憂焉、則古道之郵隆亦不止、此吾安知其不方軌駢跡于我、泰古無為之治哉、又安知神風之激揚溥暢、不以感化彼臣妾圍隸之邦哉、若然邪則吾以見

閣下之德、亦与夫寧桑延天之名公鉅卿相詡頌不已也、今夫赫々、大藩而加以

閣下之賢、經始一贗舍、譬如振稿而已、以是香察之是不翅賜諸吾党之友生小子而、賜諸吾党之先師也、不翅賜諸吾党之先師而賜諸天下有志之士也、不翅賜諸天下有志之志而、所以上對厲先聖之盛德鴻業、下為万世毗邦憲贊皇化者、將於是乎在焉故此舉也、豈可不

謂之蓋世之偉績哉、如是香也不肖幸得就其末光、以効涓滴之報列微名於不朽、則亦執事之賜也、此所以欣然私慶繼、以腐談媿々不能自罷也、伏願執事恕其狂妄顯越之罪而、曲察採納焉、是香瞻望閣不勝懇悃眷恋之至、是香誠恐誠惶頓首百拜敬白、

嘉永五年夏六月

冊子原寸 縦二六・五糎 横一九・五糎 九枚

四一 齊彬公參觀途中播州正条ヨリ久光公へ

(封紙ウツ書)

子九月御道中より

周防殿

申入

薩摩守

(封紙ウツ書)

周防殿

申入

薩摩守

一筆申入候、追々秋冷相成申候処、弥御平安珍重存候、

道中無滞今夜正条江致止宿候、扱江戸ニ而も相替儀も

無之段申来候、廿二日之風雨ニ而、串良辺余程痛ミ候

由、先便申来候条、折角無手抜救助等行届候様ニ、序

之節豊後江も御達可給候、同人江は此度書面不遣候、

其外ニも大損之場所も同様之事ニ御座候、道中筋も久

留米・備前は大いたみニ相見得、備前は三丈余之満水

之よしニ而、十万石余之損失と承り申候、作州・出雲

は猶更大破之趣、死人馬大造之由ニ相聞得申候、江戸

江十日十六日兩日風雨有之段申来候、倒家等も有之由

ニ御座候、道中天氣都合別而宜敷、終日雨は一度も無

之候、式日延ひ候而漸々今日着ニ相成候、其地江は余

程延着ニ相成候と存申候、橋口彦助之義、南部よりも

申来候得共、委敷訳は不相知候へ共、古谷堅助と引合

候訳ニ而も有之哉ニ被存候、堅助義も急病ニ而死去と

申来候、いつれ江戸着之上、委敷承り合せ可申遣旨、

是又豊後江御はなし可給候、一体豊後江も書面遣候筈

なから、兩三日齒痛旁不申遣候、

も申候筈ニ御座候、此間參候節、鳥渡船之事申候へは、

至極承知之様子ニ御座候、西丸之一条も昨日御城江掛

合申候廉之方ニ、今一応取計候積ニ申談シ置候、

一大目付之義未タ御都合無之候間、伺不申候、

一其外御申越之趣委細心得申候、先日之御答旁、早々如

斯御座候、恐々頓首、

薩摩守

十一月二日

周防殿

猶々御自愛專一ニ存候、此身無事ニ御座候、久

々之參府故、別而取込未タ少しも閑暇無之候、

当地御好之品も御座候へ、無御遠慮承度候、

以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一卷第四五七号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・八糎

包紙原寸

縦二九・八糎

横 一三・一糎

横 三三・五糎

四三 江戸斉彬公ヨリ久光公へ

外艦防禦委任ノ件等

(包紙ウツ書②)

御答

薩摩守

子十一月

(包紙ウツ書①)

周防殿

薩摩守

嘉永五子十一月晦日

一筆申入候、寒冷之節愈御平安珍重ニ存候、此辺無事

ニ御座候、然は阿部より封書ニ而異国之義申来候間、猶

又取扱方も伺候筈ニ御座候、封書写は家老座江遣申候、

何分不容易時節と存候、万々一下国前異船等參候へ、

必ず無御遠慮御差はまり、豊後等江可被仰談候、

一大目付之儀も永江迄申談シ、以御都合申上候筈御座候、

一西丸之儀近日阿部江申談シ候筈ニ相成申候、

一御本丸・御数寄屋・御宝蔵三棟之内、一ツ之御土蔵廿

七日夜失火、焼失相成申候、火之縁無之場所別而不審

と申事ニ御座候、御代々之御筆類并ニ 勅筆類有之御

藏之よしニ御座候、

一此品籠末ながら御目ニ掛申候、寒中御見舞旁申入候、

恐々謹言、

薩摩守

霜月卅日

周防殿

時氣御厭專一存候、以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一巻第四六〇号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・八種 包紙原寸 ①縦三〇・三種 横三七・三種

横 九六種 ②縦二八・三種 横四〇・九種

四四 奥医師河村宗澹家格届書

(表紙)
上

河村宗澹

一安永七戌戌年六月廿三日、矢野清左衛門御取次を以新

規被召抱候、

御側医師

河村正安

右之通被仰付、御医師上席被 仰付候、左候而年頭五節

旬月次暑寒出仕間ニも見合伺 御機嫌申上、御奥江茂同

断罷出御窺被仰付候条、早速より帯刀乗物并ニ薬挟箱為

持候様可致候、長柄之儀は御格式も有之事ニ候得共、外

宅ニ被召置御外聞ニ茂相掛り、其上格別之御取扱ニ而被

召抱候付、内外共無差別相用候様被仰付候、

六月 左中

一御馬廻格式

一高三百斛

但物成を以被下置候、

河村正安

右は家内共御普代被 召抱格式被下方、右之通被 仰付

候、左候而当分之住宅ニ而是迄通世上療治方手広出精、

覚

猶又御用立候様可心掛旨被仰付候、

六月 左中

一此後宗澹と名替被仰付候、年月相分り不申候、

一天明六年四月六日、紀殿御差図町田主馬御取次ニ而

御広敷頭格被仰付候、

一寛政五丑年正月廿八日、大炊殿御差図谷村孫右衛門御

取次ニ而一代小番被仰付候、

一文化二丑年二月廿二日、勘解由殿御差図諏訪甚太夫御

取次ニ而代々小番被 仰付候、

一同年二月廿九日病死仕候、

嫡子
河村恭順

一享和三亥年五月朔日、勘解由殿山田権右衛門御取次ニ

而奥医師被仰付、御役料米被下置候、

一文化二丑年四月廿日、勘解由殿御差図諏訪甚太夫御取

次ニ而繼目被仰付候、

一同日亡父勤功ニ付格別之以 思召、捨人賄料被下置候、

一同年五月四日、勘解由殿御差図諏訪甚太夫御取次ニ而
代々小番江御番入被仰付候、

一文化八年未五月九日、御広敷御用人格被仰付候、右近

殿御差図富山逸見御取次、

一文化十一年戌正月十一日、典膳殿御差図富山逸見御取

次ニ而、式捨人扶持御加扶持被下置候、

一文化十二亥年九月十五日、右近殿御差図向井十郎太夫

御取次ニ而御側役格被仰付、高九拾石被下置候、

一文化十四丑年三月十三日、御太刀進上ニ而御役之御礼

申上候、御奏者向井十郎太夫、

一文政七申年十一月朔日、美濃殿御差図高橋甚五兵衛御

取次ニ而御側御用人格被 仰付、御役料高百四拾石被

下置候、

一文政八酉年正月廿七日、御太刀進上ニ而御役之御礼申

上候、御奏者種子島六郎、

一文政十一子年十一月六日、病死仕候、

養子